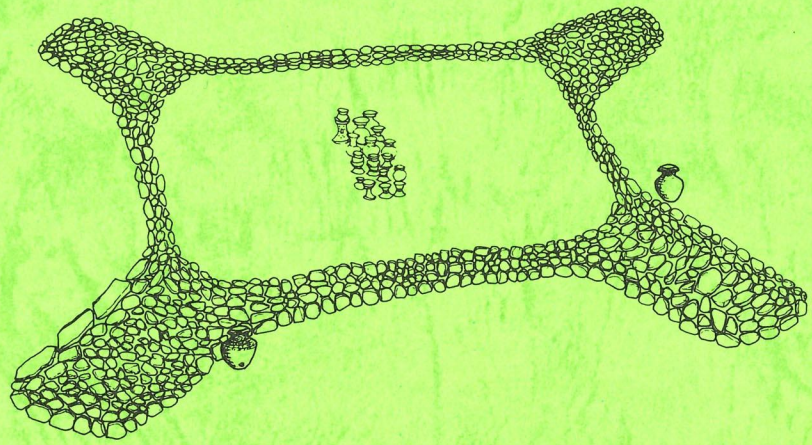
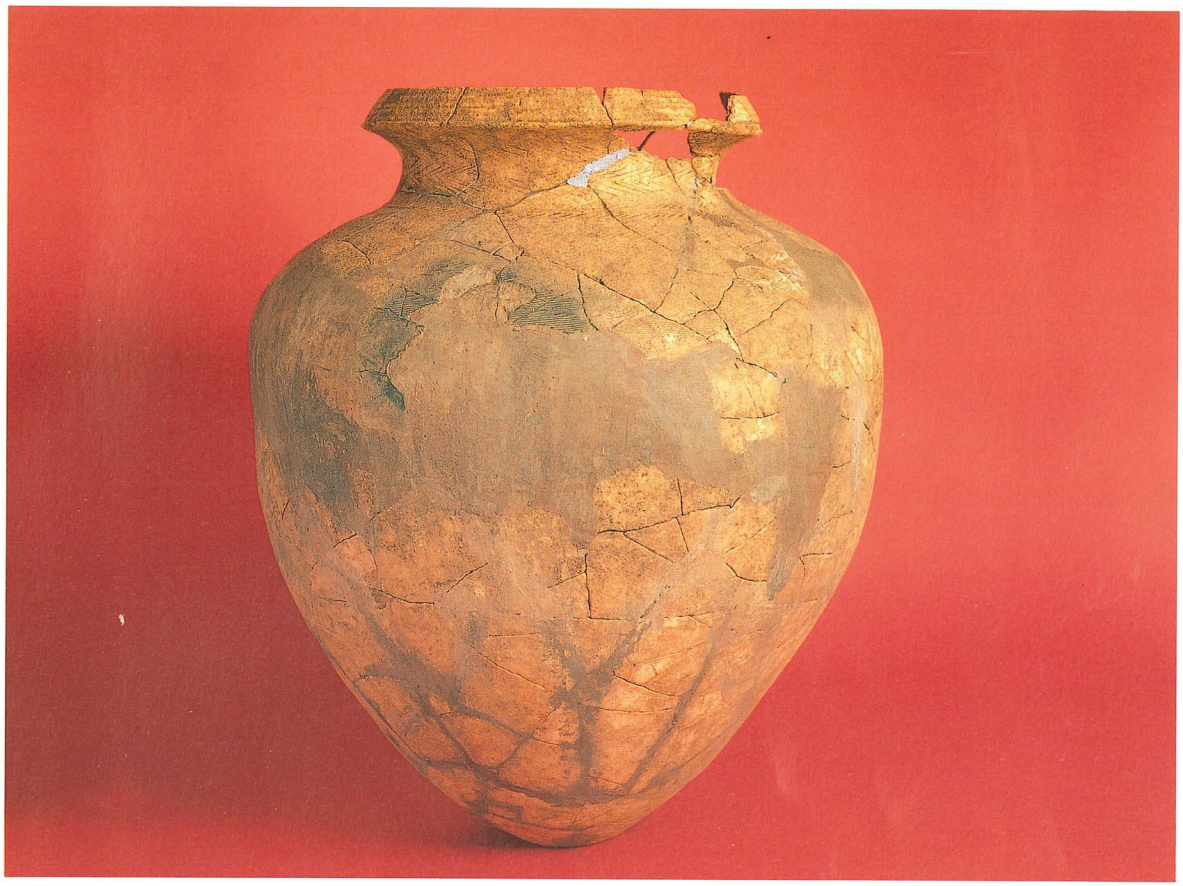
文化財愛護
シンボルマーク

間内越（まないごし）1号墓
間内越（まないごし）遺跡



1989年3月

松江市都市整備部計画課
松江市教育委員会



▲南西突出部出土壷

間内越１号墓全景▼

例　　言

1. 本書は，昭和62～63年度に実施した，島根県松江市矢田町の都市計画道路3.4.7号山代矢田線改良工事に係る「間内越1号墓・間内越遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査は松江市教育委員会が松江市都市整備部の依頼を受けて実施した。発掘調査の組織は下記のとおりである。

依　頼　者　松江市都市整備部　部長　森　　弘武（63年10月まで）
〃　江角　義明（63年10月から）
同事務局　計画課　課長　岡　　栄（63年3月まで）
〃　加原　保則（63年4月から）
施設係長　斎ケ原重利（63年3月まで）
〃　古藤　安正（63年4月から）
技師　若林　三成
〃　金津　洋一
〃　松本　純一
管理係長　柳浦　孝行
主事　吉岡　弘行
〃　諏訪部陽子
発掘調査主体者　松江市教育委員会　教育長　内田　　榮
同　事務局　教育次長　大谷　利夫（63年3月まで）
〃　菊地　義治（63年4月から）
社会教育課　課長　野津　久夫
文化係長　岡崎雄二郎
主事　中尾　秀信
〃　吾郷　雄二
〃　寺本　　康

発掘調査担当者及び調査員

昭和62年度　試掘調査　社会教育課　主　事　吾郷　雄二
計　画　課　臨時職員　大国　真二
昭和62年度　第一次調査　社会教育課　主　事　中尾　秀信
〃　〃　寺本　　康

	計画課	臨時職員	野津　修
昭和63年度　第二次調査	社会教育課	主　事	中尾　秀信
	計画課	嘱託員	今岡　一三
	〃	〃	青木　博

3. 調査の実施にあたって，次の方々の協力と指導を得た。記して感謝の意を表する次第である。

島根大学名誉教授山本清氏、島根大学助教授渡辺貞幸氏，島根県教育庁文化課埋蔵三係長卜部吉博氏，同課埋蔵一係文化財保護主事松本岩雄氏

4. 出土遺物及び図面の実測・浄書は中尾と今岡が行った。
5. 出土遺物の写真撮影は中尾が行った。
6. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。
7. 本書の編集・執筆は昭和63年度の担当者が協議してこれを行った。

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗栱（ときょう）、すなわち斗（ます）と栱（ひじき）の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。

文化財愛護
シンボルマーク

目　　次

Ⅰ．調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ．位置と環境 …… 2

Ⅲ．調査の概要 …… 7

1. 試掘調査 …… 7

(1) 平所遺跡について …… 7

(2) 間内越遺跡について …… 10

2. 間内越１号墓 …… 10

(1) 立　　地 …… 10

(2) 墳丘の構造 …… 12

(3) 突出部と貼石の構造 …… 12

(4) 遺物の出土状況及び埋葬施設 …… 16

(5) 出土遺物の概要 …… 17

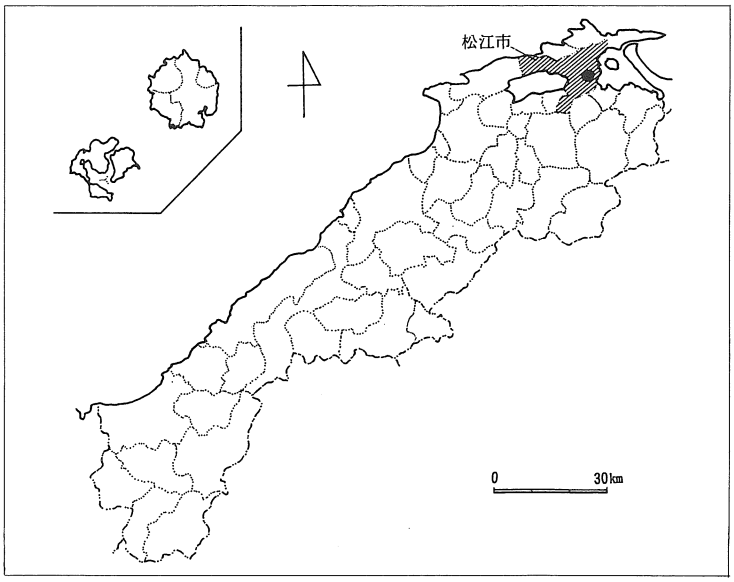
3. 間内越遺跡 …… 29

(1) A. 地　区 …… 29

(2) B　地　区 …… 31

Ⅳ．小　　結 …… 39

付編　松江市矢田町来美の四隅突出型方形墳丘 …… 49



Ⅰ　発掘調査に至る経緯

昭和60年10月，松江市教育委員会では開発事業にかかる事前の発掘調査を将来にわたって把握するため，「公共事業計画の調査」を松江市の開発関係部局に照会した。

回答のあった事業のうち，特に「山代矢田線改良工事」については，昭和61年６月に分布調査を行ったところ，計画区域周辺に平所遺跡・間内越遺跡が存在することが判明したので，事業課である松江市都市整備部計画課と協議の結果，昭和62年４月に試掘調査を行って遺跡の有無を確かめることとなった。

調査の結果，平所遺跡は土師器，須恵器の小破片が多数出土したが，遺構が明確に検出されず，また後世２ｍ以上にわたって盛土が施されて遺構の確認が出来ない地点もあったので，試掘調査にとどめることとした。

間内越遺跡は，低丘陵の突端で２段積みの石列が検出されたほか，丘陵北西斜面には多数の土師器と柱穴状のピットが検出されたため，全面的な発掘調査を行い遺跡の価値を確かめることが必要となった。

昭和62年10月，本遺跡の所存する丘陵突端部の石列の確認を優先して本調査を開始した。その結果それぞれの隅が対角線方向に突出した「四隅突出型墳丘墓」と呼ばれる極めて特異な形態の墳墓であることが判明した。また，丘陵北西斜面には多数の柱穴状のピットと

第１図　調査位置図

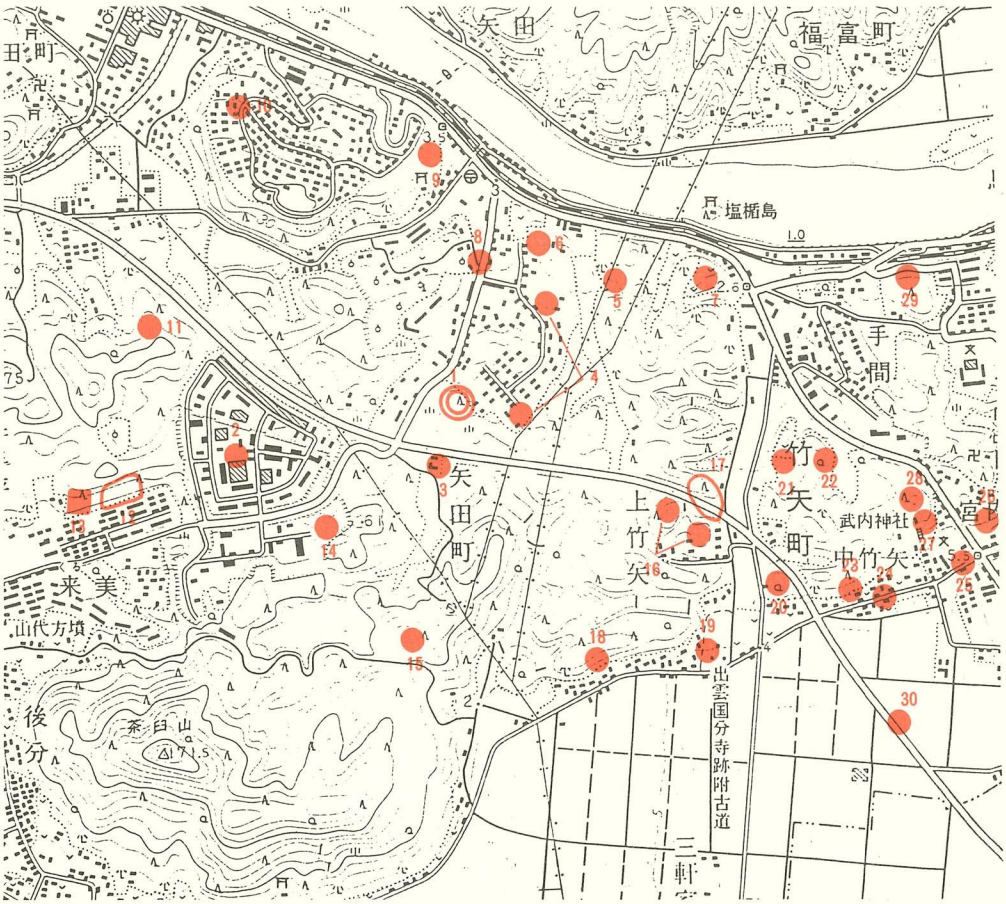
方形の落ち込みが検出され，住居跡の可能性があるものと判断されるに至った。

松江市教育委員会では，本遺跡が前述のように重要な墳墓であると判断されたので，保存に向けて計画課と協議を行う一方，調査にも慎重を期するため，本年度はこの墳丘墓の調査を優先し，明年度は引き続いて北西斜面の調査を行うこととし，翌昭和63年８月まで調査を行ったものである。この間，間内越１号墓については市計画課及び関係各位のご尽力により設計変更が行われて工事区域から除外されることになったことは幸いであった。

現場調査期間は以下のとおりである。

昭和62年４月６日～昭和62年６月15日（試掘調査），昭和62年10月19日～昭和63年２月25日（第一次調査），昭和63年７月１日～昭和63年８月22日（第二次調査）。

Ⅱ　位置と環境



第２図　周辺の遺跡分布図

間内越遺跡（間内越１号墓を含む）は，松江市の東南部に展開する意宇川下流平野の北部丘陵地帯にあたり，東から西に派生する低丘陵先端部分に位置している。その所在する地籍は松江市矢田町字間内越537－１番地である。

本遺跡周辺には，意宇川下流平野を中心として縄文時代からの遺跡が多数存在している。

縄文時代の遺跡としては，**25竹矢小学校校庭遺跡**・**8保地遺跡**があり，前者は前期の爪形文土器を出土しており，当地区で最も古い遺跡である。

弥生時代になると，遺跡も増加の傾向をたどるものの，集落跡で発見されている遺跡は非常に少なく，前期から後期にかけての集落跡として，**30布田遺跡**が代表的である。その他に中期末から後期前半にかけての竪穴住居跡１棟を検出した**21長峯遺跡**や，本遺跡に隣接する所で的場式土器を出土した玉作工房跡等を検出した**3平所遺跡**が知られている。墳墓では，後期後半に入って**26的場遺跡**の土壙墓や，本遺跡にみられる山陰地方に類例の多い四隅突出型の**2来美墳丘墓**の出現をみるのである。

このように，弥生時代に入ると，多数の遺跡が意宇平野の北辺に限らず，中央部や南側へと分布の広がりをみせ，集落としてはその実態は明らかでないが，四隅突出型墳丘墓という特異な形態の墳墓を築いていることなどから，弥生期において有力な首長が誕生していたことをうかがわせる。

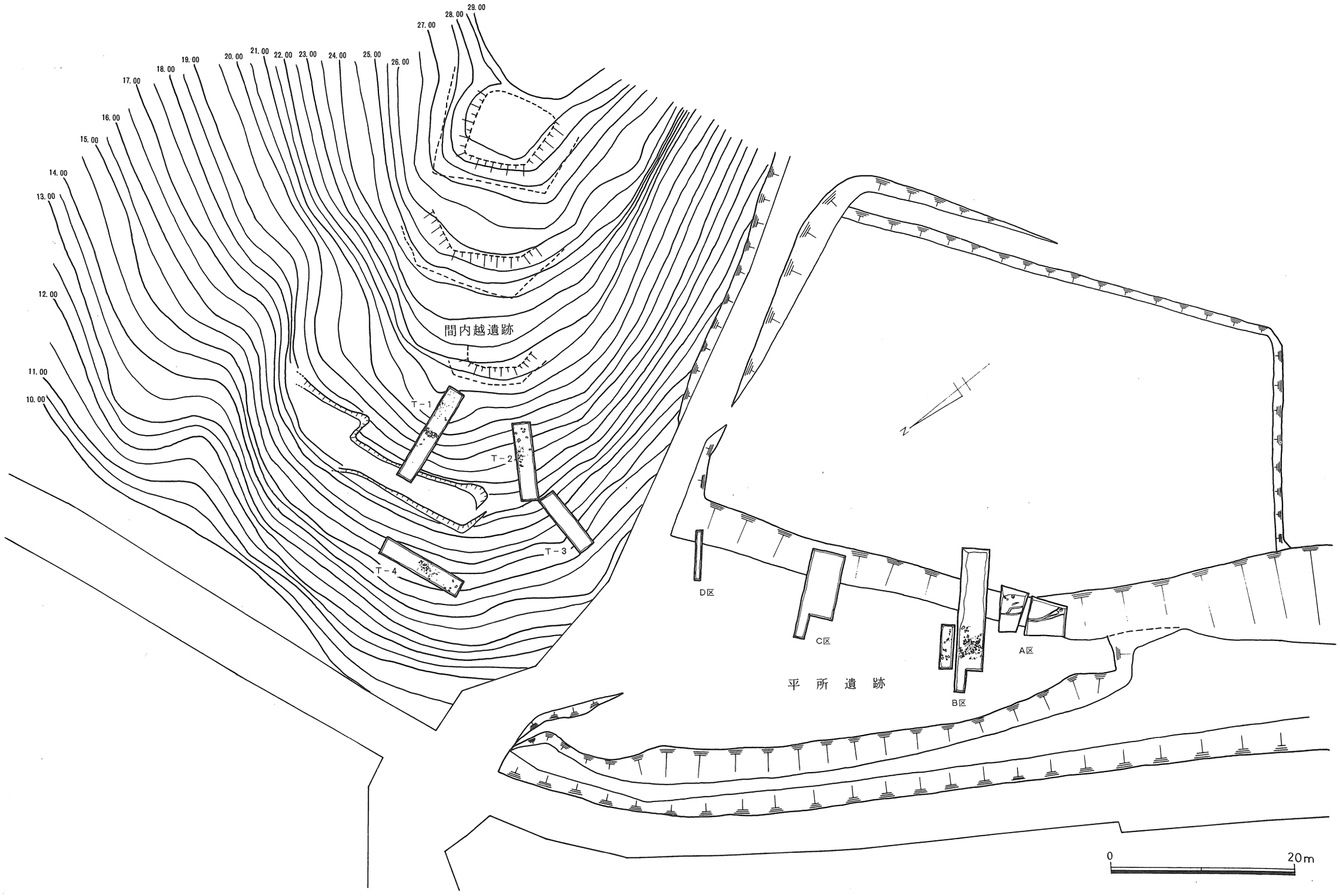
古墳時代に入ると，前期ではあまりみられなかった古墳が，中期以降になると，大橋川南岸の丘陵上や意宇平野北部の丘陵上に出雲地域では大型の部類に入る古墳が次々と築かれる。大橋川南岸の丘陵上では，**5手間古墳**（全長約70ｍ，前方後円墳），**4井ノ奥4号墳**（全長約57.5ｍ，前方後円墳），**9石屋古墳**（一辺40ｍ，方墳），**7竹矢岩舟古墳**（全長約47ｍ，前方後円墳）などがそれである。意宇平野北部では規模は若干おとるものの，**18上竹矢古墳群**，**20中竹矢古墳**などが築かれている。

後期になると，**14十王免横穴群**などのように複室構造をもつものや，玄室の形態が家形を呈するものなどバラエティーに富んだ大規模な横穴群の盛行が認められる。これらからみて，この地域が古代豪族にとってかなり重要な位置を占め，その後の出雲地方の中心的位置を占める基盤がこの時期に形成されたものとみることが出来る。

奈良時代に入ると，平野の北辺に，**19出雲国分寺**，**24出雲国分尼寺**が建立されており，また，これらに関連する瓦窯跡もみられる。これらと相対するように平野の南側では，出雲国庁が設けられ，名実共に出雲地方の政治，文化の中心となっていくのである。

第１表　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	概要
1	間内越遺跡	松江市矢田町	墳丘墓・住居跡？	四隅突出型墳丘墓１，不明３加工段，遺物包含層
2	来美墳墓	〃　〃　的場	墳丘墓	四隅突出型墳丘墓１，消滅
3	平所遺跡	〃　〃　平所	玉作跡	竪穴住居跡（玉作工房跡）４埴輪窯跡１，溝状遺構１
4	井ノ奥古墳群	〃　竹矢町井ノ奥	古墳	前方後円墳（57.5 m），方墳３
5	手間古墳	〃　〃　手間	古墳	前方後円墳（70 m），埴輪
6	荒神畑古墳	〃　〃　井ノ奥	古墳	もと一辺 30 m前後の方墳か，中期円筒埴輪滑石製有孔円孔
7	竹矢岩舟古墳	〃　〃　竹矢	古墳	前方後円墳１，船型石棺，埴輪
8	保地遺跡	〃　矢田町保地	散布地	縄文土器，弥生土器，石鏃
9	石屋古墳	〃　東津田町石屋	古墳	方墳１（40 × 40 m）
10	東光台団地古墳群	〃　〃　〃	古墳	墳形不明，箱式石棺，消滅
11	南外古墳群	〃　〃　南外	古墳	前方後方墳１（20 m），方墳１（10 × 10 m）
12	来美廃寺	〃　矢田町来美	寺院跡	礎石，瓦類，須恵器
13	来美遺跡	〃　〃　〃	散布地	
14	十王免横穴群	〃　〃　十王免	横穴群	37穴（27穴残存），組合式石棺，陰刻壁画，金環，その他
15	廻田古墳	〃　〃　〃	古墳	前方後円墳１
16	才ノ峠古墳群	〃　竹矢町才ノ峠	古墳	前方後円墳１，方墳１
17	才ノ峠遺跡	〃　〃　〃	集落跡	掘立柱建物跡16，住居跡状遺構土壙等
18	上竹矢古墳群	〃　〃　上竹矢	古墳	前方後円墳１，前方後方墳１，方墳４
19	出雲国分寺跡	〃　〃　寺領	寺院跡	南門，中門，金堂，講堂，僧房を一直線に並べた東大寺式の伽藍配置
20	中竹矢古墳	〃　〃　中竹矢	古墳	前方後方墳１
21	長峯遺跡	〃　〃　〃	住居跡	弥生中期末～後期前半の竪穴住居跡１，平安時代の土壙墓１
22	中竹矢後１号墳	〃　〃　〃	古墳	一辺 14.2 mの方墳
23	出雲国分寺瓦窯跡	〃　〃　中竹矢	瓦窯跡	焼成室の奥半部が遺存，高さ 1.2 m横 2.24 m
24	出雲国分尼寺跡	〃　〃　〃	寺院跡	礎石建物跡，築地状遺構，溝状遺構
25	竹矢小学校校庭遺跡	〃　〃	散布地	縄文土器，石斧，弥生土器，土師器
26	的場遺跡	〃　八幡町的場	墳墓	土壙墓，土師器
27	八幡宮下横穴	〃　〃　宮内	横穴群	
28	宮内岩舟古墳	〃　〃　〃	古墳	
29	灘山古墳	〃　〃　灘山	古墳	方墳，土壙，刀子他
30	布田遺跡	〃　竹矢町石橋外	集落？	弥生前期～後期の溝状遺構



第3図　間内越遺跡・平所遺跡地形測量図

Ⅲ　調査の概要

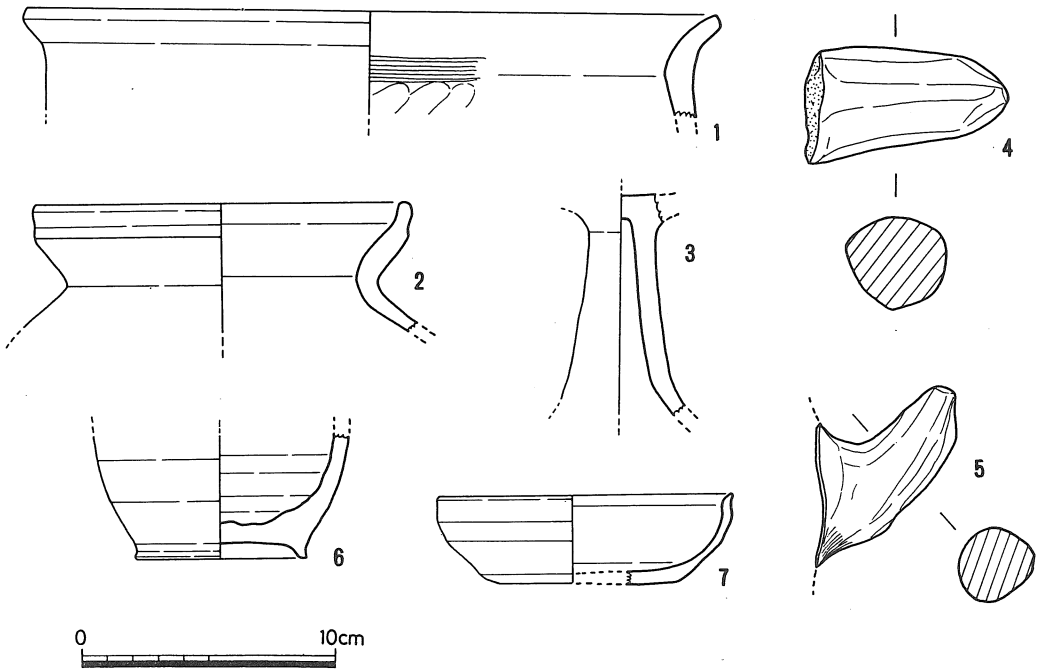
1. 試 掘 調 査

(1) 平所遺跡について

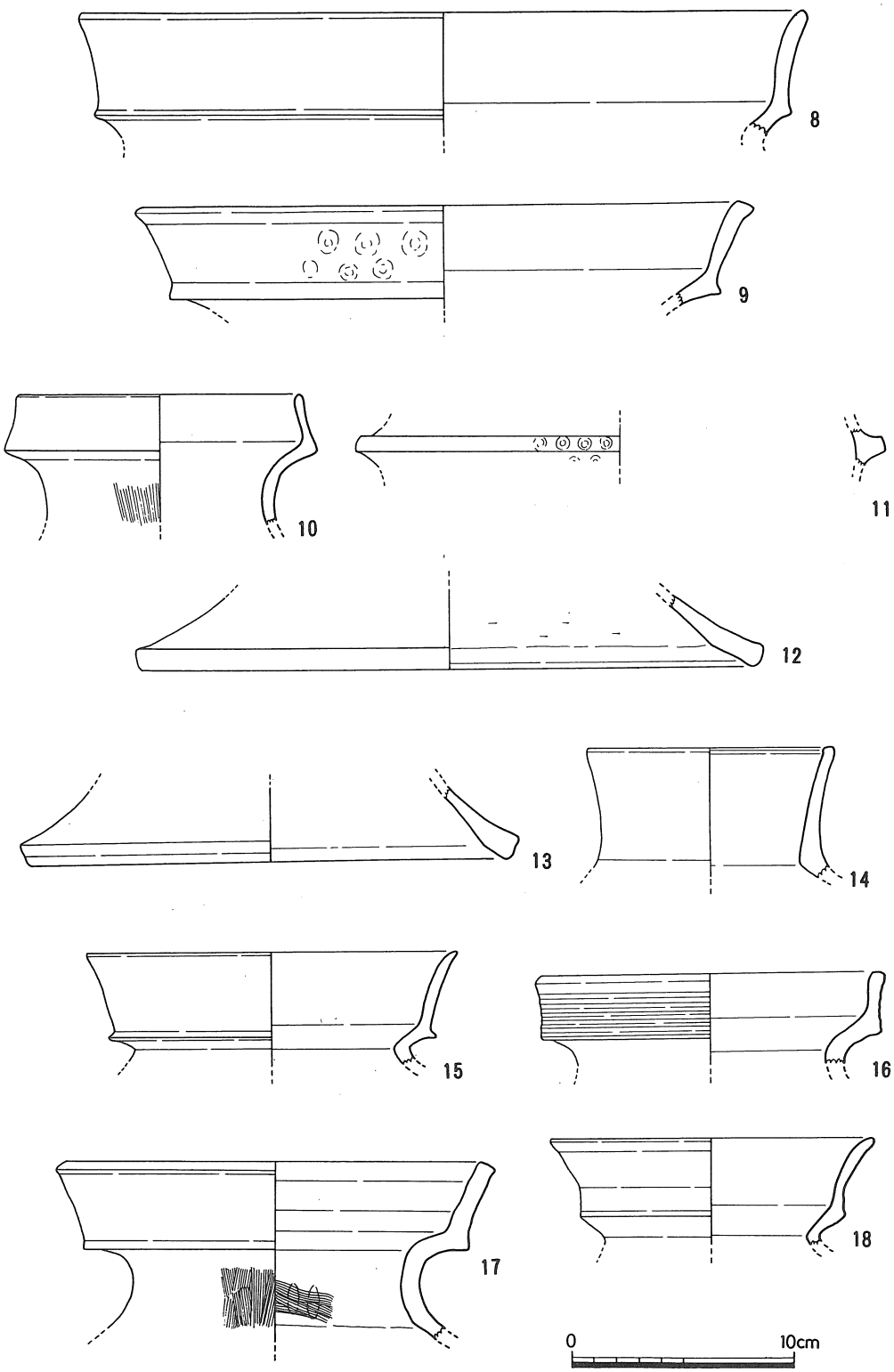
平所遺跡は間内越遺跡の南西側に位置している。調査対象地一帯は宅地として造成されており，元の地形はほとんど残っていなかった。従って，調査は道路予定地内にA～Dの4本のトレンチを設定し，遺構，遺物の有無を確かめることとした。（第3図）

Aトレンチは最も南西側に位置するが，旧地形の丘陵斜面が若干残っていた。トレンチ内には幅20～40cmの溝状の地山面とともに，須恵器，土師器が混在して出土した。Bトレンチは，Aトレンチの北西側に隣接して設定したもので，遺物はAトレンチと同様の須恵器，土師器片が出土した他に大型の転石が多量に検出されたが，人為的配石は認められなかった。C，Dトレンチは若干の土師器片が出土した他は地山面を検出することが出来なかった。

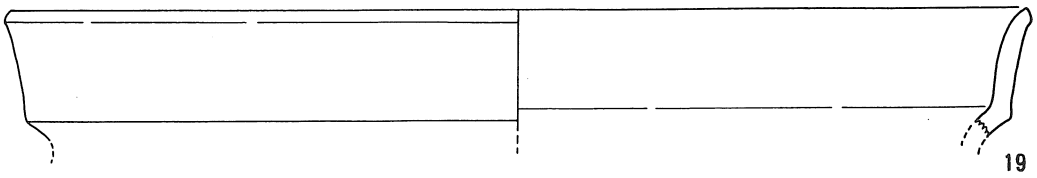
1は，このうちAトレンチから出土した土師質の壷で，口径28cmを測るものである。各トレンチ出土の土師器片はおおむねこうした形状を示していた。6は，高台をもった須恵器の小型壷と思われる。底部外面に回転糸切り痕がある。

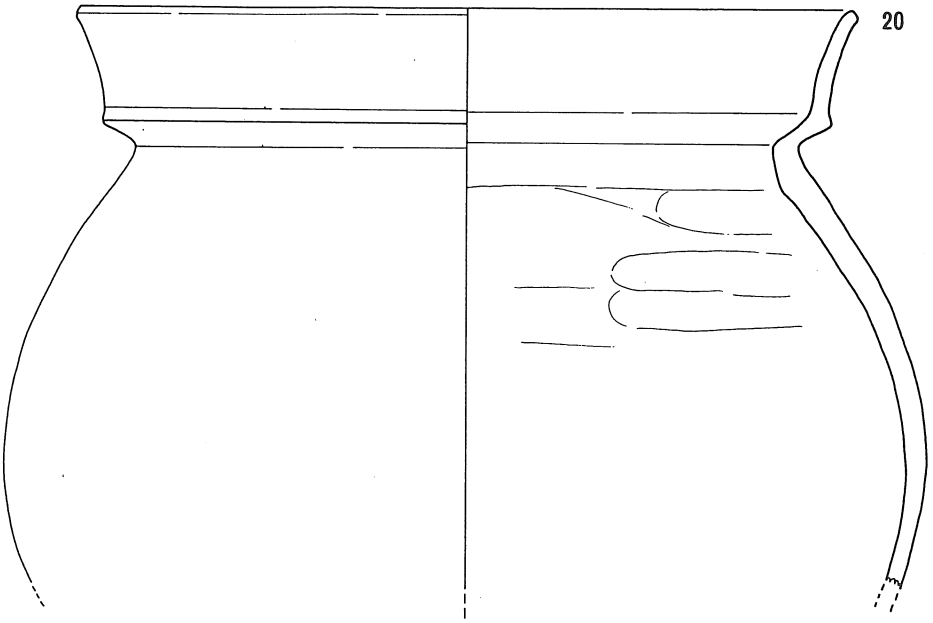


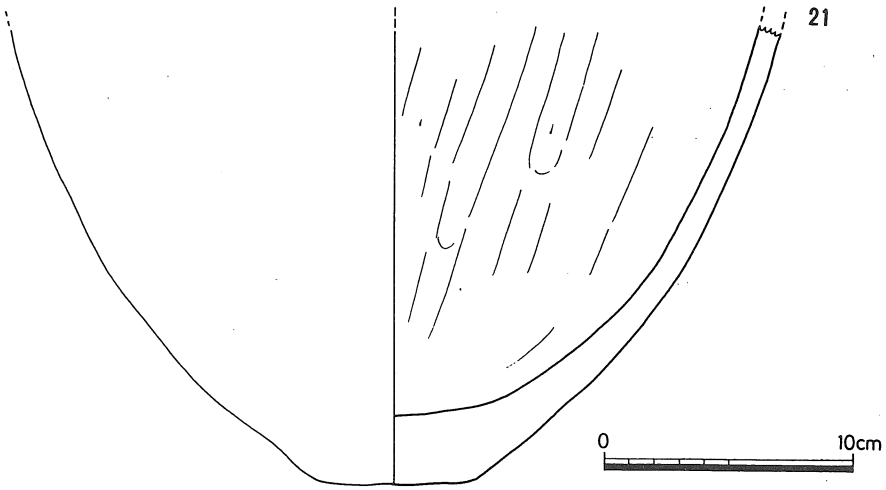
第4図　平所遺跡出土土器　1/3



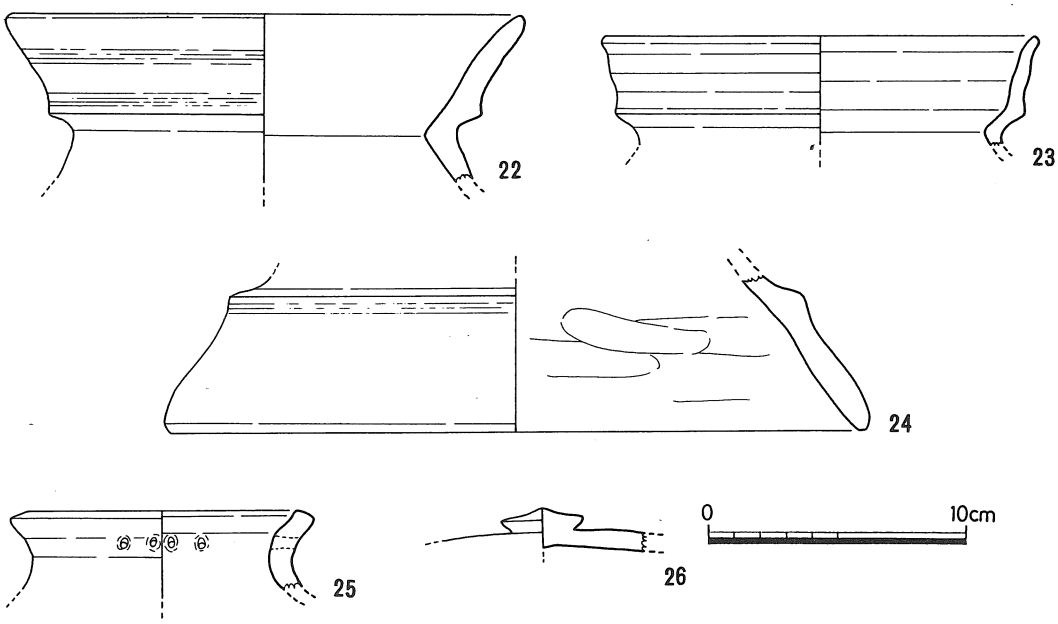
第５図　Ｔ－１～Ｔ－４出土土器　1/3







第6図　T－4区出土土器（1）　1/3



第７図　Ｔ－４区出土土器（2）　1/3

以上のように，本遺跡は宅地造成と道路工事によって，かなりの撹乱を受けていると考えられたので，試掘調査にとどめることとした。

(2) 間内越遺跡について

道路予定地内の丘陵突端に４本のトレンチを設定した。このうち最も高所の丘陵尾根突端では，２段積みの石列が検出された。また北西斜面のやや平坦地に設定したトレンチでは，柱穴状のピットと土師器片が多数集中して出土した。（第３図）

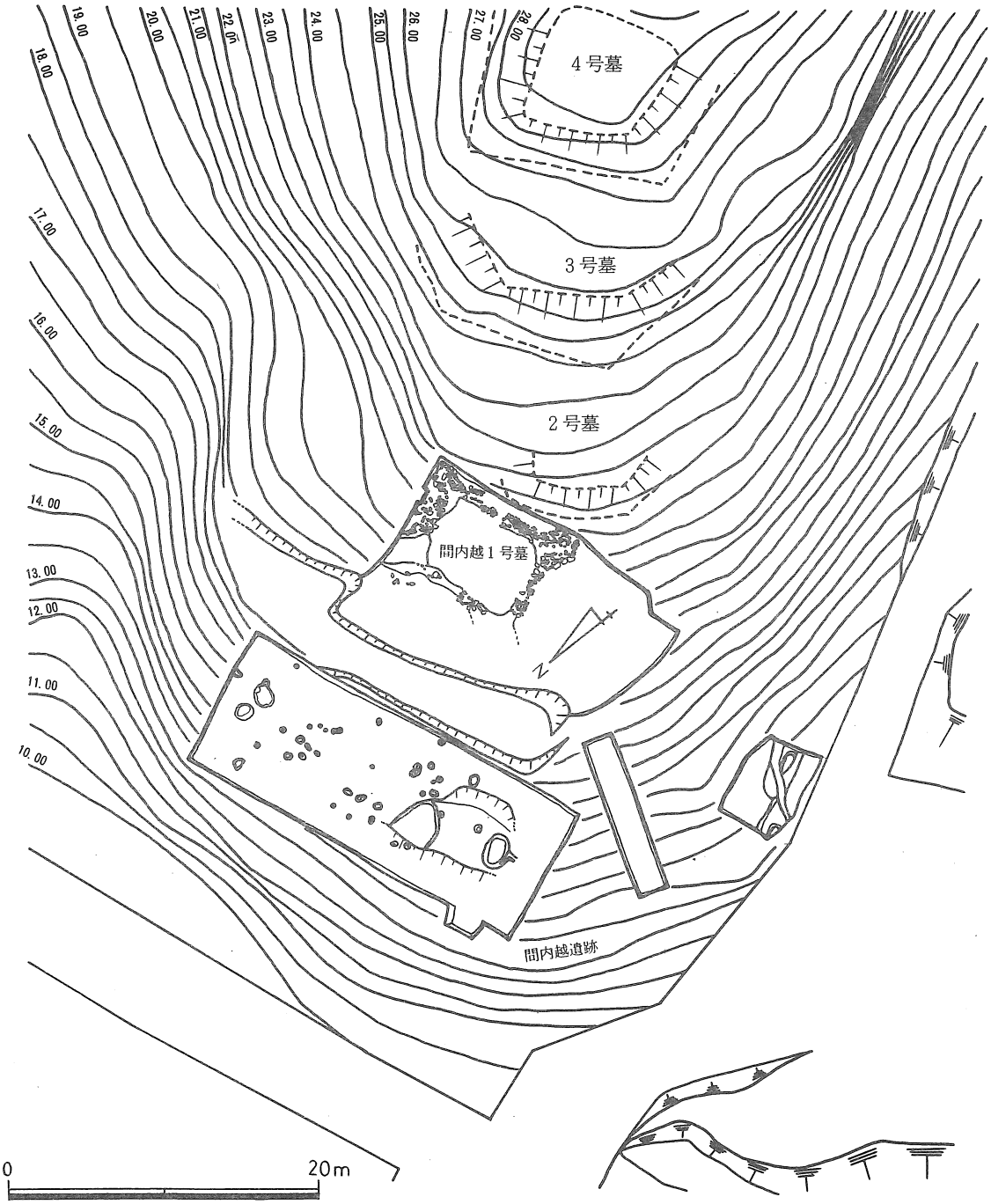
これらの状況から，本丘陵上には弥生時代から古墳時代初期の遺構が存在するものと考えられたので，本調査を実施したものである。

2. 間内越１号墓

(1) 立　　地

間内越１号墓は松江市矢田町字間内越537－１番地に所在する。現地形は北側を青葉台団地，東，南側を国道９号線バイパス，西側を本調査の原因となった市道山代矢田線によって切られて，あたかも独立した低丘陵地のごとく残っている。

この低丘陵地は尾根頂部に向かって幅50ｍ，標高差20ｍ（標高20～40ｍ），長さ150ｍにわたって続いているが，この狭い丘陵尾根に連続して墳墓が構築されている。調査前に



第8図　間内越遺跡、間内越1号墓調査成果図

南側の崖面で遺物の包含状況を観察したところでは，丘陵の突端から裾部に向かっては，古式土師器の包含層があり，頂部に向かっては須恵器の散布が認められる他，住居跡状の方形の黒褐色の落ち込みもあり，おそらく丘陵全体にわたって墳墓や住居跡等の遺構が存在するものと考えられた。

更に，丘陵尾根上を頂部に向かって踏査したところでは，階段状に4基の墳墓があることが確認されたので，丘陵突端の墳墓を1号墓と呼称して発掘調査を行ったものである。また，間内越墳墓群から本丘陵の頂部に至る間にも何らかの埋葬施設のある可能性が考えられるが，表面的にはなにも発見出来なかった。

発掘調査を行う中で本墳墓の現状保存の決定がなされたことにより，市教育委員会においても，これ以上の調査は墳墓そのものの破壊につながると考え，現段階以上の調査を行わないとの方針をとった。この為，墳丘の具体的な構造や埋葬施設の確認等細部にわたっての報告が出来ないことをお断りしておきたい。

(2) 墳丘の構造

発掘調査を行った1号墓は，調査前の地形測量の段階では東西5.0 m，南北5.0 m，高さ0.7 mを測る方形の基段を成していた。北側は急傾斜地であり，土砂が流出したことをうかがわせ，突端部の基段も一部影響を受けているように思えた。南側は，平坦なまま次の基段の一辺を成しており，墓域は明瞭ではなかった。

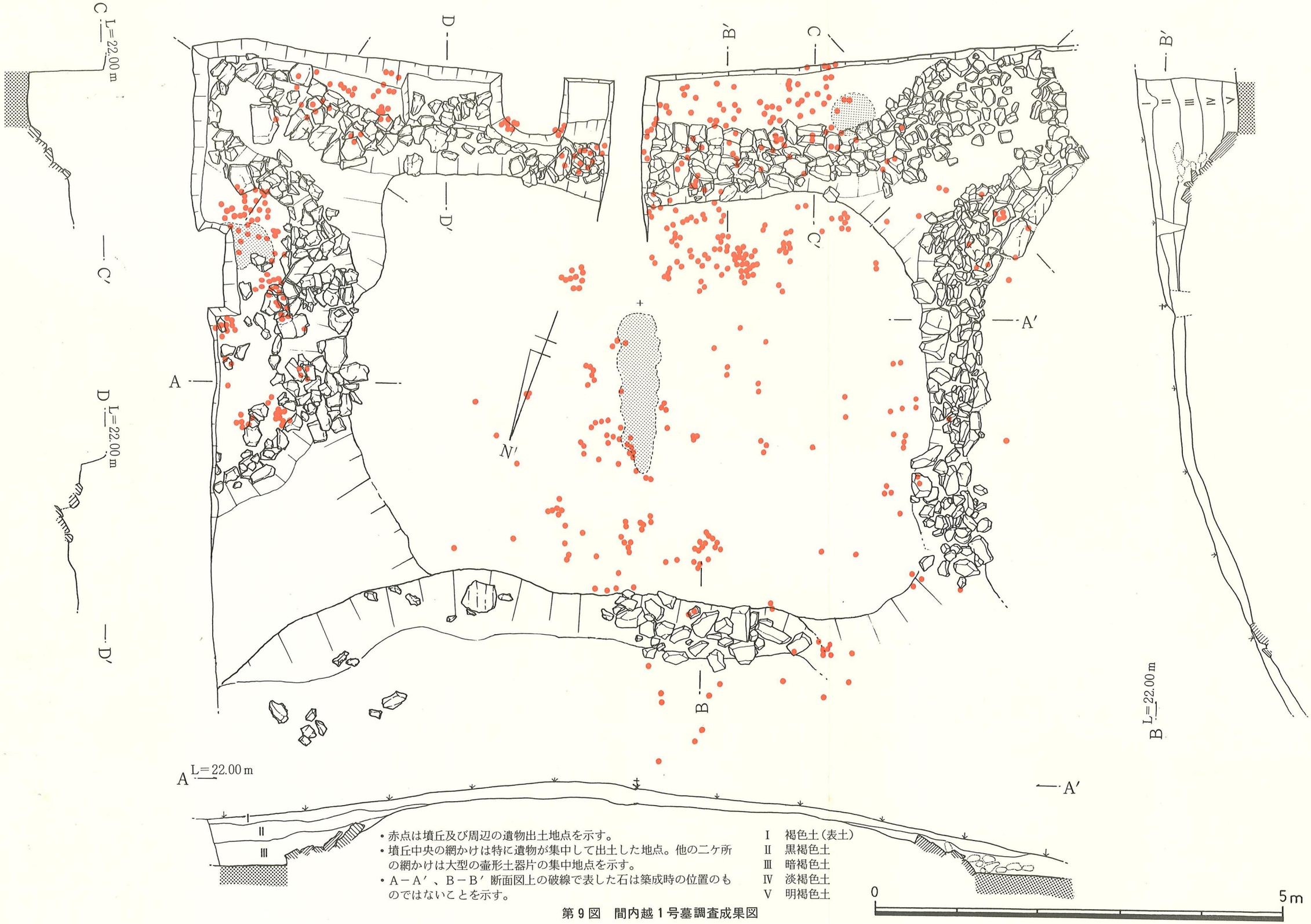
昭和62年4月における試掘調査の際に，この台状の基段の突端部中央に幅2 m，長さ約12 mのトレンチを設定して調査を行ったところ，北斜面に下る途中で多数の土師器片と共に，2～3段の貼石状の石列を検出した。

同年10月からの全面的な調査の結果，この石列は方形の基段を成し，しかも四隅が舌状に張り出した，所謂「四隅突出型墳丘墓」であることが判明した。北斜面は当初のトレンチで発見された石列を除いてはほとんど流出し原形を留めてはいないが，山頂側の南辺では遺存状態は良好で，特に南東隅の突出部はほぼ築成当時のままの状態で検出された。

調査の終わった段階での墳丘の規模は，上端で長辺7.0 m，短辺4.9 m，下端で長辺8.8 m，短辺6.67 m，高さは現存0.6 mで，丘陵突出部を水平に削平して台を設けて墳丘基盤とし，これに盛土を施した後貼石したものであろうと思われる。

(3) 突出部と貼石の構造

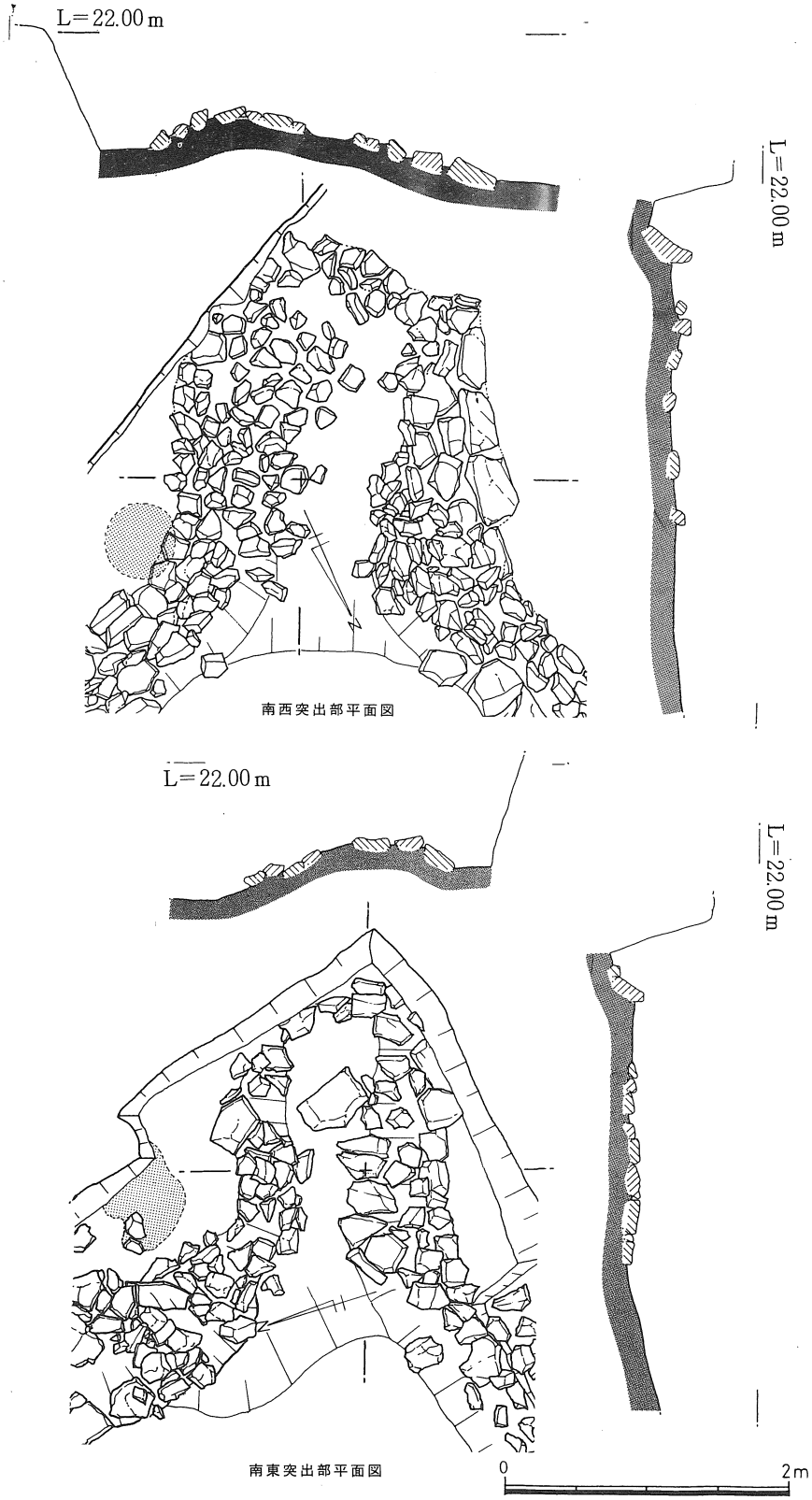
貼石は前述のとおり，東，南，西の各辺の遺存状態は良好で，特に2号墳側の山側南辺



- 赤点は墳丘及び周辺の遺物出土地点を示す。
- 墳丘中央の網かけは特に遺物が集中して出土した地点。他の二ケ所の網かけは大型の壷形土器片の集中地点を示す。
- A－A′、B－B′ 断面図上の破線で表した石は築成時の位置のものではないことを示す。

Ⅰ　褐色土（表土）
Ⅱ　黒褐色土
Ⅲ　暗褐色土
Ⅳ　淡褐色土
Ⅴ　明褐色土

第 9 図　間内越 1 号墓調査成果図



第10図 突出部平面図

は貼石の裾部から突出部の平坦面まで，全体に石を覆った状態で検出された。

これによると，30×20㎝前後の偏平な石を縦に，傾斜角約40度で積み上げ，この後石を横に垂直に立てて変化させる。

貼石は墳丘中央が最も高く，東西に低い弓なりになっており，中央の最も盛土の厚いところで，４段程度の貼石が施され，突出部の先端では２～１段の貼石となっている。垂直に立てた貼石は，石材の堆積状況とその量から考えて，少なくとも２段以上，垂直な貼石が施されていたのではないかと推察される。

突出部を造り始める最初の貼石は，南東隅では，それまで縦に並べていた石を横に並べ変えるという方法で，ある程度意識していたように思える。南東隅の突出部は，10㎝内外の小型の石材を使って，突出部全体を覆うように配置されている。南西隅の突出部も全体を覆うが，石材の大きさは，15㎝方形の石を中心として，35×25㎝の大型の平石４～５個をも使用している。この大石は，突出部の中心線からはずれており，また先端まで連続して並べられた状況でもないので，他の「四隅」に見られるように突出部の角を意識していたとは考えられず，南東隅の突出部と同様に全体を覆うためであったと思われる。

南東隅突出部の裾部の貼石のうち，北斜面側には45×30㎝の石を横に３個並べて突出部の一辺としているのが特徴である。概して山側の貼石は小さく，急傾斜に向いた北側，東側では大きな石材を使用しているので，これらは盛土の流出を防ぐ意味もあったのではないかと考えている。

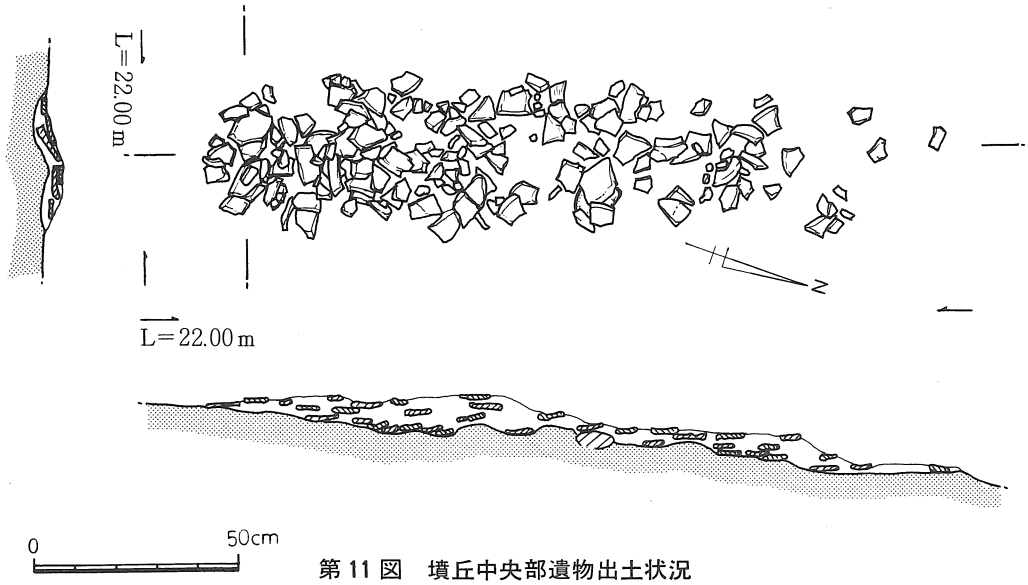
突出部は基部で幅2.4ｍ，端部で幅2.15ｍ，長さ2.7ｍを測り，突端はやや角張っている。高さは基部で0.4ｍ，突端部で0.3ｍを測り端部に向かって緩やかに傾斜する。

墳裾の貼石の他には，溝および他の石列の類は検出されなかった。

(4) 遺物の出土状況及び埋葬施設

遺物は墳丘及び墳裾丘陵斜面のすべてにわたって，多くは細片となって散乱していた。ただし，墳丘の中央部では幅0.5ｍ，長さ1.95ｍの範囲で特に遺物の集中している部分が検出されており，これらの土器を分類復元したところでは，鼓形器台16個体，高坏５個体を中心として，約40個体程度になるものとみられる。多くは細かい破片となっており，故意に破砕した可能性も考えられる。

墳丘南辺の突出基部で，器高78㎝の大型の壷がほぼ完形の状態で検出された。壷をすえたとみられる掘り方は検出出来ず，貼石の最下段と壷底部のレベルが同じであったので，築成と同時に供献したものと考えている。



第11図　墳丘中央部遺物出土状況

南東の突出部の基部付近にもほぼ同様の大きさの壷が検出されたが，こちらは破損がひどく，原位置を動いている可能性があるが，南西の壷と同じく築成当時に供献されたものであろう。

南西部の墳丘斜面には，後世に置いたとみられる須恵器横瓶が破砕した状態で発見されている。

前述のとおり埋葬主体は確認していない。従ってどの遺物が築成当時に供献されたものかは確定出来ないが，遺物の出土状況からみて，おそらく墳丘中央の集中して検出された遺物がその時期を示しているのではないかと考えている。

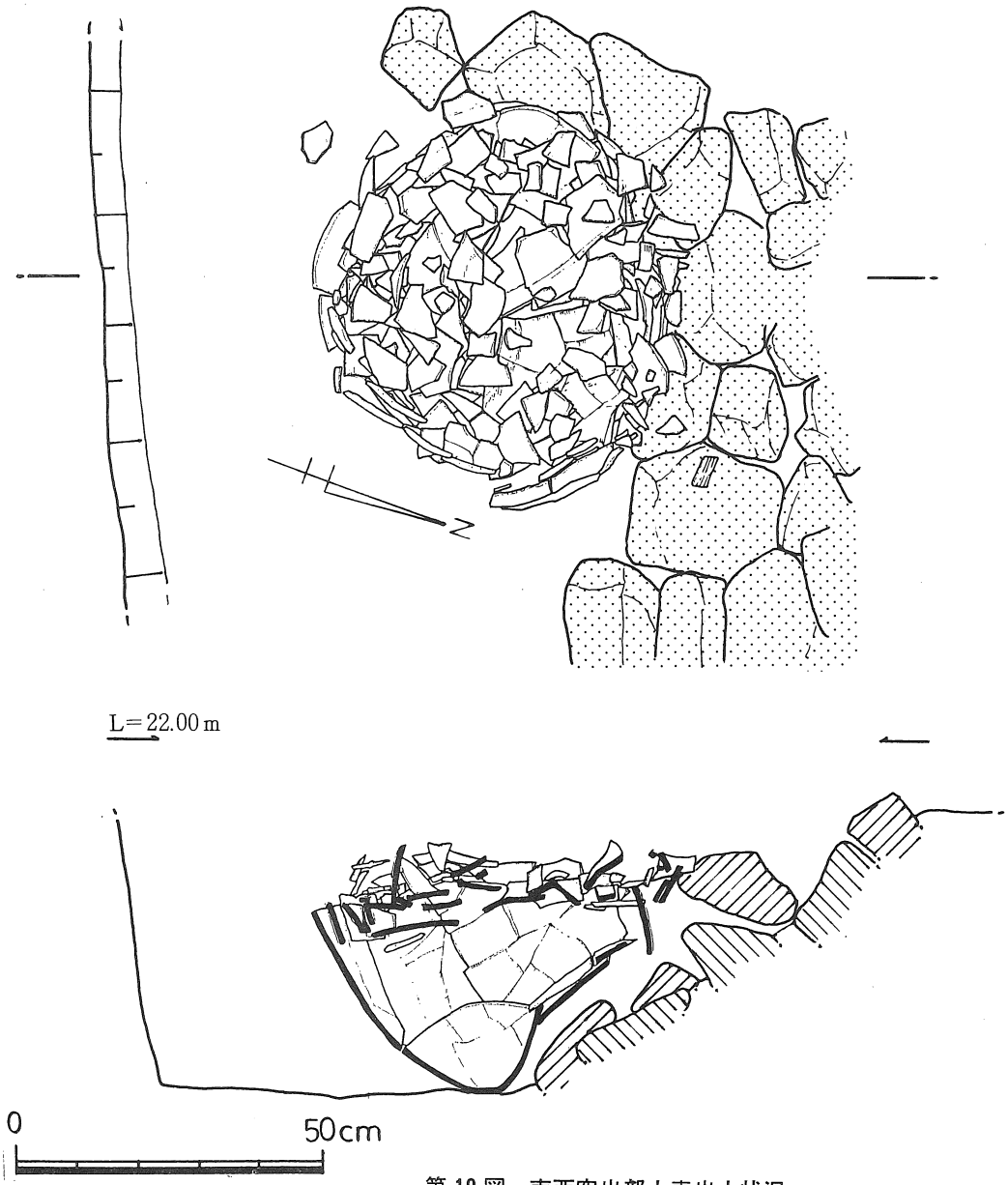
(5) 出土遺物の概要

遺物は前述のとおり，墳丘全体に散逸しているが，特に墳丘中央の密度の大きい部分と，他の墳丘周辺の遺物にわけて，それを器種ごとに特徴を述べる。詳細については遺物観察表を参照されたい。

▶墳丘中央の遺物について

甕・壷形土器　口縁部は外傾してのびるもので，端部は丸か平に近いものが多い。口縁部の稜はやや下方へ鋭くのびるものが一片(35)，他は若干突出するかあるいは殆ど稜をつくらない。調整は，外面横なでを行った後径1㎝の竹管文を口縁部に平行に1～2段施すものが多い。内面は篦削りにより調整する。

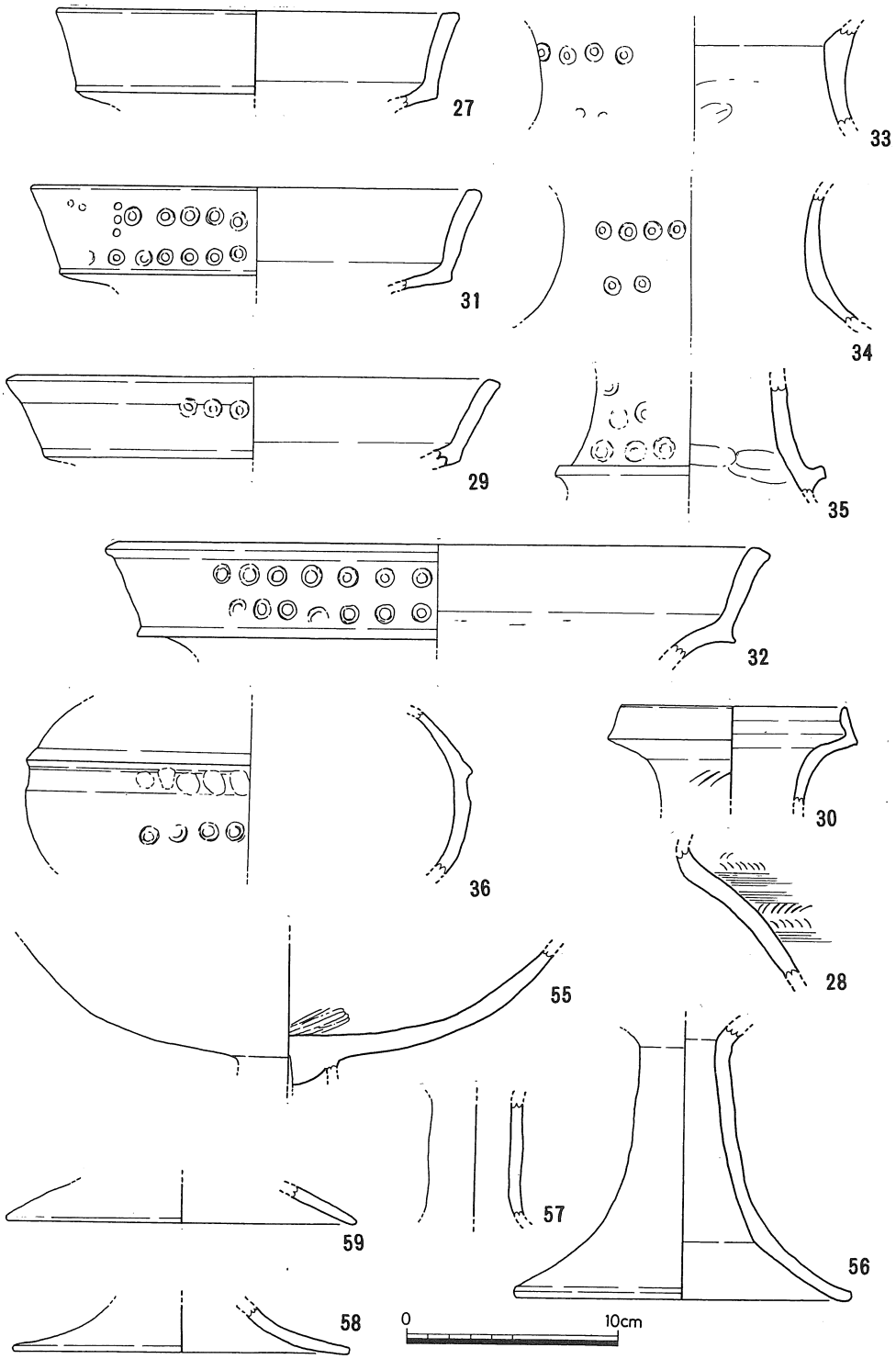
器台形土器　脚径は13.9～32.0㎝までのもので，完形となるものはなかった。脚台部



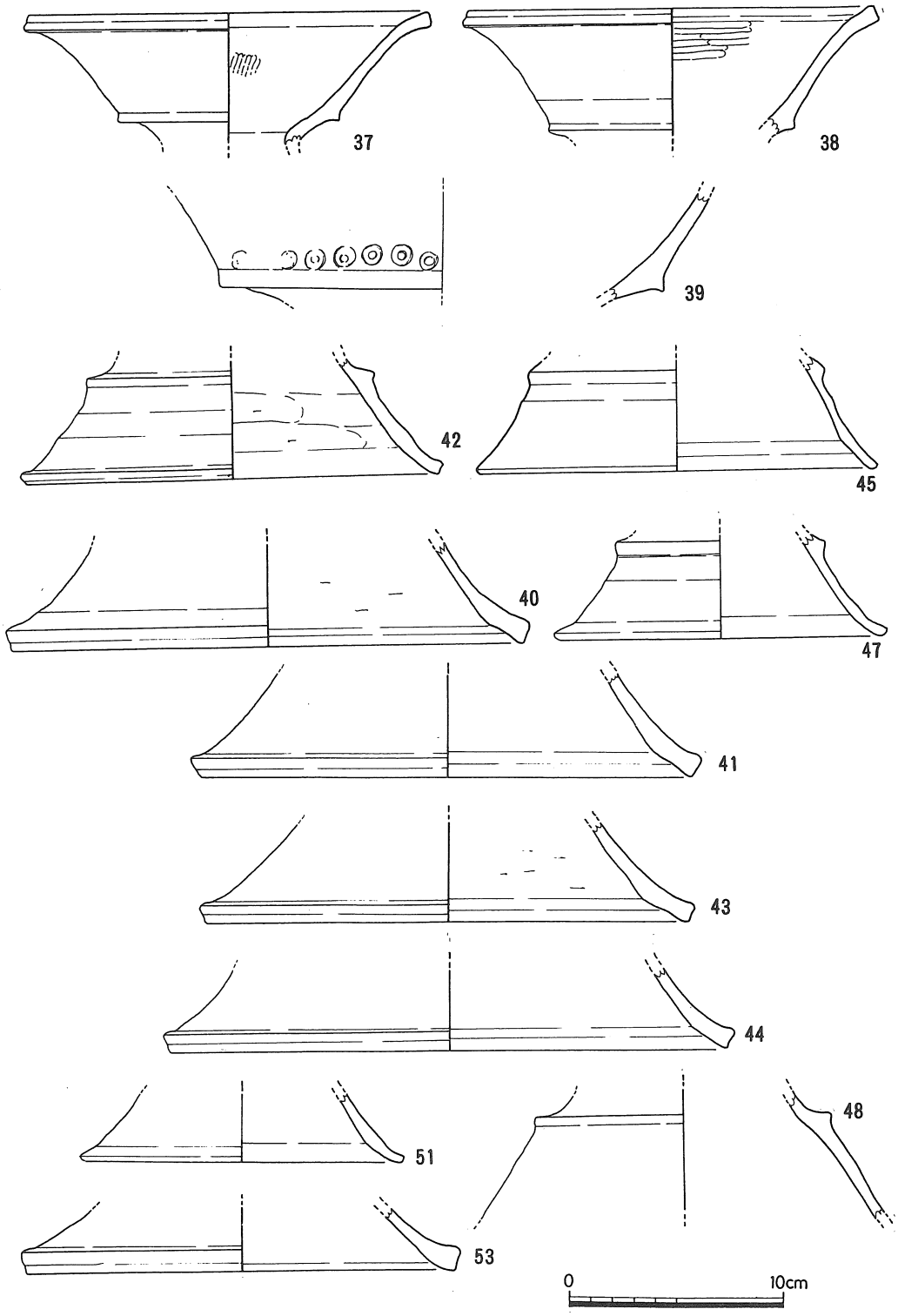
第 12 図　南西突出部大壷出土状況

はすべての破片が「ハ」の字状に開く脚部をもち，端部が内側に屈曲して丸いものである。内面は篦削り，外面は横なでで調整する。上台部は筒部との境に鋭い稜がつき，外反してのび，端部付近で内側へ屈曲し端部は丸い。内面篦磨き，外面横なでで調整。

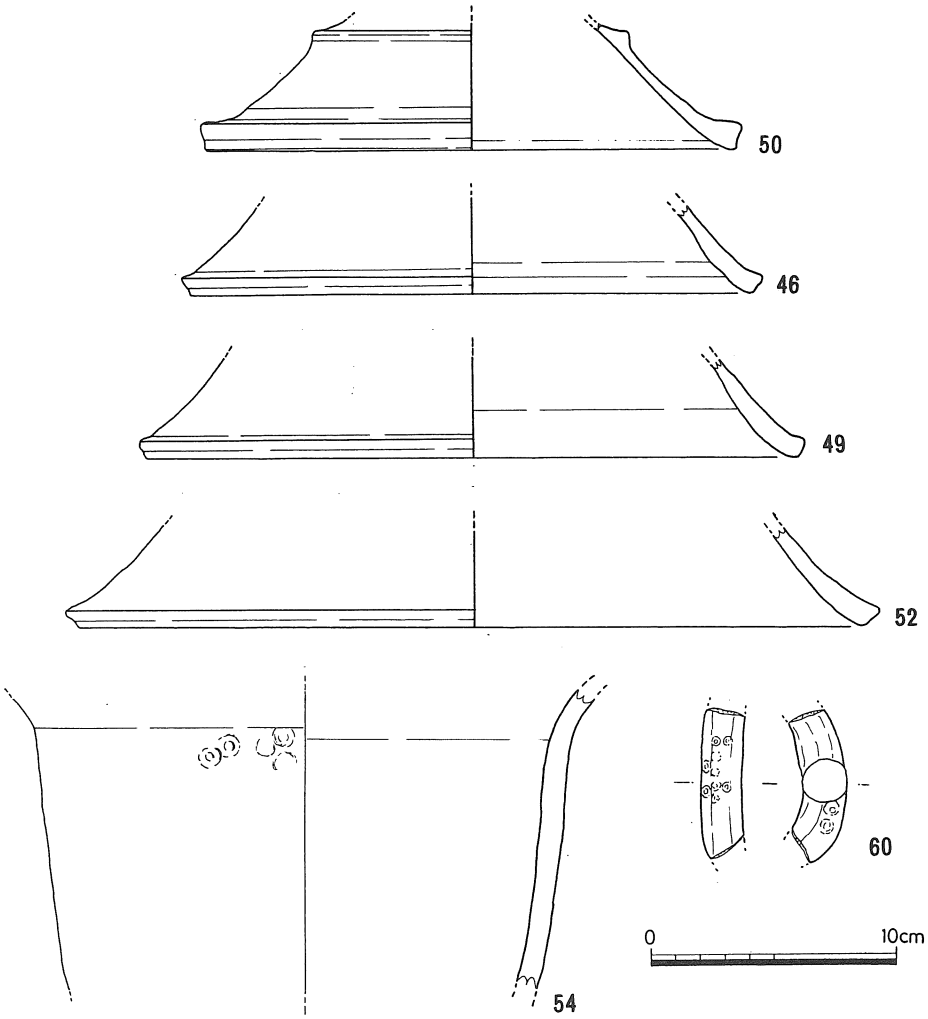
高坏形土器　高坏の坏部片は一片だけであったが，これによると坏部は浅く大きく開くもので，端部を欠くが推定口径28cmぐらいになるものとみられる。内面の一部に篦磨きが認められるが他は磨滅しており調整は不明である。脚部はやや外反して下る筒部から「ハ」



第13図　墳丘中央部出土土器（1）　1/3



第14図　墳丘中央部出土土器（2）　1/3



第15図　墳丘中央部出土土器（3）　1/3

の字状に開く裾部をもっている。内面は篦削りにより調整する。

その他　この他に特殊なものとして35・36がある。35は6㎝ほどの小片であるが，突帯を有することから，長頸壷の頸部ではないかと思われる。36は外面が磨滅しており細部まで観察出来ないが，おそらく「たまねぎ型」の胴部をもつ壷片であろうと考えている。また胴部の最大が23.6㎝になると思われる，外面に竹管文を配した円筒型の破片（54）や，長さ6.2㎝，径1.2㎝の丸い把手状のもの（60）があり，この表面には径4㎜の小さい竹管文が施されている。

▶墳丘周辺の遺物

甕・壷形土器　墳丘中央の遺物には共通性がみられたが，これ以外の周辺に散乱していた遺物は量が多くかなりの差異があって，しかも細片であり，原位置を動いたものが多い

とみられるが，この中で特に注意を要するのは，突出部の基部に意図的に置いたとみられる大型の壷である。この壷は南西，南東の突出部基部に1個づつ置かれていたものであるが，南西突出基部の壷は口縁部を若干欠く他はほぼ完形の壷であった。

この壷（88）は，口縁部は「く」の字に内傾し，外面に段を有するもので，頸部に綾杉状の篦描き文，肩部から胴部にかけて同様に斜めに平行する篦描き文と浅い沈線を交互に繰り返していく。この壷の内部で同時に検出されたのが90・91である。90は口縁部は厚く端部は丸いものである。口縁部は横なでの後かなりはっきりした平行沈線を施し，胴部に波状の沈線文がある。内面には指頭圧痕が残っている。91は，壷かあるいは器台のようにも思われるがはっきりしない。外面横なでの後平行沈線を施している。

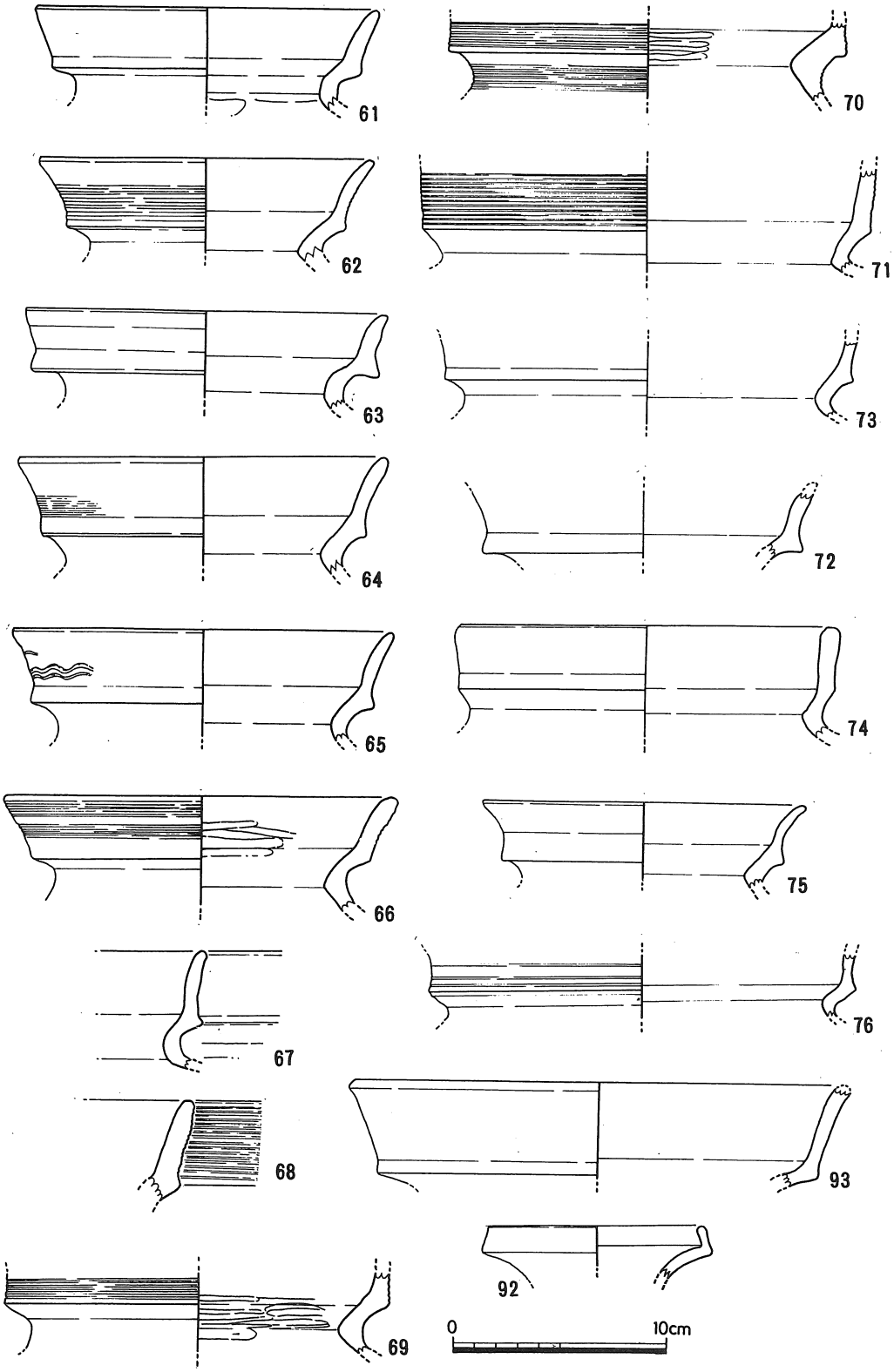
もう一方の南東側の大型の壷（89）は，これも口縁部はかなり急激に「く」の字状に内傾するもので，頸部に深い綾杉状の篦描きが施される他は口縁部から頸部～胴部にかけて浅い沈線と波状文を交互に繰り返している。

この他の甕・壷は口縁部が外傾して稜はやや下方に鈍く短く張り出すものが多い。調整は口縁外面に平行沈線，内面は篦磨きによるものが多くみられる。底部片はすべて平底であった。

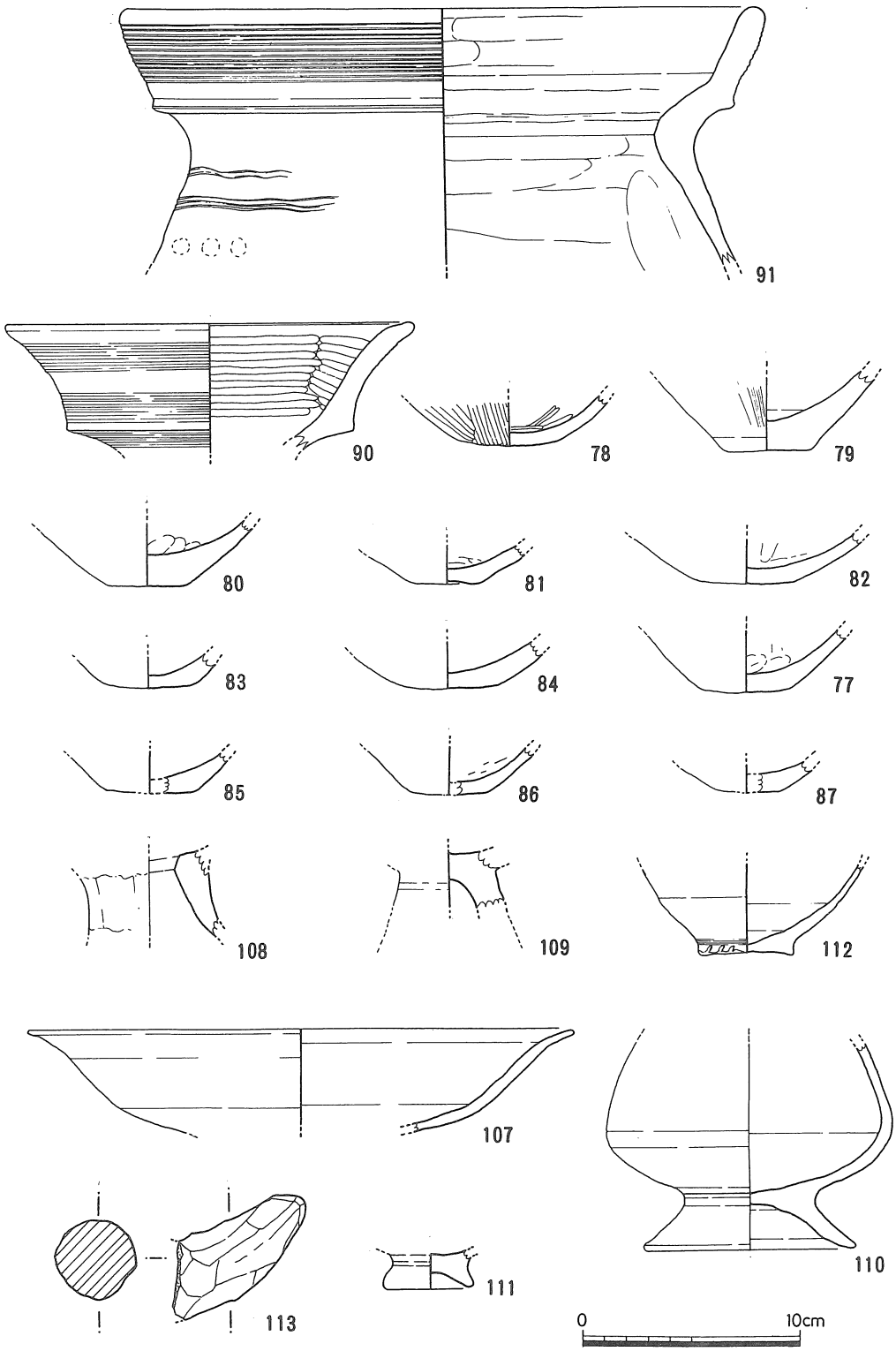
器台形土器　脚台部の破片は墳丘中央で出土したものに近いものがあるほか，器厚があり，端部は丸く脚部にはっきりした沈線を施すものがある。上台部は端部が細く丸いもの，器厚が厚く端部が丸く筒部に水平に突出する稜をもつもの（95）がある。全体的にみてかなりの時期差があるものが同時に混在しているように思われる。また墳丘盛土の上面のごく浅い層で出土した106は，わずかに弧をえがく板状の土師器片で，3箇所に方形の透かしと思われる鋭い切り口が観察される。外面に径1㎝の竹管文を施している。実測したところでは胴部径が19.2㎝あり，特殊器台形土器の一部ではないかと思われる。

高坏形土器　坏部片は実測可能なものは一片だけであった。坏部は径25.2㎝を測る大型のもので，器厚薄く全体に丁寧な作りのものである。口縁部は細く上外方に向いて端部はやや角張って丸い。

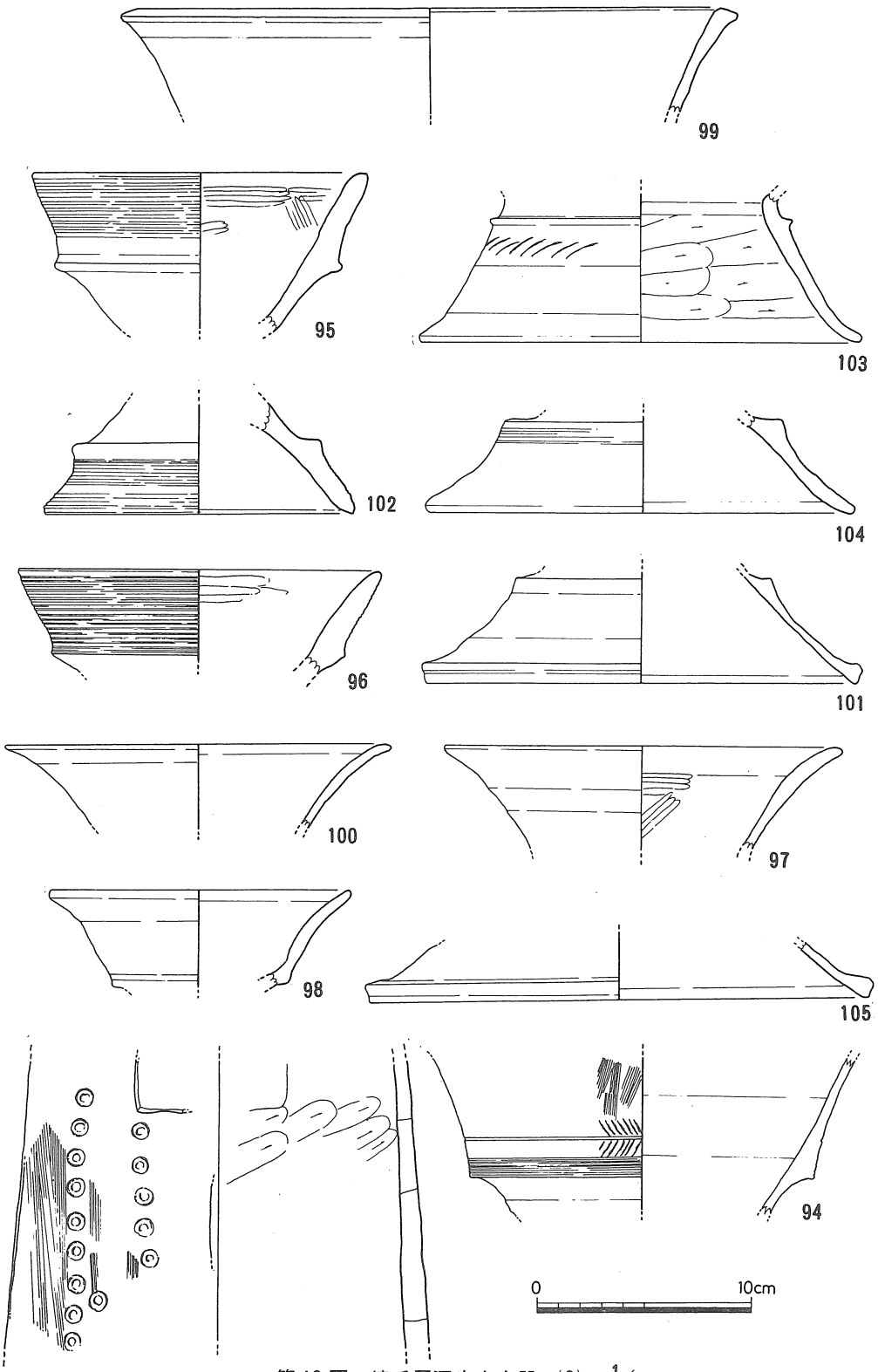
その他　低脚をもつ坏及び高台状の台を作り出した坏が出土している。このうち110は丸く張り出す坏底部から口縁に向かって大きく内彎する坏部をもつ。高台付坏112の台部には爪状の作り出し痕が残っている。また182は横瓶で，この破片は墳丘斜面にひっかかったように検出されており，いくつかの破片は丘陵斜面のかなり下方で発見されたものである。口径は11㎝，胴部の長径は37.4㎝，器高は推定で約21㎝を計り，外面は平行叩きの後に同心円状のかき目により調整する。古墳時代後期のものであろうと思われる。



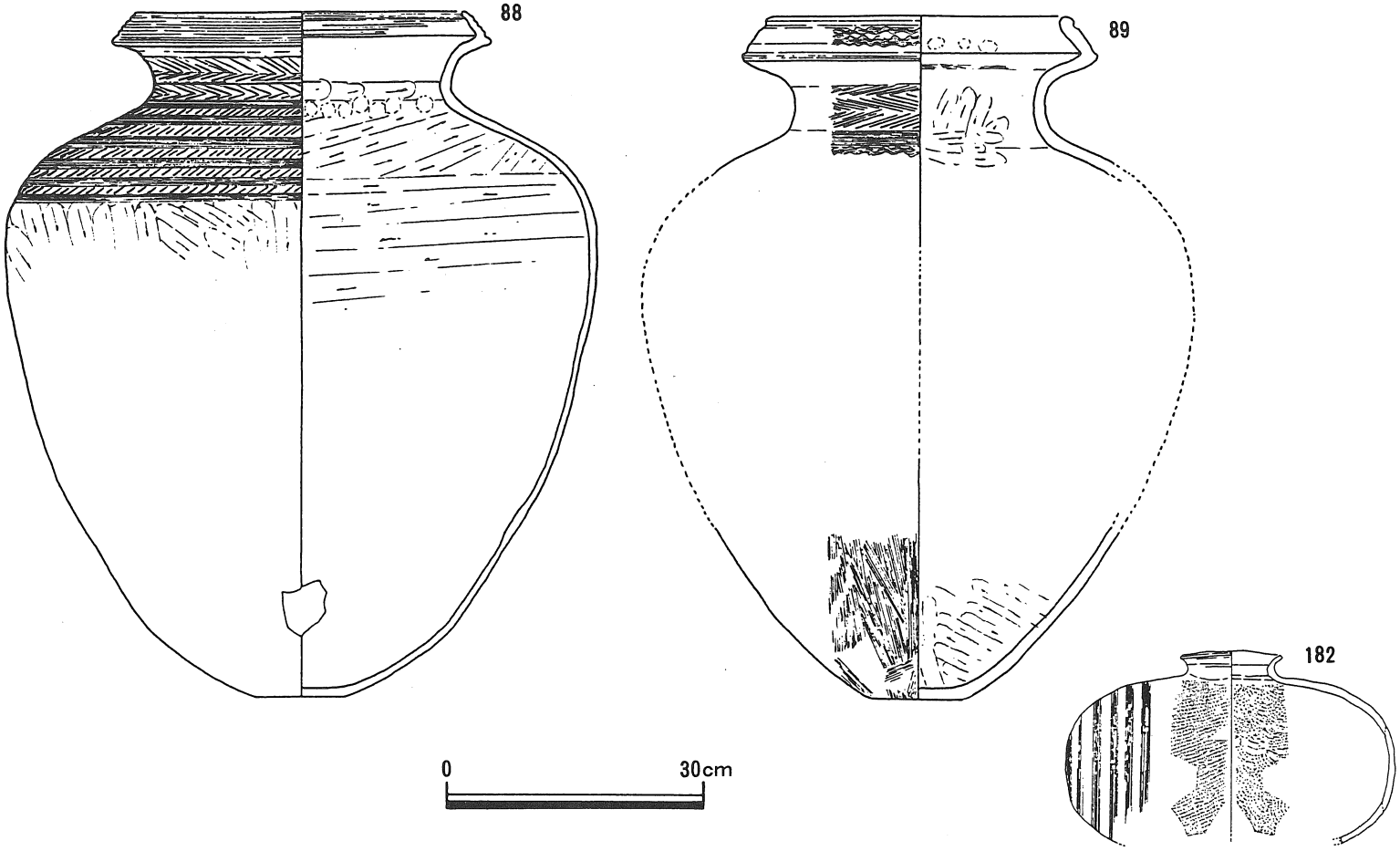
第16図　墳丘周辺出土土器（1）　1/3



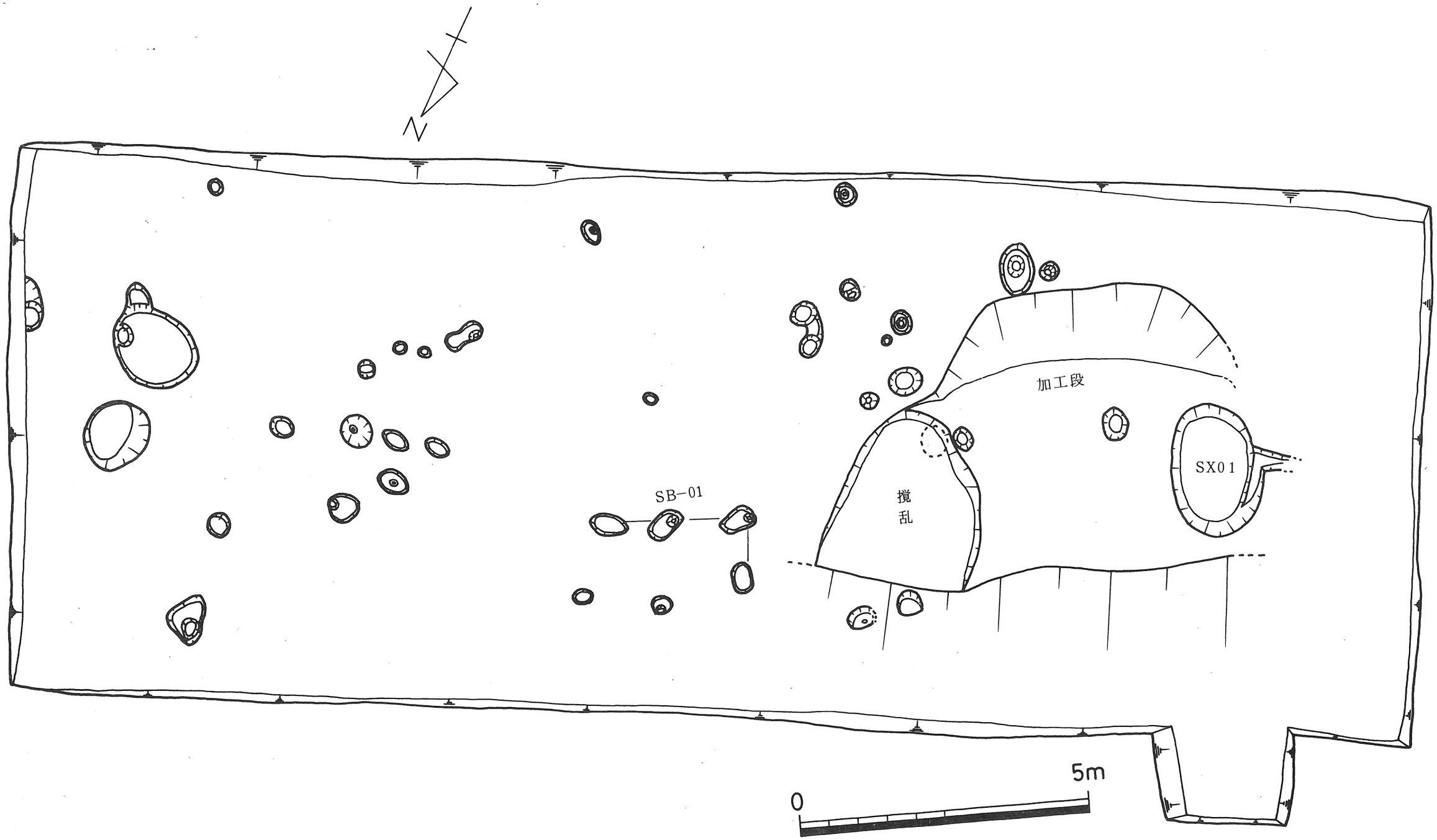
第17図　墳丘周辺出土土器（2）　1/3



第18図　墳丘周辺出土土器（3）　1/3



第19図　墳丘周辺出土土器（4）　1/8



第20図　間内越遺跡調査成果平面図

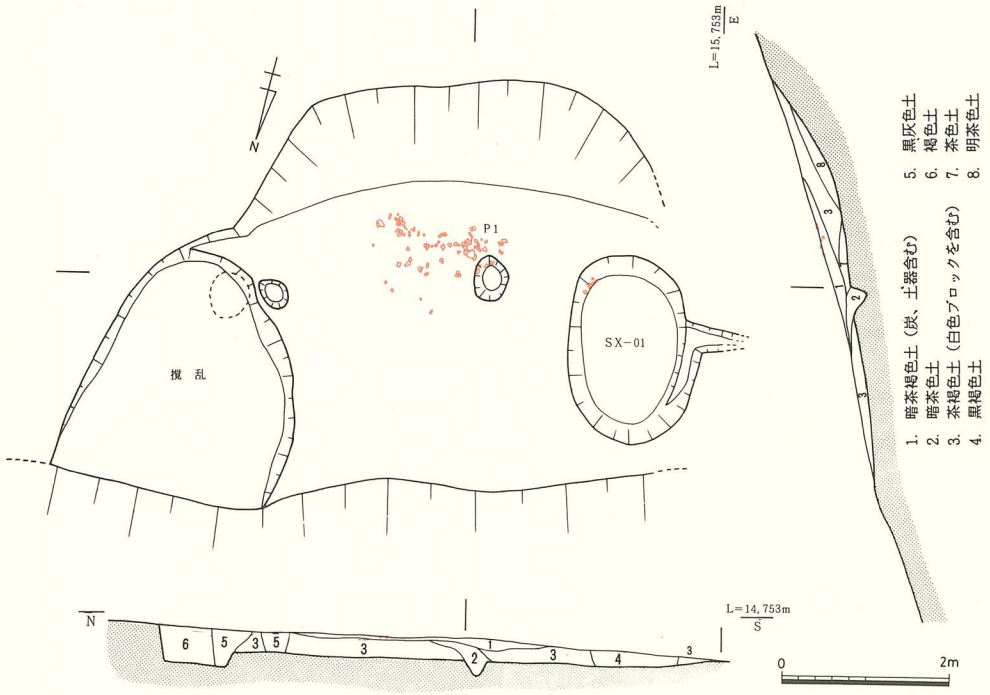
3. 間内越遺跡

間内越１号墓の所在する丘陵斜面先端部のＡ地区から加工段１，土壙（ＳＸ－０１）１，掘立柱建物跡（ＳＢ－０１）１棟，その他ピット多数を検出した。また，丘陵南側斜面にあたるＢ地区で，遺物包含層を確認した。以下個々について概要を述べる。

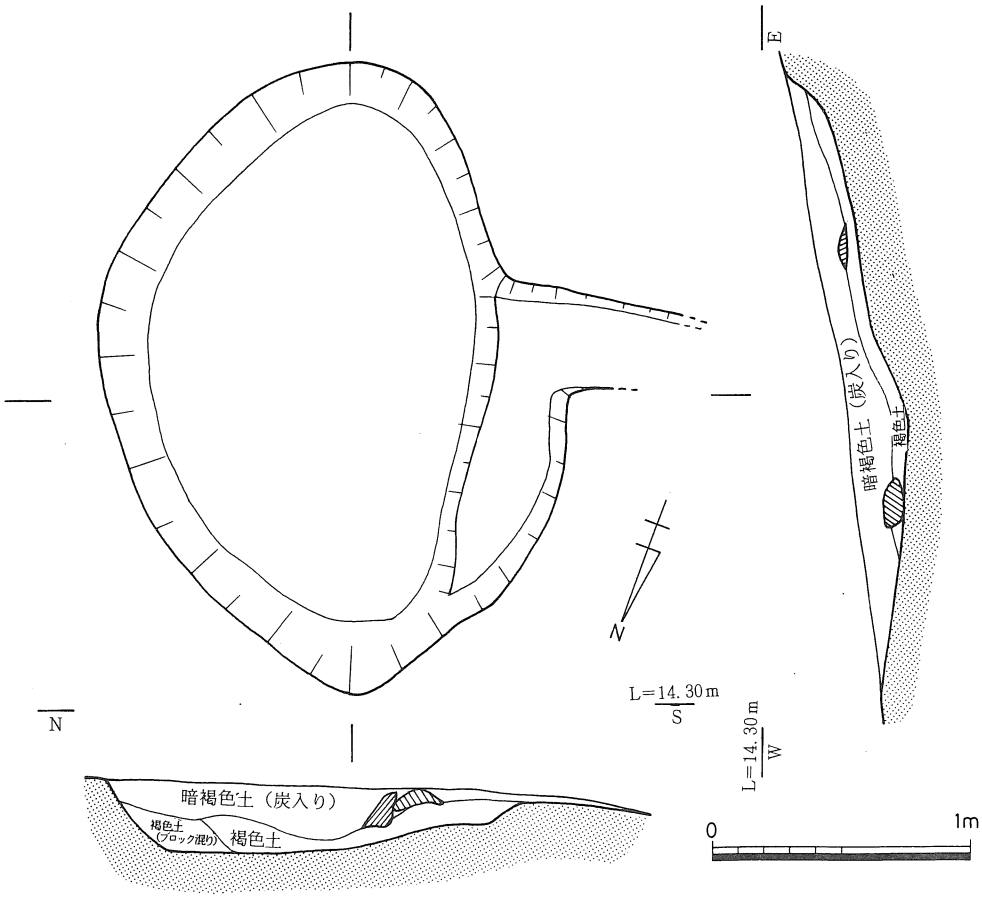
(1) Ａ　地　区

加工段　急斜面をカットして平担面を作り出したもので，規模は南北5.４ｍ，東西7.０ｍ，南壁高70cmを測る。壁側に周溝等は検出できなかった。床面は西に傾斜しているが，貼床の痕跡などは認められなかった。床面中央付近で本加工段に付属するピットを１穴検出した。このピットは径50cm，深さ34cmを測り，埋土中からは磨滅した土器片が出土している。また東側部分は撹乱によって切られていた。

遺物は床面上から出土したものは無く，ほとんどが覆土の第１層目から出土している。実測可能であったものは11個体であった。114～121は甕口縁部，122～124は甕底部である。114は短めの口縁部で外傾してのび，６条の平行沈線を施す。115，116は器肉が厚めのもので，外傾する口縁部である。119は外反ぎみにのびる口縁部で，内面に明瞭な段をつくる。117，118，120，121は口縁端部を欠くもので，117，118は外面平行沈線を施す。121は横に鋭く突出する稜をもつ。122はしっかりとした平底であるが，123，124



第21図　加工段平面図



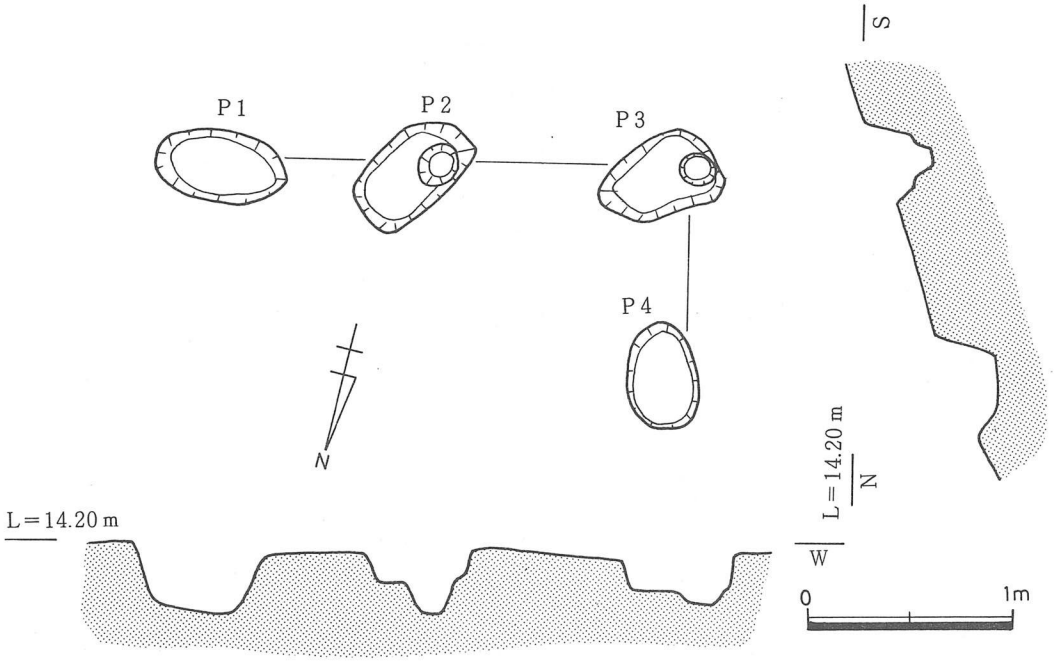
第22図　ＳＸ－０１平面図

は小さく不安定な平底である。

ＳＸ－０１　加工段の検出面上から掘り込まれているもので，加工段より後出のものである。規模は南北2.4ｍ，東西1.7ｍ，深さ約50cmを測り，西壁から東へ延びる溝が付属している。土壙内から遺物が出土していないため時期や性格については不明である。

ＳＢ－０１　加工段の周辺にはピットや土壙が多数みられ，これらのピットの中には柱痕跡をもつものも認められた。それ故これらのピットは掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高く，建物跡として考えられるものは１棟であった。加工段の１ｍ東隣に位置しているのがそれである。２間×１間以上の建物で，柱穴規模はＰ１が径60×38cm，深さ30cm，Ｐ２が径62×40cm，深さ34cm，Ｐ３が径60×40cm，深さ30cm，Ｐ４が径50×40cm，深さ34cmを測る。柱穴距離は1.1～1.3ｍを測りやや小型の建物跡のようである。

ＳＢ－０１やその他のピットの周囲から須恵器片が少数出土しており，実測可能であったものは次の２点である。125は高台と胴部上半を欠く壷と思われる。126は壷でつまみ



第23図　ＳＢ－０１平面図

を欠くものである。

(2)　Ｂ　地　区

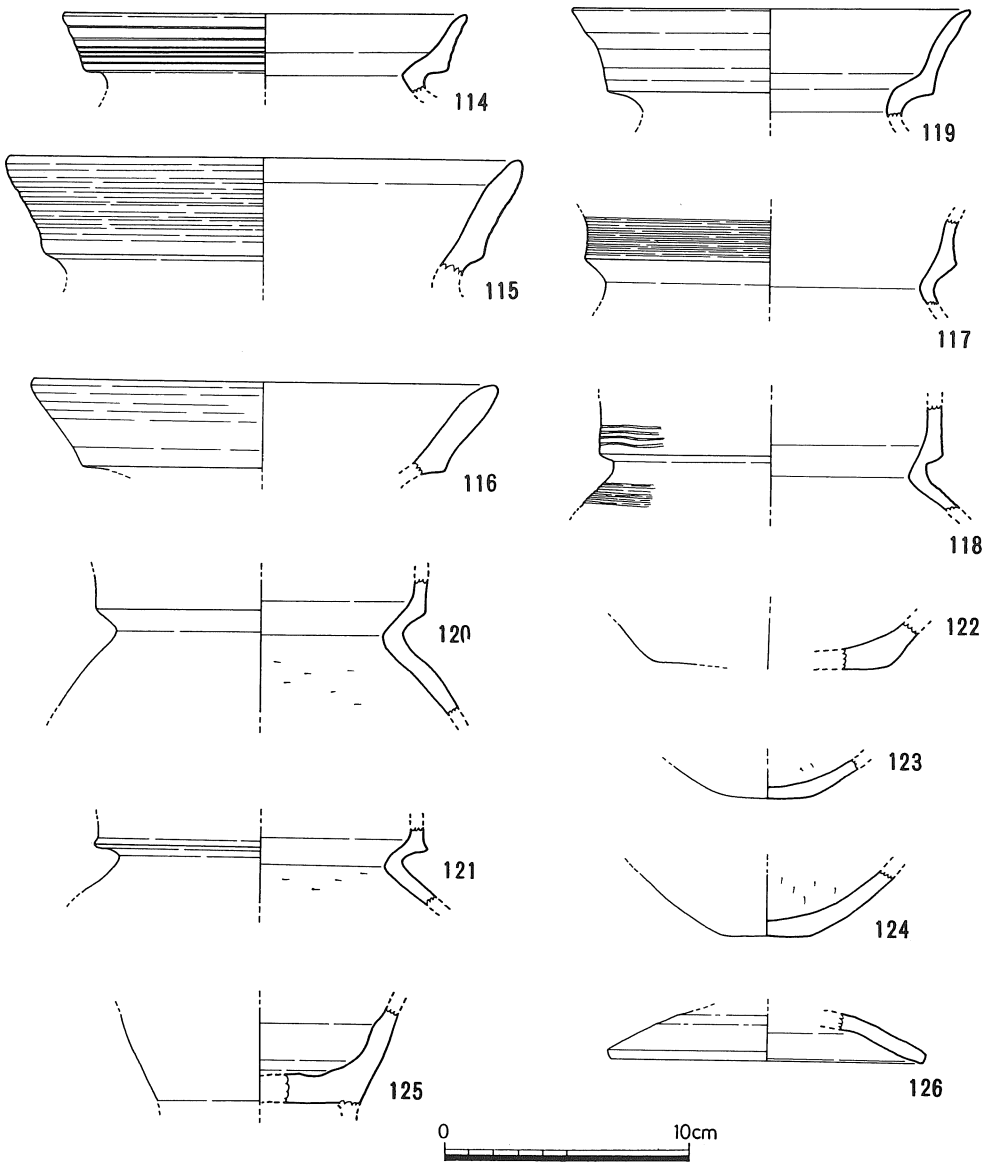
間内越１号墓の所在する丘陵が舌状に突出した南側の斜面の裾部に当たる所の切土部分に遺物包含層が露出していた。その為遺物包含層の工事区域に当たる部分を中心に遺構の有無を調査した。

調査前の崖面の東西セクションは（図25）の通りになっていた。その中で遺物包含層は第５層のみで厚さ30～50㎝程であった。この第５層は土器と共に多量の炭と最も大きいもので長さ30㎝程度の転石が入り込んでいた。

南北セクション（第25図）では第５層は北側に向かって，緩やかに上がって消滅する。他の土層もほぼ同様に北側に向かって上がっている。また，第５層中でも西側に比べて，東側の方が土器，転石を多く含んでいた。

以上のような理由から，第５層の遺物包含層は流れ込みによるものと考えられる。また第５層下面を精査したが遺構等は確認できなかった。次の第６～第８層上面まで掘り下げたが土器は出土しなかった。転石の混入は第５層よりは少ない。

第８層上面で精査したところピット等の遺構は認められなかったが，東側の地山と接する所で深さ８㎝，幅25㎝，長さ１ｍほどのＵ字状の落ち込みを確認した。しかしこれが加工によるものか，自然の地形の変化なのか判断できなかった。また，西側では地山に幅50



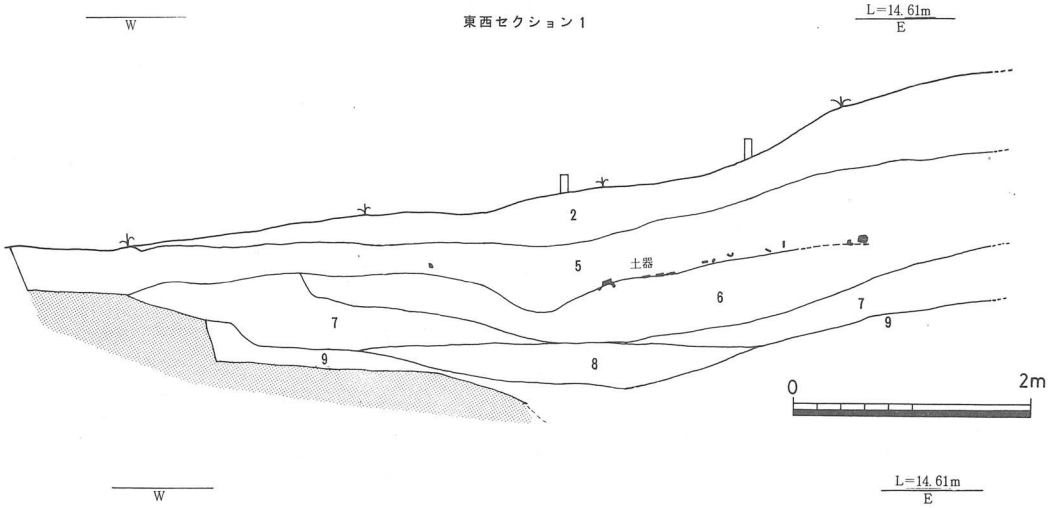
第24図　加工段及び周辺出土土器　1/3

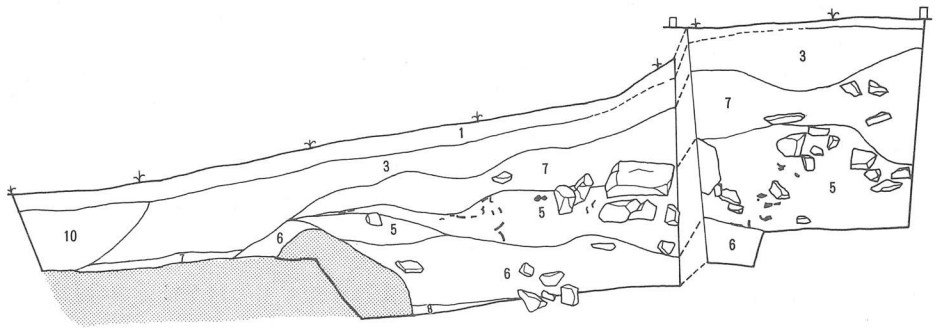
cm，深さ15cmの落ち込みが確認できたが，遺物等全くなく時期，性格は不明である。また，確認出来た地山の斜面はやや急な傾斜であった。

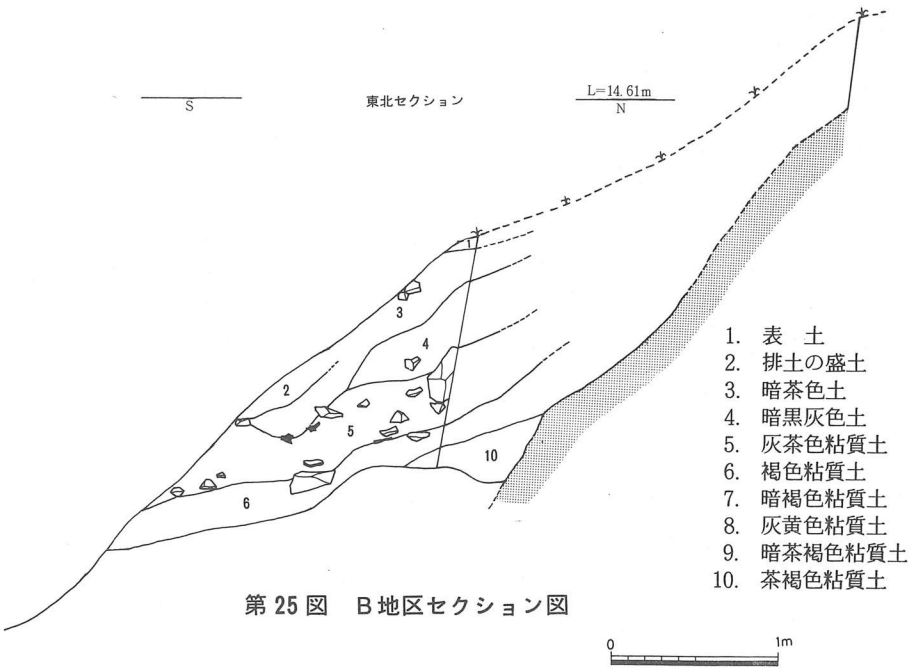
第5層出土遺物で実測可能であったものは55点で，甕形土器が多数を占めている。また，これらの多くが風化の為に調整が不明瞭であった。

甕形土器　（127～170）

口縁部片と底部ばかりで完形に復元できるものはなかった。口縁部はすべて複合口縁で

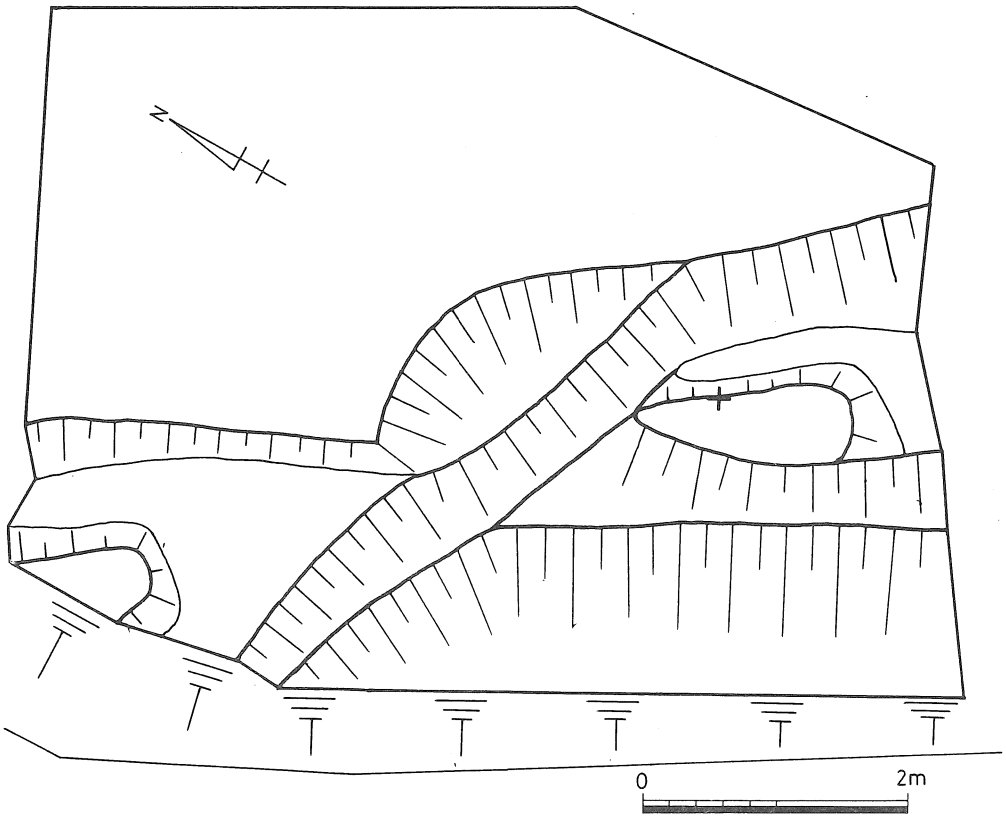






1. 表　土
2. 排土の盛土
3. 暗茶色土
4. 暗黒灰色土
5. 灰茶色粘質土
6. 褐色粘質土
7. 暗褐色粘質土
8. 灰黄色粘質土
9. 暗茶褐色粘質土
10. 茶褐色粘質土

第25図　B地区セクション図



第26図　B地区平面図

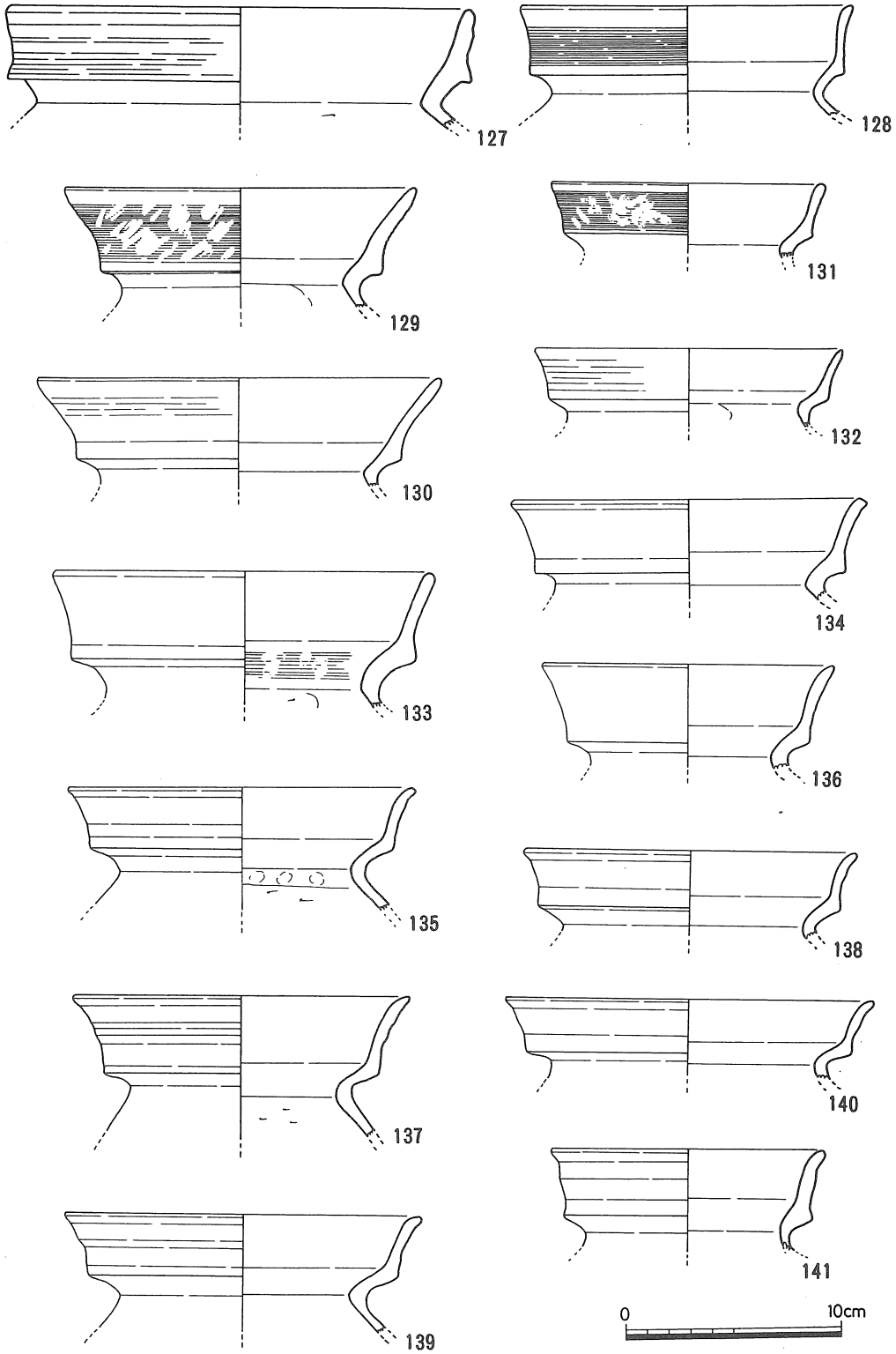
口縁部外面に文様を施すものと無文のものがある。文様を施すものは7個体あり，口径22.0～12.8cmまでのものである。127は器肉が厚くやや外傾してのび,凹線文を施す。128～132，159は平行沈線文を施すものであるが，129，130，159は長めの口縁部で，内面に明瞭な段をつくらず,128，131，132は直立ないしは外傾する口縁部で，内面に段をつくるものである。内面頸部以下は箆削りを施す。無文のものは口径20.0～13.0cmまでのもので，外傾してのびる口縁部をもつが，なかには口縁端部がさらに外反するもの（135，137～141，150，153）とそうでもないものがある。また，口縁端部が平らなもの（134，153）や，短めの口縁部で内面に雑な箆磨きを施すもの（152）などもみられる。165～170は底部片である。165～167は比較的しっかりとしたつくりの平底で，168～170は平底であるが小さく不安定なものである。

壷形土器　（167）

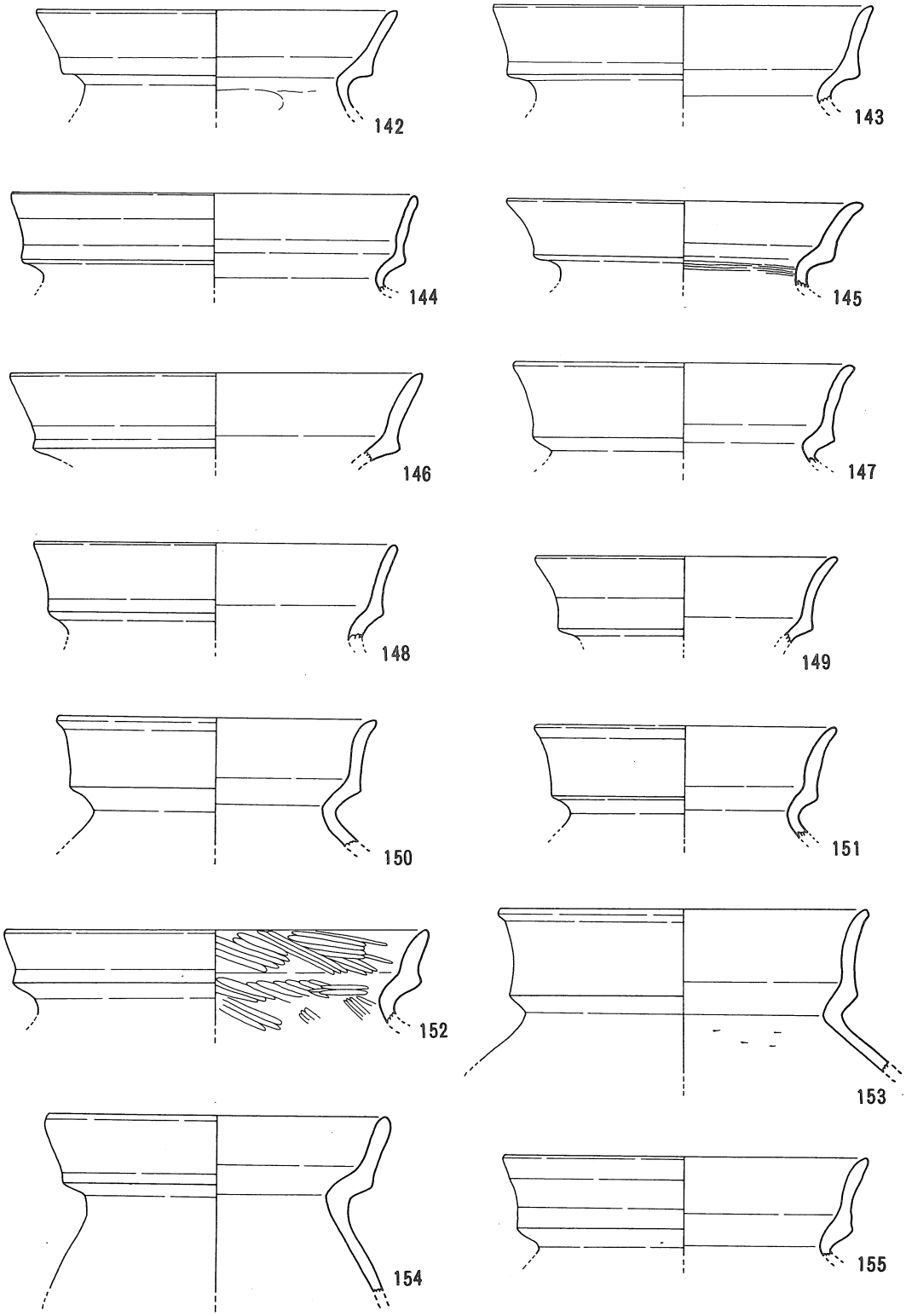
頸部だけ残存。垂直にのびた後外へ屈曲して口縁基部に至る。外面に平行沈線を施す。

器台形土器（171～173）

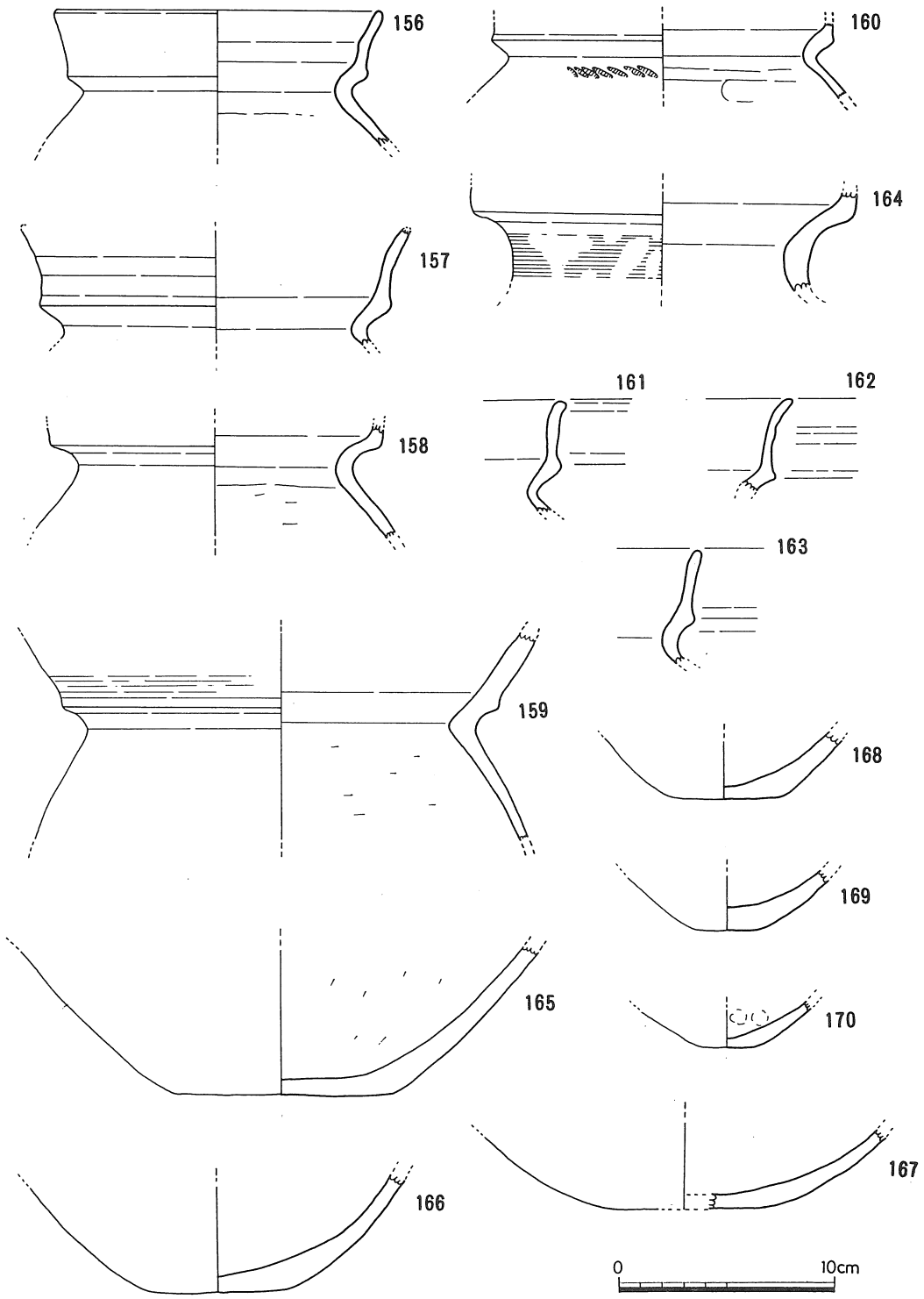
171は上台部，172は脚台部で口径は16.0cmと15.0cmである。ともに口縁端部付近で



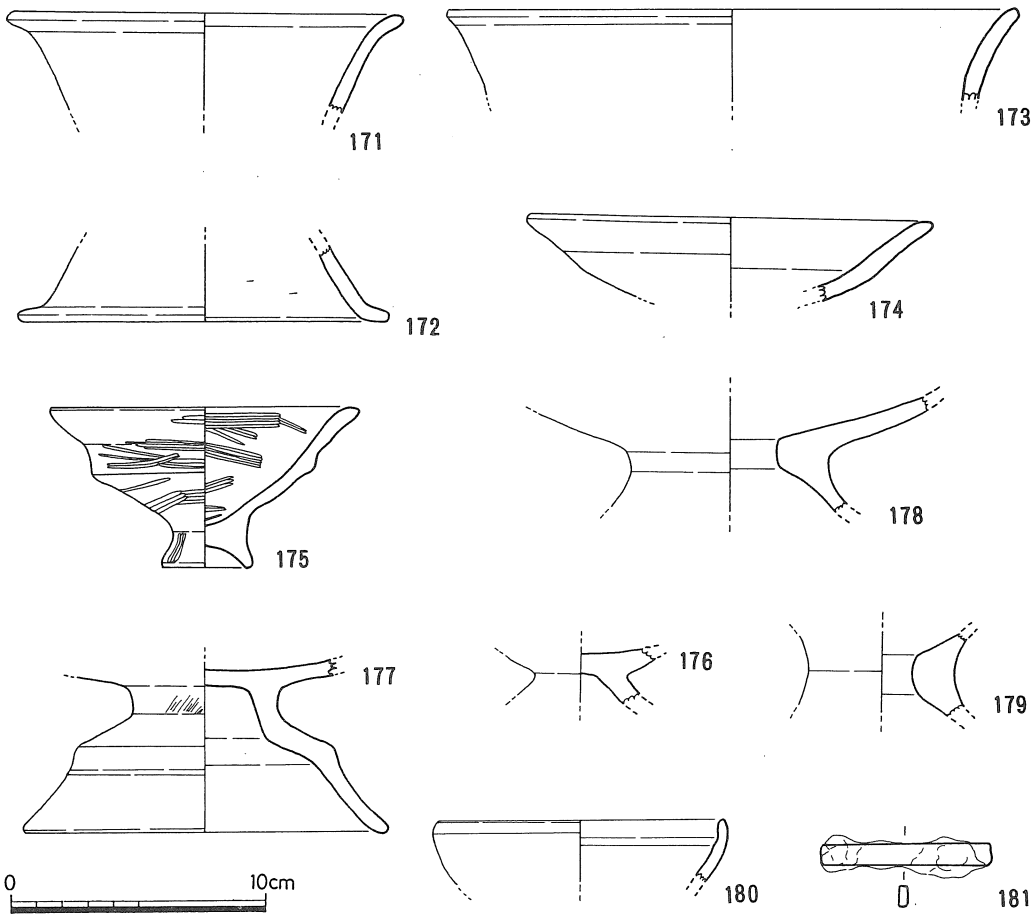
第27図　第5層出土土器　(1)　1/3



第28図　第5層出土土器(2) 1/3　0　10cm



第29図　第5層出土土器　(3)　1/3



第30図　第5層出土土器　(4)　1/3

さらに外反し，端部は丸い。173は口径23.0cmのやや大型のもので，端部は平らに近い。

高坏形土器　（174）

坏部片である。内彎ぎみにのびた後外反して端部に至る。端部は丸い。

低脚坏（175，176）

175は複合口縁の坏部をもつ特異な形態の低脚坏である。坏部は深く脚はあまり開かない。内外面ともに篦磨きで丁寧に仕上げている。

その他

177は高坏形土器の脚部であろうか。178は底部に孔のある低脚坏のような形をしている。179は器台の筒部か。180は須恵器の坏，181は形態不明の鉄製品である。この他に実測不可能であったが，二次焼成を受けた須恵器片があった。

Ⅳ　小　　結

調査の結果，間内越遺跡群は墳墓を中心としたものであり，しかも墳墓の形態が四隅突出型と呼ばれるものであることがわかった。

調査を行った１号墓は，前述のとおり十分な調査が出来なかったが，調査によって判明したいくつかの特徴的な事実を述べ，出土遺物と周辺の遺跡との関連を考察してまとめとしたい。

1. 間内越１号墓について

築造時期について　墳丘中央部やその周辺から多量の土器が出土しているが，主体部の検出・調査を行っていないために，確実に本墳墓築造時に伴う土器を判別し難かった。

これらの土器を詳細に観察すると，墳丘中央部出土土器と墳丘周辺出土土器とは明らかに違いがあることが分かった。墳丘中央部出土の土器群は，出土状態を見ると多量の土器が集中してあたかも意図的に破砕したような状態で出土していた。土器を見ると，壷・甕類と器台形土器が多くを占め，その特徴を示すと，壷・甕類は外傾する口縁部をもち端部は平坦か外側へ肥厚する。頸部との境の稜は，下向きかげんのものや若干段を作るようなものである。また，肩部に突帯をもつものや，たまねぎ形の特殊壷形土器等も見られる。これらの多くには竹管文を施したものが認められる。器台形土器はやや大型のもので，上台部，脚台部の端部が平坦で厚くなるものがほとんどである。このような端部を持つ器台形土器の出土例はあまり知られていない。

これらの土器群には時期的な差が認められず，同時期に一括埋納，破砕されたもののようである。

墳丘周辺出土の土器には，規則性が無く山陰の古式土師器編年[註1]でいうところの的場式から小谷式までという時期幅が認められ，上方からの流れ込みが多いものと思われる。これらのことから考えて，墳丘中央部出土の土器群は，他の土器とは様相を異にし，装飾性が豊かなことなどから特殊な用途の土器のようである。出土状態も弥生時代墓制の一つの特徴といえる主体部直上の供献遺物と同様のもので，土器破砕行為が行われたものとすれば，これら土器群の直下には埋葬施設が存在していた可能性が指摘できるのではないだろうか。

それ故墳丘中央部の土器群を本墳墓築造時の土器として取り扱い，時期を考えてみることとする。

これらの土器の特徴を示しているのが前述した竹管文様である。島根県内で竹管文を施

した土器の出土例は少なく，安来市西赤江町安養寺の安養寺３号墳[註2]や三刀屋町松本１号墳[註3]等に数点みられる。鳥取県を見ると，西伯郡大山町の徳楽方墳[註4]から比較的類似した土器が認められる。徳楽方墳のものは二重の竹管文ではないが，形態や細部の手法が類似しており，時期的に近いものと思われる。この徳楽方墳出土の土器は東森市良氏によると，小谷式期に当たるものとされ，[註5]本墳墓の土器もおおむねその時期に近いものと考えられるが，甕形土器や器台形土器の複合口縁部の稜等の形態に小谷式よりも古い要素が見られ，墳丘周辺出土の土器にも確実に小谷式に含まれるものがみられないことなどから，小谷式より若干先行する時期に築かれたものと考えられる。

次に墳裾から大型の壷形土器が２個体出土しているが，これらは墳墓築造時に埋置されたものであり，内部からは流れ込んだと思われる土器片を少量検出したものの，それ以外に何も検出出来なかったことから，壷棺としてではなく供献用土器として置かれた可能性が高い。これら２個体の土器とも内傾する口縁部で外面に多数の文様を施しており，古い段階の土器のイメージがあるが，墳丘周辺から供献用土器として大型壷形土器を置くという行為は，来美墳墓[註6]にもみられるようであるが，弥生時代よりも古墳時代前期から後期前半までに多く見られるもののようである。[註7]

以上の事から考えると，本墳墓は古墳出現前後，弥生から古墳へと変わる過渡期に築かれたものと考えておきたい。

形態について　本墳墓は丘陵先端の狭隘な尾根を段状に削平して平坦面を作り，これに削平した土砂を盛り上げ整形して作られたものであろうと思われる。これは盛土中に相当量の土師器片が含まれているので，墳墓築造の前に上部からの流出土器や，何らかの遺構に伴う遺物が表土に堆積したためであると考えるからである。

盛土の高さは，墳丘中央の遺物集中地点と墳裾の貼石の下段のレベルとを比較して，少なくとも70㎝以上であったものと思われる。これより高所の尾根上には三つの基段が観察されるので，これらもすべて墳墓であろうことは容易に予想される。更に墳墓群それ自体が丘陵尾根の頂点から構築されてはいないことから，尾根最高所には墳丘を持たない墓域が存在する可能性も否定できない。

本墳墓の形態は，上端幅7.0×4.9ｍの四隅突出型墳丘墓としては小型の墳墓であり，隅は先端に向かって若干細く角張って突出するものである。墳裾の石列は全く無く，墳丘斜面の下半部の貼石を上半部よりは整然と並べることによって，盛土の流失を防ぐと共に墓域を意識しているようである。

周溝は発掘調査範囲が限られていたため検出できなかったが，２号墓との墳裾の高低差

が少なくとも１ｍ以上はあると思われることから，雨水等の流入を防ぐために溝状の遺構が存在するものと思われる。

貼石は突出部にも全体を覆うように施されているが，いずれの突出部も稜線を意識して配石された様子はなく，南西の突出部は斜面の貼石よりも小さい拳大の石を多く用いて，隙間を埋めるように置かれていた。

さて，四隅突出型墳丘墓の分類については従来いくつかの方法が試みられている。その中で，川原和人氏は突出部の形態に着目してこれをＡ～Ｃ類に分類され，[註8]『Ａ類～Ｃ類の変遷が決してスムーズに行われたものではなく，複雑な発展過程をたどったものと思われる』とされている。また，山本清氏は，墳裾の石列構造を分類してこれをⅣ類に分けられ，『型式としてはⅠ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳの順序で変化したということであって，Ⅳ→Ⅲ→Ⅱ→Ⅰという複雑化の当然の理由は考えられないのである』とされている。[註9]これら２つの分類に，土器編年を加えて時期的な変化としてまとめられたのが房宗寿雄氏で，これによると『その時期的な変化は石列構造の複雑化および突出部の大規模化の方向で把えられ，明らかに型式的な発展を見ることが出来る』とされている。[註10]

以上のことから，本墳墓の形態の特徴をこれに当てはめて考察してみると，古式の特徴を持つことになるが，出土遺物の特徴からは明らかに矛盾しているように見受けられる。時期的な比較研究の進んでいる土師器の特徴から見た上で，本墳墓の遺物が弥生時代から古墳時代にかけての移行期に築造されたものであるとの認識に立つならば，本墳墓に限って形態の発展的変化に逆行するような状況もあり得ると考えていた。しかし，隣接する来美１号墓においても突出部の形態や貼石の状況，土器の供献方法にかなりの類似性が見られることがわかり，これは本墳墓だけに見られる傾向ではないことが分かった。来美１号墓における出土遺物は，本墳墓よりも時期的に古い様相を示すことを考えると，この２つの墳墓には共通の文化や地域性をもつ集団が，時間的な連続性をもって存在していたことを伺わせるのではないだろうか。

間内越１号墓よりも高所に位置する２～４号墓は１号墓と同様か更に古い時期であることが予想されるので，これらを調査することによっては墳墓の規格性や，それによる細部の形態変化等の類例が増加し，他の地域（安来市仲仙寺墳丘墓群，宮山４号墓等）の大型の四隅突出型墳丘墓との階層的な格差が生じてくる可能性もある。

いずれにしても現段階で言えることは，ある時期から規模が大きくなり四隅が強調されて発展していく系列と，それと同時に墳丘規模はほとんど変化せず突出部も大きくならない旧来の形態を保つ系列のものに分化していったのではないかと考えているところである。

2. 間内越遺跡について

間内越遺跡Ａ地区，Ｂ地区から加工段，掘立柱建物跡や遺物包含層を検出した。これらについて簡単にふれ，まとめとしたい。

遺物包含層について　Ｂ地区の崖面において検出した遺物包含層である。第５層の灰茶色粘質土がそれで，多量の土器が出土した。実測可能であったものは55点であるが，完形に復元できるものは全く無く，口縁部等の破片が多数であった。器種としては甕形土器，壷形土器，器台形土器，高坏形土器，低脚坏その他の土器であり，量的には甕形土器が圧倒的多数を占めている。甕形土器については全体的なプロポーション等は不明であるが，口縁部の形態，文様等により６つのタイプに細分でき，以下それぞれの特徴を記述する。

Ａ類（127）　口縁部はやや外傾してのび，端部は丸くおさめる。口縁部内面に段をつくらない。複合口縁部の稜は厚く下向きのものである。口縁部外面に凹線文を施す。

Ｂ類　口縁部外面に多条の平行沈線文を施すもので，口縁部の形態により，さらに２つに分類出来る。

Ｂ－１類（128・131を標式とする）　口縁部は垂直かやや外傾するもので，端部は丸くおさめる。複合口縁部の稜は小さめのもので，下方か横方向にのびる。口縁部内面に段をつくり，外面に多条の平行沈線文を施す。

Ｂ－２類（129・130を標式とする）　Ｂ－１類に比べて口縁部が長く大きく外反してのびるもので，端部は丸い。口縁部内部に明瞭な段をつくらない。複合口縁部の稜は下向きか段となるものである。外面に多条の平行沈線文を施す。

Ｃ類　口縁部は外反または外傾してのびるもので，端部の形態により３つに細分できる。

Ｃ－１類（136を標式とする）　口縁部は外反または外傾してのび，端部は細くなる。複合口縁部の稜は若干下方へのびるものか，段となるものである。

Ｃ－２類（135・137を標式とする）　口縁部は外反ぎみにのびるが，口縁端がさらに強く外反する。端部は丸みをおびる。複合口縁部の稜はあまり突出せず，段となるものである。

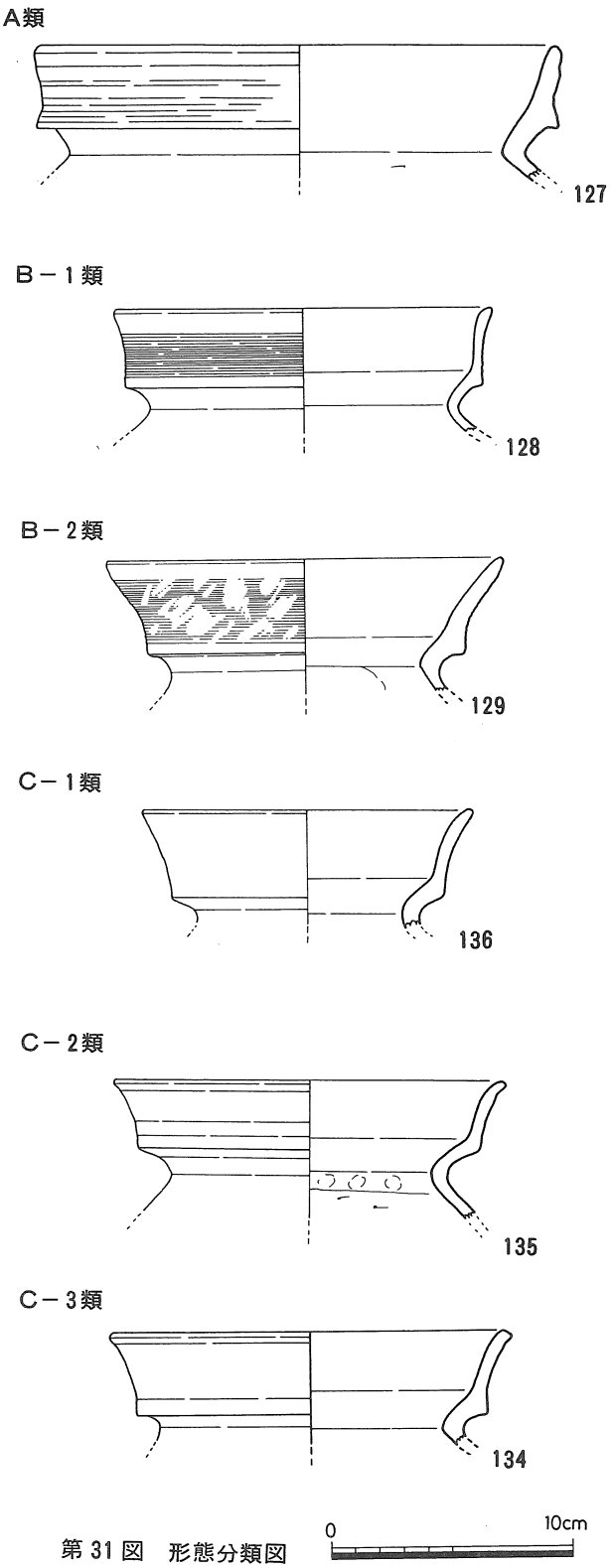
Ｃ－３類（134・153を標式とする）　口縁部は外反してのび，端部は平坦となる。複合口縁部の稜はやや下向きか横に若干突出するものである。

以上のように，甕形土器を６タイプに分類して特徴を述べた。これら６タイプのものを当地方の当該期の土器編年に当てはめて，年代的位置付けを行いたい。

当地方における弥生終末期から古墳時代前期にかけての土器編年について，従来より様々な検討がなされているが，まだ十分に整理されているとは言いがたい。従って今回出土

した土器も従来の編年の型式に完全にあてはまるものとは限らず，各タイプがどの型式内容に近いのかを検討してみたい。

A類は，口縁部外面に凹線文を施すもので，この様な特徴を有するものは九重式に属するものである。B類は口縁部外面の形態の相違から2つに分類したが，B－1，B－2類ともに口縁部外面に多条の平行沈線を施しており，時期的に同時期のものと考えて差し支えないものと思われる。これらは的場式に属するものと考えられる。C類は無文のもので，口縁端部の形態の違いから3つに分類した。C－1類は口縁端部を細く仕上げるもので，複合口縁部の稜はやや下向きか段をなしており，横方向への突出はみられない。この様な特徴を有するものは鍵尾A－5号墓出土の土器に類似している。C－2類はC－1類と比べると，口縁端付近でさらに外方へ屈曲するという特徴が見られ，平所1号住居跡出土の土器[註11]の特徴と類似するようである。この平所1号住居跡の土器の編年的位置については，藤田憲司氏が鍵尾式と小谷式の間の一つの型式として取り扱い，氏の編年のⅣ期に当たるものとされている。[註12] C－3類は口縁端部が平坦面となるもので，これは小谷式の土器と似た特徴である。しかし複合口縁部の稜の形態がC－1，C－2類と同様のものであることから，C－3類は一部には小谷式の特徴をもつものの，そ



第31図　形態分類図

れより古い要素も含んでいることから，小谷式より若干古い段階に位置付けられるのではないだろうか。

以上簡単ではあるが，包含層から出土した甕形土器の位置付けを検討してみた。前述したとおり，当該期の土器編年が十分に整理されていない中で，この様な位置付けを行ったために，多くの問題を残していることは否めない。実際，Ｃ－２類の時期について平所１号住居跡の土器と類似することから，藤田編年Ⅳ期に属するものとしたが，この平所１号住居跡の土器を鍵尾式と小谷式の間に介在する型式としてとらえた藤田編年に対し，房宗寿雄氏等は鍵尾Ａ－５墓の土器に類似するものとして異論を述べている。[註13] このことから考えるとＣ－１類とＣ－２類は同時期のものとなるが，その判断については，今後の資料の増加を待って検討したい。

次にＡ地区の加工段についてであるが，当初住居跡と考えて調査を行ったが，住居跡と呼べるものではなかったために，加工段として取り扱うこととした。この加工段は，中央部にピットを１穴有していたが，この他に付属する遺構等は検出出来なかった。それ故，この加工段の性格については不明としか言いようがない。時期については，床面上から土器が出土していないが，覆土中出土の土器を見ると，九重式～鍵尾Ａ－５号墓までのものであり，多少時期幅が認められるが，加工段の時期も概ねこの時期に当たるものと思われる。そうするならば，１号墓は小谷式より若干先行する時期に築造されたものであるため，加工段は１号墓よりも先に作られていたことになる。このことから，本加工段は１号墓の上方に存在する２号墓等に関連するものとみることが出来る。

ＳＢ－０１やその他の土壙，ピットについては明確な時期を判断することは出来ないが，周辺出土の須恵器から見て，歴史時代頃と考えられる。これらの建物等がどのような理由でここに作られていたのか不明である。

分布調査した平所遺跡については，過去に県教育委員会文化課が調査を行った平所遺跡[註14]の北端部分であったが，遺構等を検出することが出来なかったため，平所遺跡の北限を示すものであろう。土器は少量出土しており，これらの土器を見ると，複合口縁の退化した時期（従来の編年で言うところの大東式にあたる）から，風化の為不明瞭であるが，糸切り痕をもつ須恵器までの広範囲な時期に営まれていた遺跡のようである。

最後に間内越Ｂ地区の遺物包含層出土の土器の中に実測不可能であったが，二次焼成を受けたと見られる須恵器片が数片みられ，本遺跡周辺に窯跡等の遺構が存在する可能性も考えられる。

四隅突出型墳丘墓の発生期の形態は，現在までの調査例から，中国山地にそれを求めることが出来る。しかし逆に，その地域から発生したものであるとは，類例の少ない現時点では断定出来ない。その特異な形態が発見されて以来，山陰地方の平野部において，近年かなりの数が認められるようになった。とすれば，それ以前においても四隅突出型としてはっきりは認められなかったが，それに近い状況の遺跡もあったのではないかと思われる。そうした意味において松江市友田遺跡[註15]に見られる方形の貼石墓が，四隅を意識していたものだとするならば，その墳裾と隅の形態からみて発生期に近い古式の様相を示す墳丘墓として注目してみたい。

今後の調査においても，こうした性格の遺跡に対しては，四隅の石列が明確に認められない場合でも，より慎重な調査を行う必要があると考える次第である。また，１号墓や包含層から出土した土器についても，確実な編年的位置付けは出来なかったが，今後の山陰の古式土師器研究に好資料を提供したものと言えよう。

第2表　四隅突出型墳丘墓一覧

※は可能性のあるもの

番号	名　　称	所　在　地	墳丘規模(m) 長辺×短辺×高さ	埋葬主体	出土遺物	時　期	現　状	文献
1	※　仲仙寺8号	島根県安来市西赤江町	18×14×1.5			弥生後期	国史跡	註16
2	仲仙寺9号	〃	27×22.5×3.0	木棺3	管玉・壷・甕・器台・高坏等	〃	〃	〃
3	仲仙寺10号	〃	26×25×2.0	木棺4・土壙8・箱形石棺	管玉・壷・器台・高坏等	〃	〃	〃
4	安養寺1号	〃	20×16×2.0	木棺1・土壙3	壷・器台・高坏等	古墳初期	消　滅	註17
5	〃　3号	〃	23×3×1.3		高坏	〃	〃	〃
6	宮　山4号	〃	30×24×2.5	木棺1	直刀	〃	国史跡	〃
7	※　下　山	〃	?	?			未調査	〃
8	※　塩　津1号	島根県安来市久白町	42×30×3.5	?			〃	〃
9	※　大木権現山	島根県八束郡東出雲町	?					註18
10	来　美1号	島根県松江市矢田町	14×14×2.0	土壙7	壷・甕・器台等	弥生後期	消　滅	本誌
11	間内越1号	〃	8.8×6.7×?	?	壷・甕・器台・高坏等	古墳初期	現状保存	本誌
12	※　友　田	島根県松江市浜乃木町	11×?×0.5	?	壷・甕・高坏	弥生後期	消　滅	註15
13	西　谷1号	島根県出雲市大津町	8×5×1.7	土壙4	甕	〃	現状保存	註19
14	〃　2号	〃	25×?×2.0	土壙2以上	壷・器台	〃	〃	〃
15	〃　3号	〃	47×39×3.5			〃	〃	〃
16	〃　4号	〃	35×32×3.0		特殊器台・壷・器台・底脚坏	〃	〃	〃
17	〃　6号	〃	17×?×1.0	土壙2以上	器台・高坏	〃	〃	〃
18	〃　9号	〃	48×38×4.0		特殊壷・壷	〃	〃	〃
19	※南講武小廻	島根県八束郡鹿島町	?		壷・甕	〃	一部保存	註20
20	順庵原1号	島根県邑智郡瑞穂町	11×8×1.2	箱形石棺2・木棺1	ガラス小玉・管玉・壷・甕等	〃	県史跡	註21
21	阿弥大寺1号	鳥取県倉吉市下福田	17.7×17.7×?	木棺1・土壙11	壷・甕・器台・高坏	〃	国史跡	註22
22	〃　2号	〃	8.0×8.0×?		壷・甕・器台	〃	〃	〃
23	〃　3号	〃	9.0×9.0×?		壷・甕・器台	〃	〃	〃
24	山　根	鳥取県倉吉市山根						註23
25	糸　谷1号	鳥取県岩美郡国府町	17×16×2.0	土壙8	壷・甕・器台・高坏・低脚坏・鉄器	古墳初期	現状保存	註24
26	※　西桂見	鳥取県鳥取市桂見	(60以上)×?		壷・甕・高坏	〃	消　滅	註25
27	矢谷MD1号	広島県三次市東酒屋町	18.5×12.5×?	木棺7・箱形石棺2・土壙2	管玉・刀子・特殊壷・器台・高坏・鉄器等	〃	国史跡	註26
28	宗祐池西1号	広島県三次市	11×6			弥生中期	消　滅	註27
29	殿　山38号	広島県三次市大田幸町	13×6.8×0.7	土壙1	甕・高坏・鉢	〃	一部保存	註28
30	〃　39号	〃				不　明	現状保存	〃
31	歳の神東3号	広島県山県郡千代田町	12×(5)	箱形石棺2		弥生後期	〃	註29
32	4号	〃	11×(8)	箱形石棺6	壷・甕・器台	〃	〃	〃
33	※　佐田谷1号	広島県庄原市高町	19×14×2.1	木棺4	壷・甕・高坏・鉢	〃	〃	註30
34	※　田尻山1号	広島県庄原市	12×11×(1.5)	土壙	壷・甕・高坏・鉢	〃	消　滅	註31
35	杉　谷4号	富山県富山市杉谷	47×47×3.0		壷・高坏	古墳初期	現状保存	註32

註

1. 弥生後期から古墳時代前期にかけての土器編年は大きく九重式→鍵尾式（的場式）→小谷式→大東式という編年がある。
2. 出雲考古学研究会「荒島墳墓群」1985年
3. 山本　清「松本古墳調査報告」島根県教育委員会1963年
4. 大山町教育委員会「徳楽方墳」『郷土の文化財』1983年
5. 東森市良「徳楽方墳出土の土器」『松江考古第6号」1985年
6. 山本　清「松江市矢田町来美の四隅突出型方形墳丘」本書付編1989年
7. 松本岩雄「墳丘出土の大形土器」『山陰考古学の諸問題』1986年
8. 川原和人「島根県における発生期古墳」『古文化談叢第4集』1978年
9. 山本　清「出雲の四隅突出型方墳」『日本のなかの朝鮮文化第28号』1975年
10. 房宗寿雄「山陰地域における古墳形成期の様相」『島根考古学会誌第1集』1984年
11. 島根県教育委員会「平所遺跡1」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』1976年
12. 藤田憲司「山陰（鍵尾式）の再検討とその併行関係」『考古学雑誌第64巻第4号』1979年
13. 房宗寿雄「出雲地方における古墳形成期の土器編年について ― 最近の研究状況をめぐって ―」『島根考古学会誌第5集』1988年

    花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究 ― 島根県内の資料を中心にして ― 」『島根考古学会誌第4集』1987年
14. 註11及び，島根県教育委員会「平所遺跡2」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1977年
15. 松江市教育委員会「松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」1982年
16. 安来市教育委員会「仲仙寺古墳群」1972年，安来市教育委員会「史跡仲仙寺古墳群」1977年
17. 註2に同じ
18. 東出雲町教育委員会「大木権現山古墳群」1979年
19. 出雲考古学研究会「西谷墳墓群」1980年
20. 鹿島町教育委員会「鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書1」1986年
21. 門脇俊彦「順庵原1号墳について」『島根県文化財調査報告7』1971年
22. 倉吉市教育委員会「上米積遺跡群発掘調査報告Ⅱ－阿弥大寺地区」1980年
23. 渡辺貞幸先生の御教示による。
24. 倉吉博物館「発掘された古代の伯耆と因幡」1981年
25. 鳥取市教育委員会「西桂見遺跡」1982年
26. 広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター「松ケ迫遺跡群発掘調査報告 ― 三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査 ― 」1981年
27. 三次市教育委員会「宗祐池西遺跡現地説明会資料」1980年
28. 広島県埋蔵文化財調査センター「大判・上定・殿山」1987年
29. 広島県埋蔵文化財調査センター「歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群」1986年
30. 広島県埋蔵文化財調査センター「佐田谷墳墓群」1987年
31. 広島県教育委員会「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告2』1978年

32. 富山県教育委員会「富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書」1974 年

付編　松江市矢田町来美の四隅突出型方形墳丘

山　本　　清

1. 緒　　言

この墳丘は，昭和45年に筆者が発掘調査したが，その前年に邑智郡瑞穂町順庵原で，方形の墳丘の四隅が突出した特異な墳形が検出されていたのに対し，この来美の墳丘も同様の特徴をもつことが確認された。すなわち，これによって，順庵原の例は偶発的な特例ではなく，それは一つの「類型」に属する墳形であることが明らかとなったのであった。さらに同年夏には，安来市西赤江の仲仙寺古墳群の調査で，同型の墳丘の著例が二基検出された。そこで，当時この種の墳形を，とりあえず「四隅突出型方墳」の名で取り扱うこととしたのであった。

このような墳丘形式が認められたことで，広く日本各地でも検出されるであろうと期待したが，その後発見例は増加したが，ほとんど山陰と，山陰寄りの広島県などに見られ，一部北陸でも検出され，地域性の顕著な墓制という印象を与えているのである。

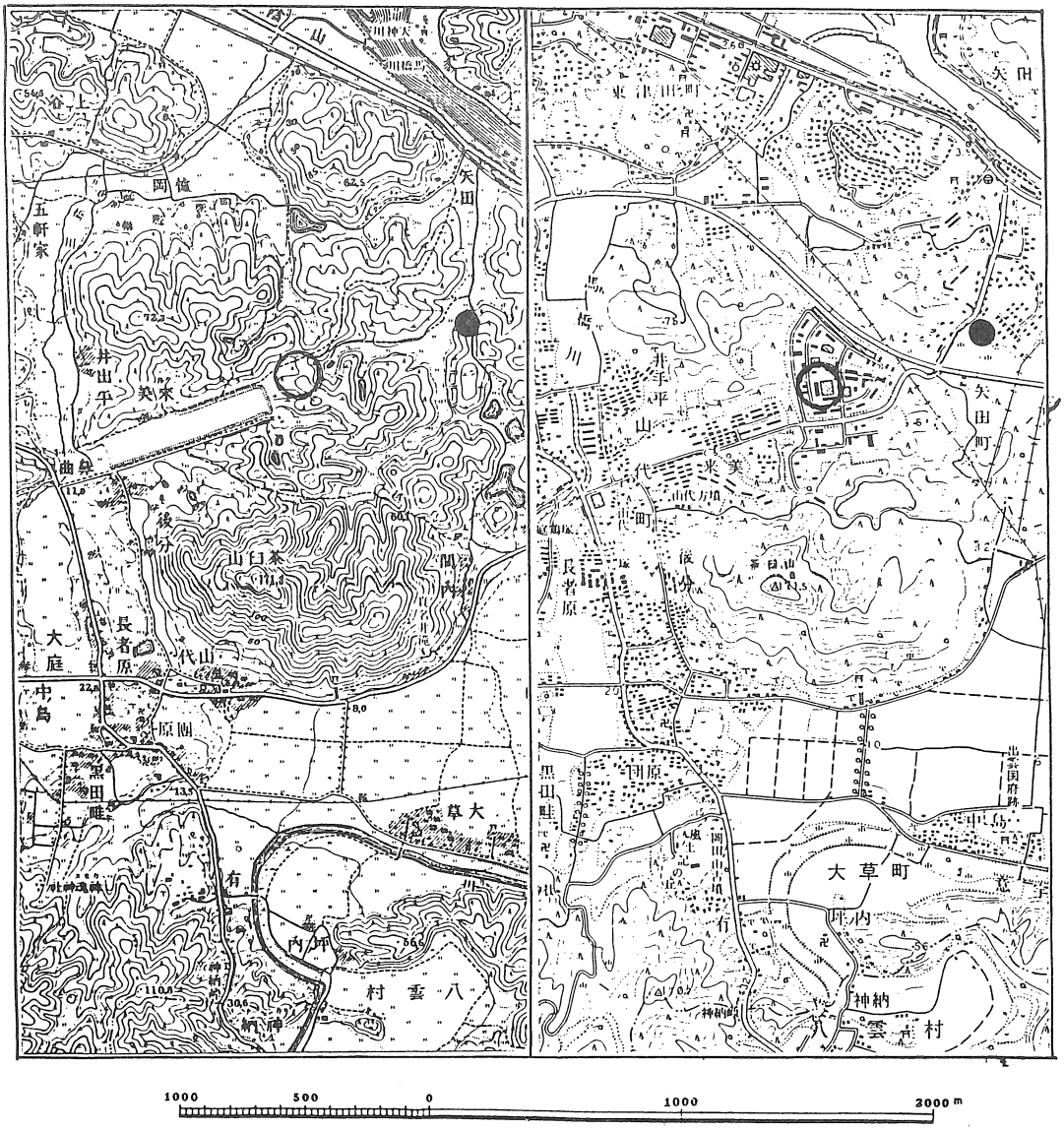
以上のように，来美の四隅突出型方形墳丘の調査は，研究史上では見逃せない意義をもつものでありながら，これまでその報告を公にしないままに過ごしたところ，昭和63年にその来美の東方僅かに600 mの間内越で，同型の墳丘が検出され，両者の関連性をも思わせるものがあるので，ここに来美の四隅突出型方形墳丘について，その概要を記すこととしたい。

2. 調査の経緯

筆者が調査する前に，近藤正氏が現地を踏査して，この所に土器が散布し，埋葬遺構の存在が考えられることを教示された。それは同所が所有者により，柿畑にする目的で開墾されたため，近藤氏が現地を視察したためであったと記憶する。

筆者は昭和44年度に「古墳初現期における墓制の研究」の主題で，文部省の科学研究費の支給を受けることになっていたので，その事業の一環として，この遺跡の発掘調査を実施したのであった。発掘作業は，昭和45年１月24日から，３月１日に至る間の合計21日を費して終了した。

発掘した範囲は，ここに記す墳丘のほか，その南に接する地約30㎡と，東方約10 mの地約20㎡とも，試掘したが，遺構を認めなかった。遺物は前者では７世紀ごろ以降の須恵器



第１図　来美の四隅突出型弥生時代方形墳丘の位置　○は来美　●は間内越

片若干が検出された。

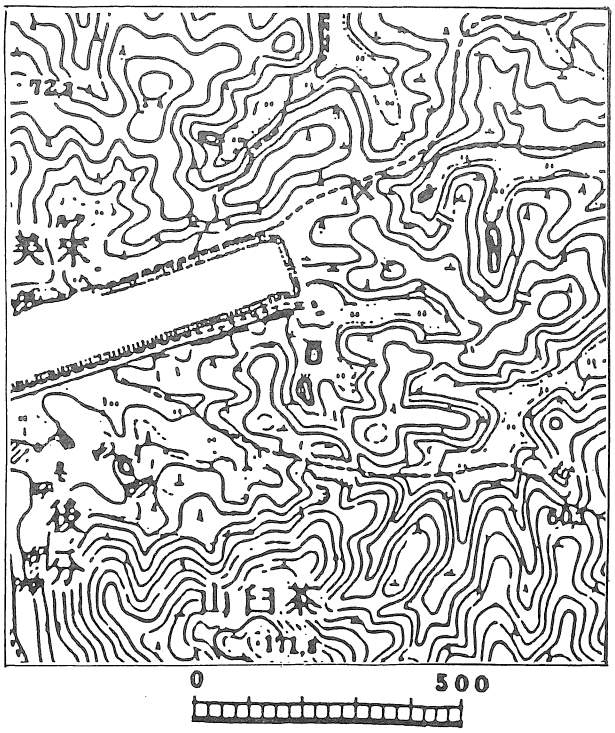
この調査には，島根大学の学生前島巳基，坂本雅邦，横山純夫，原誠，宍道正年，石川恵子，森本真理子，佐藤章子，大山修その他の諸君の献身的参加を得て完了することが出来た。謝意を表するとともに，今は消滅して見る影もない墳丘の実状を，作業を通じて細かに観察した数少ない生証人であることを思うのである。

3. 位　　置

主題の遺跡所在の地籍は，松江市矢田町字来美515番地（当時の地権者は同市古志原町

1068奥原保友）であって，その西側は山代町の，戦前に松江連隊の射撃場であった，東西約700ｍ，南北100ｍばかりの平坦地から，谷の奥の丘陵に少し上がった所。東側は矢田町の西方の谷奥へ上りつめた所，いわば東西の谷奥に当たり，標高40ｍ余の丘陵高所から北方へ緩やかに下降する，緩傾斜地の底に近い所に立地する。

このあたり一帯は，後年松江市の内陸工業団地の敷地として，造成工事がなされたので，発掘当時の地形は一変していることは，新旧の地形図（第１図）に見る通りである。



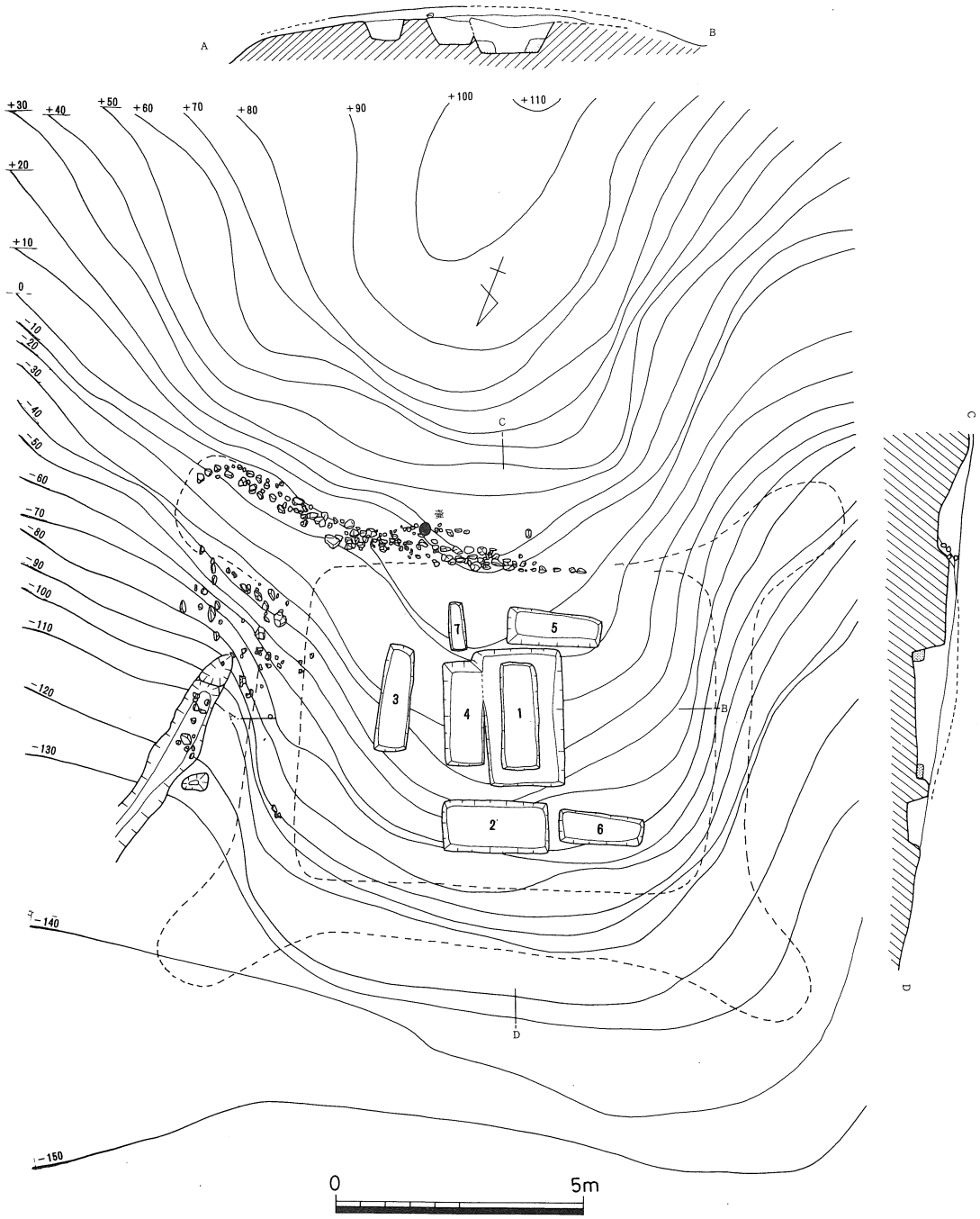
第２図　来美四隅突出型墳丘の立地

4. 墳　　丘

墳丘は四隅突出型の方形墳丘であるが，調査当時墳丘の大部分は，大体において原形を残していたものの，東・西と北の三方は，開墾のためかなり削りこまれていて，突出部は東南方の一つだけが残っている程度であり，正確な原型の推定はできないが，墓壙のうち，最大の１号墓は通例の如く，墳頂平面のほぼ中央にあったのであろうことを念頭に，ほぼ原形を残している南側の墳頂の線および墳裾の線，および東南方の突出部を本に，遺存する墳丘の形を総合すると，原形はおよそ次のようであったと推測される。

墳頂の平面は，東西約８.５ｍ，南北約６.５ｍ，突出部を含む全形では，東西約13.5ｍ，南方約10.5ｍあり，突出部を除いた方形の基幹部は，東西約10ｍ，南北約８ｍである。墳裾は同一平面になく，山側の南側は僅かに底の幅約80㎝，深さ40～50㎝の溝で墳丘を区画するに過ぎないが，北側では高さ１.２～１.５ｍの高さであったと推定される。次に突出部は先端は円く，幅約２ｍで，３ｍばかり突出するものである。

墳丘に関し，外形の次に注目されるのは，礫を用いた施設である。それは，南側の一辺においては，かなりよく遺存して本来の姿が推察される。南側墳裾の溝には礫がかなり散乱しているが，遺存状態の良好な墳丘斜面を見ると，径15～20㎝程度の礫が墳丘斜面全体



第3図　墳丘実測図

に貼られていたものであり，そのうちの若干は溝底に落下散乱したものであることが知られる。

次に突出部では，墳裾の線に礫を密接して立て並べた状態がよく保存されていた。突出部で認められる立礫列は，突出部だけであるのか，直線状の墳裾に，最下段の貼石に沿っ

ても存在したのかは確認できなかった。

墳頂部に盛土があったか否かは，小さい墳丘でもあり断定は困難だが，中央の大型の1号墓の墓壙が地山（旧表土を削り去ったもの）の面から掘り込まれており，その地山上面は，墳丘の南側斜面の貼石の上縁より20～30㎝低いことからして，その程度の盛土を，旧表土を削り去った地山の上に覆ったと見てよさそうである。

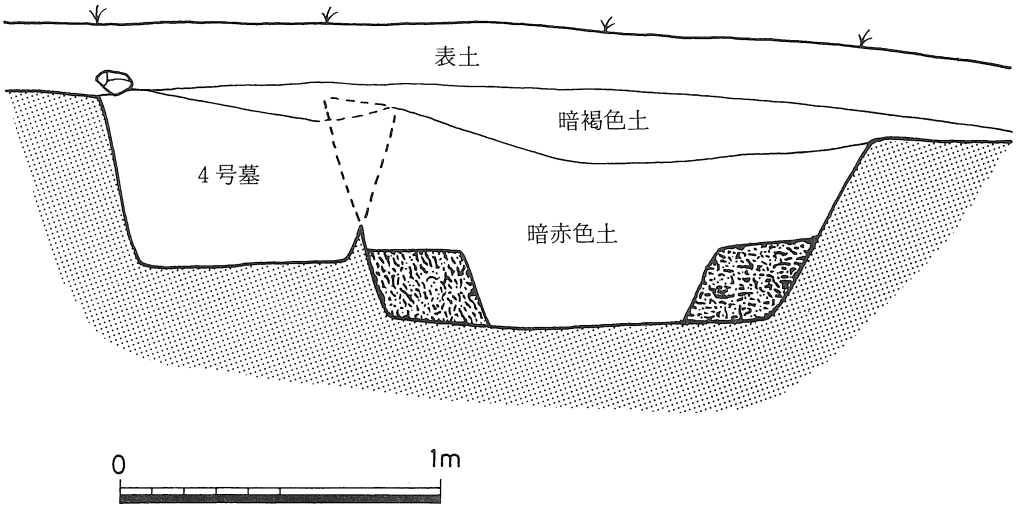
5. 墓　　壙

墓壙は墳頂に7基あり，ほぼ中央の1号墓が最大である。いずれも簡単な素壙（段のない墓壙）であるが，1号墓では，箱形木棺を壙底に置き，その周囲に，つき固めたと見える堅い土が詰められていて，一見，二段式の墓壙かと思われる状態であった（第4図）。他の6基の墓壙には，このような木棺痕は認められなかった。各墓壙の規模は，およそ第1表の通りである。墓壙の深さは，1号墓では60～70㎝であるが，墳頂面は南方へと傾斜し，地山面もかなり失われているので，もとの深さの不明なものもある。

各墓壙の平面形は，実測図に示す通り，この種の通例のように頭部が若干広いものがあるが，長方形のものもある。壙底面は大体ほぼ水平である。

6. 遺　　物

遺物は土器だけであり，墓壙底から検出されたものはない。それは，この時期の類型的

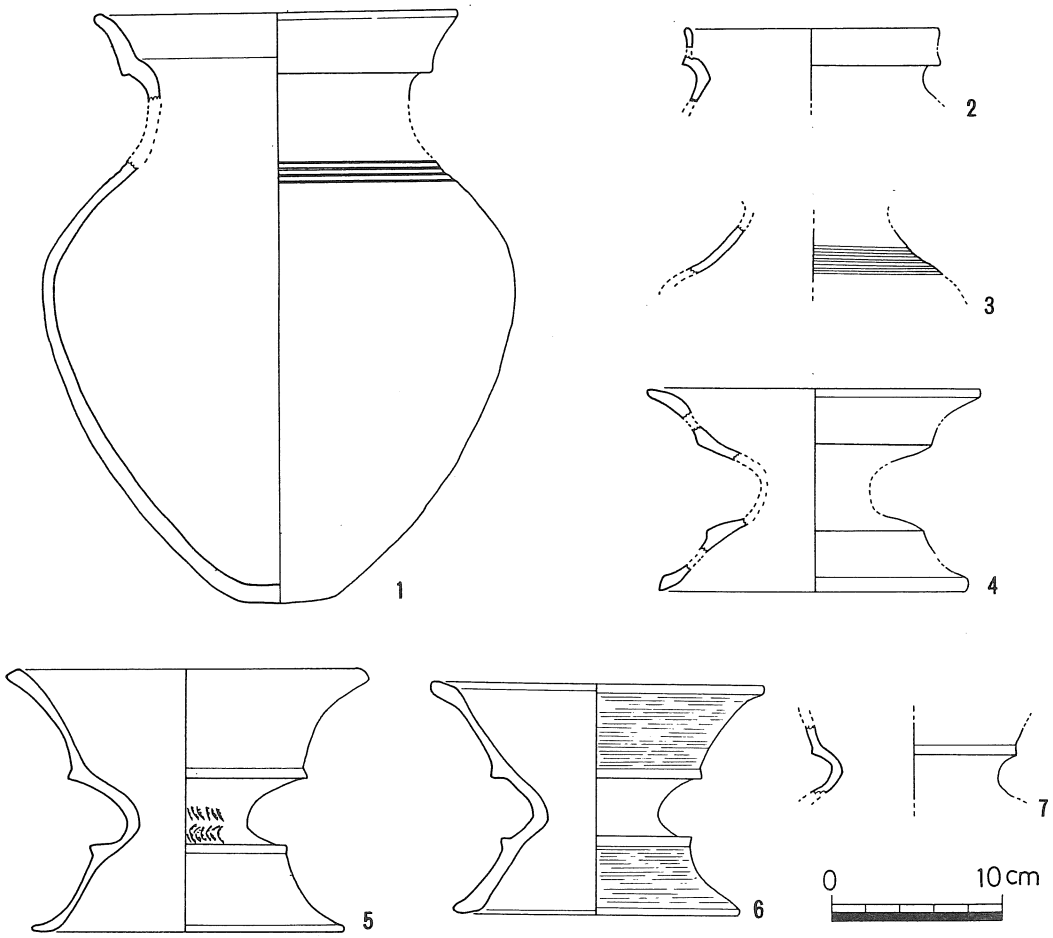


第4図　第1号墓壙横断図

主　体	型式	長　(m)	幅　(m)	木　棺　痕　(m)
1 号 墓	無 段	2.75	1.62	長2.2，幅0.85～0.7，深0.25
2 号 墓	無 段	2.20	1.10	無
3 号 墓	無 段	2.15	0.5～0.3	無
4 号 墓	無 段	2.15	0.80	無
5 号 墓	無 段	1.95	0.80～0.65	無
6 号 墓	無 段	1.80	0.85～0.65	無
7 号 墓	無 段	1.05	0.35～0.30	無

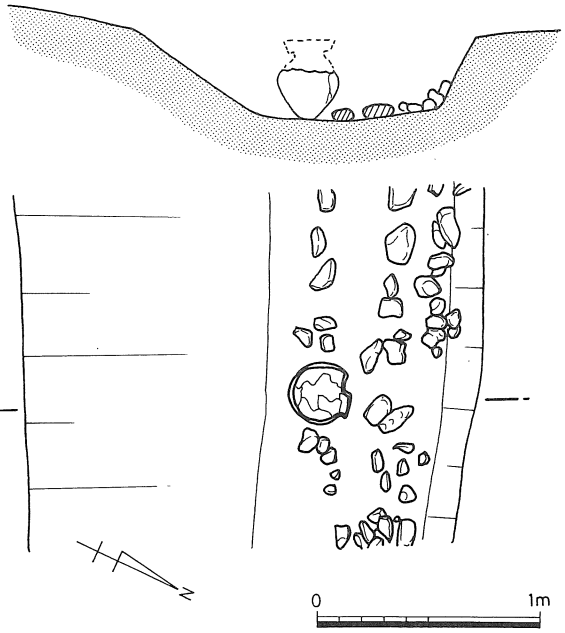
第1表　墓壙計測表

土壙墓の通例と同様である。土器の出土位置の明らかなのは，1号墓の埋土の上と，南側の墳裾とである。発掘以前の表面採集品もあるが，1号墓の埋土の上に置かれていたものの一部である可能性が強い。



第5図　出土の土器

1号墓の土器　1号墓の土層は第4図に示すように，墓壙内の埋土（暗褐色土）と表土との間に，黒っぽい「暗褐色土」層があり，土器は砕けた状態で集中していた。この層は，本来は埋葬時の地表面の土で，長く地表面にあったため有機質を多く含んで黒っぽいこと，多く類例の見られるところである。その下面中央部が下方へふくらんでいるのは，木棺の腐朽に伴い壙内の埋土の沈下によるものであること，この種の土壙墓の通例である。この層内の土器は，埋葬時には地表面に供献されていたのが，風化その他で破砕したと考えられる。この土器包含層の上の「表土」は，南方の高所から流下した土が，まず南側墳裾の溝を埋めた後に，さらに墳頂面に堆積したのである。



第6図　墳丘南側の墳裾（溝）の土器

1号墓上の右の層から検出された土器片は，細片がかなり多数あるが，形を復原し易いものを第5図（2・3・4）に示した。4は器台としては，やや異形であるが，仮にこのように復原してみた。

南側墳裾の土器　南側墳裾の溝状の所，東西中軸線よりやや東寄りに，第6図に示すように，一個の壷が摺えられていた。甚だしく風化し，肩部から上は破砕して中に落ち込んでいたが，底はきちんと地面に据え置かれた状態を保ち，本来の供献位置のままと考えられた。この壷は，肩部に4条ばかりの，しっかりした平行沈線をめぐらし，口縁帯（「第7図鼓形器台等各部名称」参照）は無文であるが，その下端は「下延型」であり，底部も「平底」の形がほとんど崩れていない。

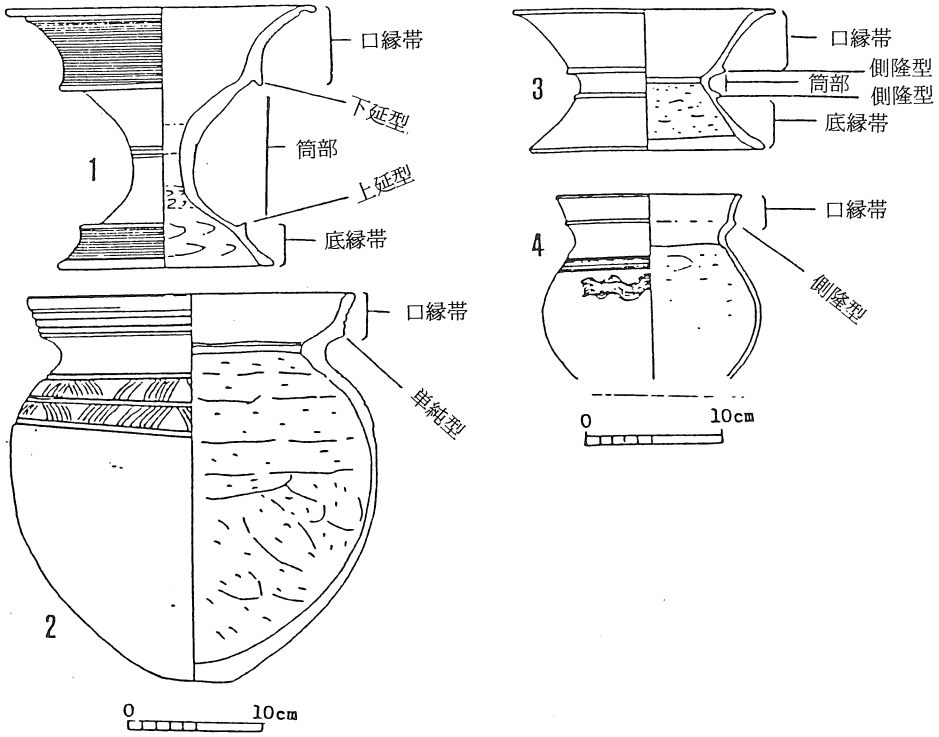
発掘前の表面採集品　第5図5・6・7のうち，5・6の器台はともに松江市八幡町の的場土壙墓（方形墳丘）出土品と，各部間の比率，文様など，ほぼ同時期と見られるものであり，墳裾から出土した壷，1号墓上の土器ともよく符号するものである。的場の土器は，弥生後期を前葉，中葉，後葉に三分するとすれば，その後葉の土器としてよいであろう。

7. 結　　語

松江市矢田町来美の四隅突出型方形墳丘の復原形は，突出部を除いた方形基幹部の東西約10m，南北約８m，突出部を含む全形は，東西約13.5 m，南北約10.5 m，高さは低い側の南の墳裾から1.2～1.5 mのものであったと推定される。墳丘斜面には礫を貼り，突出部の裾には礫を立て並べたものであった。

埋葬遺構は，墳頂の７基の土壙墓で，中央の１号墓は最も大きく，壙底に箱形木棺（長さ2.2 m，幅85～70㎝）の痕跡を認めた。

遺物は土器のみで，１号墓の埋土を施したのち，墓上中央の地表に供献されていたと認められるものと，南側の墳裾に据えられていたものと，発掘調査以前に表面採集されたもの（１号墓の墓上に供献品の可能性が強い）とであるが，いずれも型式上同時期と認められるものであって，およそ弥生時代後期後葉とされる松江市八幡町の的場土壙墓（方形墳丘）の土器と同型式である。



第７図　鼓形器台部名称

遺物観察表１　平　所

	種　類	法　量（cm）			特　　徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
		口径	器高	底径					
1	壷（口縁）	28.0 cm	cm	cm	垂直ぎみにのびる頸部から外反する口縁部を有する。 手法 内面…ヘラ削り及びハケ目 その他…不明	内面…暗褐色 外面…褐色	密	良好	平所南拡張… A－1 層位…第３層
2	甕（口縁）	15.2			口縁部は外傾してのび端部付近で鈍い稜をつくった後内弯して端部に至る。 手法　肩部内面…不明 その他…ヨコナデ	内面…淡黄褐色 外面…　〃	密	良好	平所…A－1 層位…第３層
3	高坏（脚部）				筒部はやや垂直気味に下向し裾部は、「八」の字形に広がる。 手法　不明	内面…明褐色 外面…　〃 断面…暗褐色	密	良好	平所…D区 層位… 遺物包含層
4	把手				手法　ヘラ押え	内面…暗褐色 外面…　〃 断面…　〃	密	良好	平所…D区 層位… 遺物包含層
5	把手					内面…暗褐色 外面…　〃 断面…　〃	密	良好	平所…D区 層位… 遺物包含層
6	壷（須恵器）				底部は小さな高台をもちやや内弯気味に立ちあがる。 手法　底部外面…回転糸切り その他…回転ナデ	内面…暗灰色 外面…　〃 断面…　〃	３㎜～５㎜の淡黄色砂粒を小量含む。	良好	平所…A－1区 層位… 遺物包含層
7	坏類 （須恵器）	13.0			体部から口縁にかけて内弯気味に立ちあがり、端部は丸くおわる。 手法　底部外面…静止糸切り その他…回転ナデ	内面…暗灰色 外面…　〃 断面…　〃	精良	良好	平所…D区 層位… 遺物包含層
8	甕	33.0			外傾してのびる口縁部に横方向の稜をもつ。 手法　外面…ヨコナデ 内面…不明	内面…暗褐色 外面…　〃 断面…　〃	密	良好	層位…２層 T－1
9	甕（口縁）	28.0			口縁部は外傾してのびるもので端部は外に肥厚して平らのものである。 頸部との境に若干下向きの稜がある。 口縁外面に竹管文を施す。 手法　不明	内面…暗橙色 外面…黄褐色	やや密 ２㎜までの白色砂粒を含む。	良好	T－1
10	壷（口縁）	13.2			外反してのびる頸部に内傾する短かめの口縁をもつ。 手法　頸部外面…ハケ目 その他…不明	内面…黄色 外面…　〃	密 １㎜までの白色砂粒を含む。	良好	層位…砂層の下 暗褐色土 T－1
11	壷（突帯）				突帯のみである。 突帯に竹管文あり。 手法　不明	内面…黄橙色 外面…　〃	密	良好	層位…２層 T－1
12	器台				端部はややフラット気味になり、肥厚していて、ゆるやかなカーブを描きながら、立ちあがると思われる。 手法　内面…ヘラ削り その他…不明	内面…暗褐色 外面…　〃 断面…　〃	１㎜～0.5㎜の白色砂粒を含む		T－1

遺物観察表 2

	種　類	法　量（cm）			特　　徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
		口径	器高	底径					
13	鼓形器台	cm	cm	cm	脚端部で肥厚し、やや平坦面を呈す。 手法 内面端部付近…ヘラ磨き 〃 上端付近…ヘラ削り その他…不明	内面…暗褐色 外面… 〃	1㎜の砂粒を含む。	良好	層位…2層 T－1
14	壷（口縁）	11.4			単純口縁で外反気味に長く延びる。 端部はやや内側へ肥厚する。 手法　肩部内面…ヘラ削り 口縁 〃 …ヨコナデ その他　…不明	内面…褐色 外面… 〃	密	良好	T－2区
15	甕	17.0			頸部は「く」の字形に屈曲する。 口縁部は外反してのびる。 稜は鈍く横にのびる。 手法　外面…ヨコナデ その他…不明	内面…暗褐色 外面… 〃 断面… 〃	密	良好	T－4区
16	甕	16.0			直立してのびる口縁部で、下向きの稜をもつ。外面に平行沈線を施す。 手法　不明	内面…暗褐色 外面… 〃 断面… 〃 〃	1㎜～2㎜の砂粒を含む。	良好	T－2区
17	甕	20.0			口縁端部は平端面をなし外面にふくらみをもつ。 口縁部から頸部にかけて「5」の字形の複合口縁を呈する。 手法 口縁部内・外面…ヨコナデ 頸部外面…不整方向ハケ目 内面…上半部はハケ目 あとは指による押え その他…ヘラ削り	内面…暗褐色 外面… 〃 断面… 〃	1㎜～2㎜の白色砂粒を含む。	良好	T－4区
18	甕（口縁）	15.0			口縁部は外反してのびる。 頸部との境に稜をもつ。 手法　ヨコナデ	内面…褐色 外面… 〃	密	良好	T－4区
19	甕	40.0			外反してのびる口縁部で端部は平らに近い。 手法　内面…ヨコナデ 外面…不明	内面…暗褐色 外面… 〃 断面… 〃	密	良好	T－4区
20	甕・ （口縁～ 胴部）	32.0	18.8		口縁部は外反してのびる。 頸部は「く」の字形のもので口縁との境に稜をもつ。 手法　胴部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…褐色 外面… 〃	やや密	良好	T－4区
21	甕（底部）			6.4	小さめの底部である。 手法　内面…ヘラ削り その他…不明	内面…褐色 外面… 〃	密		T－4区
22	甕	20.6			頸部は「く」の字形に屈曲するもので、口縁部との境に稜をもつ。 口縁部は外傾してのびる。 手法　不明	内面…暗褐色 外面… 〃 断面… 〃	密	良好	T－4区
23	甕	17.4			頸部は「く」の字形に屈曲する。 複合口縁で口縁端部にふくらみをもつ。 手法　外面…ヨコナデ その他…不明	内面…褐色 外面…暗褐色 断面…褐色	1㎜～2㎜の砂粒を多量に含む。	良好	T－4区

遺物観察表 3

	種　類	法　量（cm）			特　　徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
		口径	器高	底径					
24	器台（脚）	28.0 cm	cm	cm	やや大型の器台と思われる。外面に平行沈線を施していたものと思うが一部分しか痕跡が見られない。 手法　内面…ヘラ削り その他…不明	内面…黄橙褐色 外面…　〃	やや粗	良好	T－2区
25	壷	12.0			口縁端部はフラット。 口縁部から頸部にかけて「く」の字形に屈曲する。端部付近に円形の穿を有す。 手法　ヨコナデ	内面…暗褐色 外面…　〃 断面…　〃	密	良好	T－4区
26	坏類（蓋）				擬宝珠つまみを有す。 手法　天井部外面…ヨコナデ 〃　内面…静止ナデ	内面…暗灰色 外面…〃〃	精良 微粒を含む。	良好	T－4区

1号墓墳丘中央

27	甕（口縁部）	19.0			やや外反して延びる口縁部で端部は平らになっている。頸部との境に若干稜をつくる。調整は不明。	内外面黄橙色	密 1.5㎜までの砂粒を含む	良好	
28	甕（肩部）				甕肩部の一部と思われる。羽状文と沈線を交互に施す。	〃	密 1㎜までの砂粒を含む	〃	
29	甕（口縁部）	23.4			口縁部は外傾して延び、端部は平らに近い。頸部の境に鋭い稜をもつ。外面に竹管文あり。他は不明。	内外面黄褐色	密	〃	
30	壷（口縁部）	10.6			口縁部は内傾して延び端部は丸い。頸部はやや外弯ぎみに延びた後、外へ急に屈曲して口縁部に至る。頸部に羽状文。	内外面黄橙色	密 0.5㎜までの白色砂粒を含む	〃	
31	壷（口縁部）	21.4			口縁部は外傾して延び、端部は平坦な面をもつ。複合口縁部の稜はあまり突出していないもので、頸部は内弯ぎみに屈曲している。口縁部外面に横なでの後竹管文を施している。	〃	密 1㎜までの白色砂粒を含む	〃	
32	壷（口縁部）	31.6			口縁部は外傾して延び、端部は平らに近い。口縁部と頸部の境に上方へ延びる稜をもつ。外面横なでの後竹管文。内面篦削り。	内面黄褐色 外面黄橙色	密	〃	
33	壷（頸部）				推定頸部径14.8cmを測る大型の壷の口縁に近い頸部片。外面横なでの後竹管文、内面篦削りの後なで。	〃	〃	〃	
34	壷（頸部）				頸部径12.0cmを測る壷の一部と思われる。外面横なでの後竹管文、内面不明。	内面黄橙色 外面橙色	〃	〃	
35	長頸壷 （頸部）				頸部は内傾して外反ぎみに延びる。端部を欠く。突帯が付く。外面に竹管文。内面の一部に篦削りあり。	内外面黄橙色	密 1.5㎜までの砂粒を含む	〃	

遺物観察表 4

	種類	法量(cm) 口径	器高	底径	特徴	色調	胎土	焼成	備考
36	特殊壷 (胴部)	cm 胴部 最大 21.2	cm	cm	特殊壷型土器の胴部と思われる。胴部はたまねぎ形を呈するものであろう。胴部上半に稜をもち、その下に指頭圧痕をつけている。調整は不明。	内外面黄橙色	密 1.5㎜までの白色砂粒を含む	良好	
37	器台 (上台部)	18.6			上台部は外反して延び、端部付近で内側へ屈曲する。筒部との境に鋭い稜が付く。端部に特徴がある。受部内面篦削り、その他横なで。	内外面橙色	〃	〃	
38	器台 (上台部)	19.0			上台部は外反して延び、端部付近で内側へ屈曲して端部に至る。筒部との境に横に張り出す稜をもつ。内面篦削り、その他横なで。	〃	密 1㎜までの白色砂粒を少量を含む	〃	
39	器台 (上台部)				大型の鼓形器台と思われる。口縁端部を欠く。筒部との境に下に突出する稜をもつ。外面横なでの後竹管文、内面不明。	内外面黄褐色	密	〃	
40	器台 (脚台部)	脚径 24.0			やや大型の鼓形器台か。「ハ」の字に下る脚部で端部付近で内側に屈曲して端部に至る。端部は丸い。内面篦削り、その他横なで。	内外面黄橙色	密 1.5㎜までの白色砂粒を含む	〃	
41	器台 (脚台部)	脚径 23.0			「ハ」の字に下る脚部で端部付近で内側に屈曲して端部に至る。内面篦削り、その他横なで。	〃	密 1㎜までの白色砂粒を含む	〃	
42	器台 (脚台部)	脚径 19.2			脚部は「ハ」の字に開いて下るもので、端部付近で内側へ屈曲する。内面篦削り、その他横なで	内外面橙色	〃	〃	
43	器台 (脚台部)	脚径 22.6			「ハ」の字に開く脚台部である。内面篦削り、その他は摩滅の為不明。	内外面黄橙色	〃	〃	
44	器台 (脚台部)	脚径 26.0			「ハ」の字に開く脚台部。外面横なで、内面は摩滅の為不明。	内外面黄褐色	〃	〃	
45	器台 (脚台部)	脚径 18.8			脚台部は「ハ」の字に開いて端部に至る。調整は不明。	内外面橙色	密	〃	
46	器台 (脚台部)	脚径 23.0			「ハ」の字に開く脚台部をもつ。外面不明、内面篦削り。	内面橙色 外面黄橙色	密 1.5㎜までの白色砂粒を含む	〃	
47	器台 (脚台部)	脚径 15.6			「ハ」の字に開く脚台部。外面不明、内面篦削り。	内外面黄橙色	〃	〃	
48	器台 (脚台部)	脚径 13.9			「ハ」の字に開く脚台部。内外面とも摩滅の為不明。	〃	密	〃	

遺物観察表 5

	種類	法量(cm) 口径	器高	底径	特徴	色調	胎土	焼成	備考
49	器台（脚台部）	cm 脚径 26.6	cm	cm	「ハ」の字に開く脚台部。内外面とも摩滅の為不明。	内外面黄橙色	密	良好	
50	器台（脚台部）	脚径 21.6			「ハ」の字に開く脚台部。内面脚端部になで、外面なで、脚部から筒部にかけて削りか。	内外面明橙色	密 2㎜までの白色砂粒を含む	〃	
51	器台（脚台部）	脚径 15.2			「ハ」の字に開く脚台部。端部は角張って丸い。内面篦削りが見られるが外面不明。	内外面黄橙色	密 1㎜までの白色砂粒を含む	〃	
52	器台（脚台部）	脚径 32.0			「ハ」の字に開く脚台部。端部は厚く角張っている。調整不明。	〃	密 1.5㎜までの白色砂粒を含む	〃	
53	器台（脚台部）	脚径 20.0			「ハ」の字状に開いて下った後、内傾して端部に至る。内面端部付近篦削り、その他摩滅の為不明	〃	密 1㎜までの白色砂粒を含む	〃	
54	特殊器台	胴部最大 23.6			口縁端部を欠くが「く」の字形の口縁と思われる。外面に竹管文がある。	内外面黄褐色	密	〃	
55	高坏（坏部）				高坏の坏部で浅く大きく開く坏である。端部を欠く。底部に尖孔あり。内面一部に篦磨きが認められるがその他は不明。	内面褐色 外面黄褐色	密 2㎜までの砂粒を含む	〃	
56	高坏（脚部）	脚径 16.0			坏部を欠く高坏脚部である。やや外傾して下る筒部から「ハ」の字状に開く裾部をもつ。内面篦削り、外面不明。	内外面暗黄色	密 1㎜までの白色砂粒を含む	〃	
57	高坏（脚部）				径4.3㎝の筒型。調整も不明。	内外面黄褐色	密	〃	
58	高坏（脚裾部）	脚径 16.0			「ハ」の字に大きく開く脚裾部である。内面端部にははけ目、他は不明。	内外面黄橙色	〃	〃	
59	高坏（脚裾部）	脚径 16.6			「ハ」の字に開く脚裾部。内外面とも磨滅の為不明。	内外面暗黄色	〃	〃	
60	把手				径1.7㎝、長6.2㎝の細く丸い把手状のもの。小さい竹管文が施されている。	〃	やや密	〃	

1号墓墳丘周辺

61	甕（口縁部）	16.2			口縁部はやや外頃ぎみに延び、端部は丸い。頸部との境に鈍い稜をもつ。内外面とも横なで。	内外面橙色	密 0.5㎜までの白色砂粒を含む	〃	
62	甕（口縁部）	15.6			口縁部は外反して延び、端部は丸い。頸部との境に若干横～下方にかけて突出する稜をもつ。内外面とも横なで。外面に平行沈線	内面黄褐色 外面暗黄褐色	やや密 2㎜までの白色砂粒を含む	〃	

遺物観察表 6

	種類	法量(cm) 口径	器高	底径	特徴	色調	胎土	焼成	備考
63	甕（口縁部）	17.0 cm	cm	cm	口縁部は外傾して短く延びるもので、端部は丸い。頸部との境に斜め下に延びる稜をもつ。内外面とも横なで。	内外面黄褐色	密 1.5㎜までの白色砂粒を含む	良好	
64	甕（口縁部）	17.4			口縁部は外傾して延び端部は丸い。頸部との境に斜め下方に小さく突出する稜をもつ。磨滅の為調整不明。外面に平行沈線があるように見える。	内外面淡黄白色	密 2㎜までの白色砂粒を含む	〃	
65	甕（口縁部）	17.8			口縁部は外傾して延びた後外反して端部に至る。頸部との境に厚めの稜をもつ。内外面とも磨滅の為調整はよくわからないが、外面に波状文がある。	内外面黄褐色	密	〃	
66	甕（口縁部）	18.4			口縁部は外傾して延びる短いものである。頸部との境にやや小さい稜をもつ。内面雑な篦磨き、外面横なで。平行沈線あり。	内外面暗褐色	密 1㎜までの砂粒を含む	〃	
67	甕（口縁部）				口縁部は外反ぎみにのびる。頸部との境に若干下向きかげんの稜をもつ。内外面とも横なで、内面頸部に篦削り。	内面暗橙色 外面暗褐色	密 0.5㎜までの白色砂粒を含む	〃	
68	甕（口縁部）				外傾してのびる口縁部をもつ。内外面とも横なで、口縁部全体に沈線文。	内面橙色 外面黄橙色	密 1㎜までの白色砂粒を含む	〃	
69	甕（口縁部）				口縁端部を欠く。口縁部はやや内傾してのびる。頸部から屈曲している。内面篦磨き、外面横なで後平行沈線。	内面褐色 外面橙色	やや粗 3㎜までの白色砂粒を含む	〃	
70	甕（口縁部）				口縁部はやや内傾するもので端部を欠く。頸部との境に下に突出する稜をもつ。口縁部及び頸部に平行沈線を施す。内面篦磨き、外面横なで。	内面褐色 外面黄橙色	やや粗 2.5㎜までの白色砂粒を含む	〃	
71	甕（口縁部）				口縁部はやや垂直ぎみにのび端部を欠く。調整不明。	内外面黄橙色	粗 3㎜までの白色砂粒を含む	〃	
72	甕（口縁部）				口縁部は外反してのびるものであるが、端部を欠く。頸部との境にやや下方に長くのびる稜をもつ。外面横なで。内面調整不明。	内面暗黄色 外面黄褐色	やや密 1.5㎜までの白色砂粒を含む	〃	
73	甕（口縁部）				口縁部は外反してのびるが端部を欠く。稜はやや下方にのびるもの。外面横なで、内面不明。	内外面黄褐色	〃	〃	
74	甕（口縁部）	18.0			口縁部はやや外傾ぎみにのび端部は厚くて丸い。頸部との境に鈍い稜をもつ。調整不明。	〃	粗 3㎜までの白色砂粒を含む	〃	
75	甕（口縁部）	15.2			口縁部は外反してのび端部は丸い。頸部との境に下方向の稜をもつ調整不明。	内外面褐色	粗 2㎜までの砂粒を含む	〃	

遺物観察表 7

	種類	法量（cm）			特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	器高	底径					
76	甕（口縁部）	cm	cm	cm	口縁部はやや外反ぎみにのび端部を欠く。頸部との境に小さめの稜をもつ。内外面とも横なでのようである。	内外面橙色	密	良好	
77	甕（底部）			4.0	厚さ0.8cmのやや薄手の底部。内面篦削り、外面不明。	内面褐色 外面橙褐色	〃	〃	
78	甕（底部）			4.4	平底の甕片であろうと思われる。内外面篦磨き。	内面暗黄色 外面黄橙色	〃	〃	
79	甕（底部）			3.8	平底の甕片か。内面調整不明。外面はけ目調整あり。	〃	密 2.5mmまでの白色砂粒を含む	〃	
80	甕（底部）			3.4	厚い平底の破片である。内面に篦削りがある他は調整不明。	内面黄褐色 外面黄橙色	密 2mmまでの白色砂粒を含む	〃	
81	甕（底部）			2.6	底部中央がやや凹面をなす。内面に篦削りがみられる他は調整不明。	内外面暗褐色	密	〃	
82	甕（底部）			4.4	底部のあまり厚くない平底の土器。内面篦削り、外面篦磨きのようである。	内面暗褐色 外面暗橙色	密 1mmまでの砂粒を含む	〃	
83	甕（底部）			4.4	底部中央が内側からへこむ。内面篦削り、外面調整不明。	内面黄褐色 外面褐色	密 0.5mmまでの砂粒を含む	〃	
84	甕（底部）			4.4	薄手の底部片。磨滅激しく調整は不明。	内面暗褐色 外面暗黄褐色	やや粗 2mmまでの白色砂粒を含む	〃	
85	甕（底部）			4.0	小型の甕底部片の一部と思われる。内面篦削り、外面調整不明。	内面黒色 外面黄橙色	密	〃	
86	甕（底部）			3.6	小型の底部片で器厚も薄い。内面篦削り調整がみられる。	内面黒色 外面暗橙色	〃	〃	
87	甕（底部）			2.6	小型の甕底部片の一部と思われる。やや厚手である。調整不明。	内面暗黄色 外面暗橙色	〃	〃	
88	大型壷	38.2	78.0	10.4	突出部基部から出土した、ほぼ完形の壷である。口縁部は内側に屈曲する。口縁に5条の凸線、頸部に篦による綾杉沈線、肩部に斜行沈線と櫛描沈線（10本単位）を施す。	内外面暗褐色	〃	〃	
89	大型壷	34.0	推定 78.0	10.0	突出部基部から出土したもう一方の壷である。口縁部は内側に屈曲する。口縁部に羽状文、頸部に篦による綾杉沈線、肩部は浅い櫛描沈線と羽状文を交互に施す。	内外面黄褐色	〃	〃	
90	壷（口縁部）（大型壷内遺物）	19.0			外面横なでの後、平行沈線を施す。内面粗な篦磨きのようである。	内外面黄橙色	2.5mmまでの白色砂粒を含む	〃	

遺物観察表 8

	種類	法量(cm) 口径	器高	底径	特徴	色調	胎土	焼成	備考
91	壷（口縁部）（大型壷内遺物）	cm 30.0	cm	cm	口縁部は外傾して延び端部は丸い。複合口縁部の稜はあまり突出しないもので、肩が張らないもののようである。口縁部外面横なで後擬凹線文。外面平行沈線と指頭圧痕あり。内面篦削り後なで。	内外面暗橙色	1.5㎜までの白色砂粒を含む	良好	
92	壷（口縁部）	10.0			外反して延びる頸部から内側へ屈曲する口縁部をもつ。調整は不明。	内外面黄橙色	密	〃	
93	壷（口縁部）	23.4			口縁端部は摩滅のためよくわからない。口縁は外傾して延びる。頸部との境は稜というより屈曲する。内外面とも調整不明。	〃	〃	〃	
94	器台（上台部）	稜径 16.0			器台上台部の稜部分1/4の破片。外面横なで、櫛描沈線と貝殻複縁文で調整。内面篦磨き。	内面橙色 外面灰橙色		〃	
95	器台（上台部）	15.6			口縁周の1/10程度の残か。全体に厚い作り。内面に焼成時の暗褐色の変色がある。調整は不明だが口縁部に沈線文がある。	内面暗褐色 外面灰黄色	密 3㎜までの黒・白色砂粒を含む	〃	
96	器台（上台部）	17.0			口縁部はやや外反してのび端部は丸い。筒部との境にやや横に延びる稜をもつ。内面雑な篦磨き、外面横なで。	内面暗褐色 外面暗黄褐色	やや密 2㎜までの白色砂粒を少量含む	〃	
97	器台（上台部）	18.6			外反してのびる口縁部をもつ。内面篦磨き、外面横なで。	内外面黄橙色	密 1㎜までの白色砂粒を含む	〃	
98	器台（上台部）				比較的小型の器台上台部片と思われる。筒部との境にはっきりしない稜がある。内面篦削り、外面調整不明。	内面橙色 外面暗橙色	密 3㎜までの白色砂粒を含む	〃	
99	器台（上台部）	脚径 28.8			大型の器台。内面横なで、外面は篦削りと思われるが磨滅激しくよくわからない。	内外面明橙色	密 1㎜までの白色砂粒を含む	〃	
100	器台（上台部）				口縁部は上外方に広く張り出す。端部は丸い。外面横なでの後縦方向の静止なで、内面もなでているようである。	内面灰橙色 外面明橙色	密 1㎜までの黒色砂粒を含む	〃	
101	器台（脚台部）	脚径 20.0			器台の脚部の一部。脚径と比較して1/3程度が残っている。調整は磨滅激しく不明。内面は削りのようである。	内外面黄橙色	やや密 2㎜までの白色砂粒を含む	〃	
102	器台（脚台部）	脚径 14.4			器台脚台部と思われる。全体に厚く胎土がやや粗い。調整は不明。脚部に沈線文を巡らす。	内外面灰橙色	密 1.5㎜までの白色砂粒を含む	〃	
103	器台（脚台部）	脚径 20.8			筒部からやや上方に突出する稜を作ったのち「ハ」の字状に広がる脚裾部をもつ。篦状工具による刺突文が半分まわっている。外面横なで、内面篦削り。	内外面黄橙色	〃	〃	
104	器台（脚台部）				台部が「ハ」の字にひらく。脚端部はやや丸い。内外面とも調整不明。	内面暗橙色 外面暗褐色	やや粗 3㎜までの白色砂粒を含む	不良	

遺物観察表 9

	種　類	法　量（cm）			特　　徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
		口径	器高	底径					
105	器台（脚台部）	cm	cm	cm	「ハ」の字にひらく脚部をもつ。内面篦削り、外面横なでか。磨滅激しく不明瞭である。	内外面暗褐色	密 2㎜までの白色砂粒を含む	良好	
106	特殊器台				3箇所に大きな方形の透かしがあるが大きさは不明。外面に縦方向のなでの後径1㎝の竹管文が縦方向に2列施される。内面は削りにより調整したものと思われるが不明瞭。	内外面暗橙色	〃	〃	
107	高坏（坏部）	25.2			高坏の坏部1/3が残る。大型の高坏である。内面は摩滅の為調整不明。外面に丁寧なで調整を施す。	内面黄橙色 外面明褐色	密 1㎜までの黒色砂粒を含む	〃	
108	高坏（脚部）				円筒型の破片で両方に穴があいているがわずかに下部が広がる方向を見せているので、高坏の脚部と思われる。内外面ともなで調整と思われるが不明瞭。	内外面灰褐色	やや粗 3㎜までの白色砂粒を含む	やや良	
109	高坏（脚部）				大型の高坏脚部片。脚頸部のみ残。内外面とも静止なでによる調整と思われる。	〃	粗 3㎜までの白色砂粒を含む	〃	
110	低脚坏	脚径 9.6	脚高 2.8		低脚坏であるが坏部は口縁にいくに従い大きく内傾する所謂ワイングラス型の坏である。調整は不明。	内外面黄橙色	密	〃	
111	低脚坏（脚部）				小さく「ハ」の字状にひろがる。端部は丸い。内外面ともなでにより調整する。	内外面灰褐色	〃	良好	
112	台付坏		残高 4.1	4.8 × 4.5	小型の台付坏。台部は爪か鋭い篦状の工具で作り出している。内面は焼成時によるものか黒色を呈する。外面篦削りの後なで、内面なで、内底面付近静止なで。	内面黒色 外面灰褐色	密 1㎜までの白色砂粒を含む	〃	
113	把手				太く短く上外方へ曲がる。端部比較的鋭い。全面に面取り状の粗い篦削り。	内外面明橙色	やや密 2㎜までの白色砂粒を含む	やや良	

A地区

114	甕（口縁）	17.0			口縁部は短かめのもので、外傾してのびる。 端部は丸い。 内面にゆるやかな段をもつ。 頸部との境に稜をもつ。 口縁部外面に6条の平行沈線を施す。 手法　磨滅の為不明	内面…黄褐色 外面…　〃	密	良好	住居跡
115	甕（口縁）	21.6			口縁部は外傾してのび端部は丸い。 厚いつくりである。 内面に若干段を残す。 頸部との境に横に突出する稜をもつ。 外部に平行沈線を施す。 手法　不明	内面…橙白色 外面…　〃	やや密	良好	〃

遺物観察表 10

	種類	法量(cm) 口径	器高	底径	特徴	色調	胎土	焼成	備考
116	甕	cm 19.6	cm	cm	口縁部は外傾してのび端部は丸い。 器肉は全体的に厚い。 口縁部外面に平行沈線を施す。 手法　不明	内面…黄橙褐色 外面…　〃	やや密	良好	住居跡
117	甕（口縁）				口縁端部を欠く。 頸部との境に稜をもつ。 外面に平行沈線を施す。 手法　不明	内面…明褐色 外面…黄褐色	密	良好	〃
118	甕（口縁）				端部を欠く。 頸部との境に小さめの稜をもつ。 口縁部と肩部外面に平行沈線を施す。 手法　ヨコナデ	内面…黄褐色 外面…　〃	密	良好	〃
119	甕（口縁）	16.8			口縁部は外傾してのび端部は丸い。 器肉は全体的に薄い。口縁部内面に段を残す。 頸部との境に小さめの稜をもつ。 手法　口縁部外面…ヨコナデ その他…不明	内面…黄褐色 外面…　〃	やや粗 2㎜までの白色砂粒をやや多めに含む	良好	〃
120	甕				頸部との境に稜をもつ。 肩はあまり張らない。 手法　体部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…橙褐色 外面…　〃	やや粗 2㎜までの砂粒を含む	良好	〃
121	甕				横方向に突出する稜をもつ。 手法　外面…ヨコナデ 体部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…橙褐色 外面…　〃	やや密 1.5㎜までの砂粒を含む	良好	〃
122	甕（底部）			10.0	平底。中央を欠く。 手法　不明	内面…暗褐色 外面…赤褐色	やや密	良好	〃
123	甕（底部）			3.6	平底 手法　内面…ヘラ削り その他…不明	内面…暗褐色 外面…赤褐色でススス付着	密	良好	〃
124	甕（底部）			3.6	平底 手法　内面…ヘラ削り その他…不明	内面…黄褐色 外面…赤褐色	密 1.5㎜までの白色砂粒を含む	良好	〃
125	壷（底部）（須恵器）				高台を欠くもので底部のみ残存。 平らな底部から外傾してのびる体部をもつ。 手法　底部…ヘラ切り後ナデ その他…回転ナデ	内面…暗灰色 外面…　〃	密	良好	住居跡の周辺
126	坏（須恵器）（蓋）	13.2			口縁部は「ハ」の字状に開き端部は平らを呈する。 浅めの蓋である。 手法　天井部…回転ヘラ削り その他…回転ナデ	内面…青灰色 外面…　〃	密	良好	

遺物観察表 11　B地区

	種類	法量(cm) 口径	器高	底径	特徴	色調	胎土	焼成	備考
127	甕（口縁）	22.0 cm	cm	cm	口縁部はやや外傾してのび端部は丸い。 頸部との境に下方に突出する稜をもつ。 口縁部外面に凹線文 手法　肩部外面…ヘラ削り その他…ヨコナデ	内面…黄褐色 外面…褐色	密	良好	B地区
128	甕（口縁）	15.8			垂直気味に延びる口縁で下向きの稜をもつ。 手法　肩部外面…ヨコナデ その他…不明	内面…黄橙色 外面…橙褐色	密	良好	〃
129	甕（口縁）	16.6			口縁部はやや長めのもので、外傾してのび端部は丸い。 頸部との境に下向きの稜をもつ。 口縁外面に平行沈線を施す。 手法　肩部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…暗褐色 外面…暗橙褐色	やや粗 3㎜までの砂粒を含む	良好	〃
130	甕（口縁）	19.0			口縁部は外傾してのび、端部は丸い。 内面に若干段を残す。 手法　不明	内面…暗黄褐色 外面…　〃	やや粗	良好	〃
131	甕（口縁）	12.8			外傾してのびる口縁部で、小さめの稜をもつ。 口縁外面に9条の平行沈線を施す。 手法　不明	内面…黄褐色 外面…黒褐色	密	良好	〃
132	甕（口縁）	14.6			口縁部は外反してのび、端部は丸い。 頸部との境に稜をもつ。 手法　肩部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…黄褐色 外面…　〃	やや粗 3㎜までの砂粒を含む	良好	〃
133	甕（口縁）	18.2			口縁部は外傾してのび、端部は丸い。 頸部との境に横方向の稜をもつ。 手法　頸部内面…ハケ目 肩部内面…ヘラ削り その他…ヨコナデ	内面…淡褐色 外面…　〃	やや密 2㎜までの砂粒を含む	良好	〃
134	甕（口縁）	17.0			口縁部は外傾してのび、端部は外側へ肥厚する。 頸部との境に下向きの稜をもつ。 手法　頸部外面…ヨコナデ その他…不明	内面…灰褐色 外面…黄褐色	やや粗 1.5㎜までの白色砂粒を含む	良好	〃
135	甕（口縁）	16.6			口縁部は外傾してのび、端部は外に肥厚する。 頸部との境に稜をもつ。 手法　口縁内面…ヨコナデ 頸部内面…指頭圧痕 肩部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…黄褐色 外面…明黄褐色	密 2㎜までの白色砂粒を含む	良好	〃
136	甕（口縁）	14.0			口縁部は外傾してのびる。 頸部との境に鈍い稜をもつ。 手法　不明	内面…黄橙色と灰色 外面…　〃	やや粗 2.5㎜までの砂粒を含む	良好	〃
137	甕（口縁）	16.0			口縁部は外反してのび、端部は丸い。 頸部との境に稜をもつ。 手法　肩部内面…ヘラ削り 外面…ヨコナデ その他…不明	内面…黄褐色 外面…暗黄褐色	やや粗 5㎜までの白色砂粒を含む	良好	〃

遺物観察表 12

	種類	法量(cm) 口径	器高	底径	特徴	色調	胎土	焼成	備考
138	甕（口縁）	16.0 cm	cm	cm	口縁部はやや短かめのもので外傾してのび、端部付近で外反する。 小さめの稜をもつ。 手法　外面…ヨコナデ その他…不明	内面…橙色 外面…　〃	密	良好	
139	甕（口縁）	17.0			口縁部は、外傾してのび端部付近で外反する鈍い稜をもつ。 手法　肩部内面…ヘラ削り 外面…ヨコナデ その他…不明	内面…黄褐色 外面…　〃	密	良好	
140	甕（口縁）	17.4			口縁部は外反してのび、小さめの稜をもつ。 手法　肩部内面…ヘラ削り その他…ヨコナデ	内面…橙色 外面…　〃	密	良好	
141	甕（口縁）	13.0			口縁は外傾してのび、端部付近で外反する。 稜は横に張り出す。 手法　不明	内面…黄褐色 外面…　〃	やや密	良好	
142	甕（口縁）	17.0			外傾してのびる。 口縁部にやや下向きの稜をもつ。 手法　肩部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…橙褐色 外面…〃〃	粗 4㎜までの砂粒を含む	良好	
143	甕（口縁）	17.8			口縁部は外反してのびる。 横に張る稜をもつ。 手法　不明	内面…黄褐色 外面…　〃	粗	良好	
144	甕（口縁）	19.0			外傾してのびる口縁で稜はやや下向きである。 手法　外面…ヨコナデ その他…不明	内面…黄褐色 外面…　〃	密	良好	
145	甕（口縁）	16.8			口縁部は外反してのびるもので、端部は丸い。 頸部との境に厚めの鈍い稜をもつ。 手法　頸部内面…ハケ目 その他…ヨコナデ	内面…褐色 外面…暗褐色	密	良好	
146	甕（口縁）	19.4			口縁部は外傾してのび端部は丸い。 頸部との境に横方向の稜をもつ。 手法　ヨコナデ	内面…褐色 外面…　〃	密	良好	
147	甕（口縁）	16.0			外反してのびる口縁で、稜は横にのびる。 手法　外面…ヨコナデ その他…不明	内面…黄褐色 外面…橙褐色	密	良好	
148	甕（口縁）	17.4			外傾してのびる口縁部で、横方向の稜をもつ。 手法　不明	内面…黄橙色 外面…　〃	やや粗 3㎜までの砂粒を含む	良好	
149	甕（口縁）	14.4			外反してのびる口縁部で横方向の稜をもつ。 手法　不明	内面…黄灰色 外面…　〃	やや密	良好	
150	甕（口縁）	15.2			口縁部は垂直にのび、端部付近で外反する。 小さめの稜をもつ。 手法　肩部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…黄橙色 外面…　〃	やや粗 2㎜までの砂粒を含む	良好	

遺物観察表 13

	種類	法量(cm) 口径	器高	底径	特徴	色調	胎土	焼成	備考
151	甕（口縁）	cm 14.4	cm	cm	外反気味に延びる口縁部で若干下向きの稜をもつ。 手法　不明	内面…黄褐色 外面…　〃	密	良好	
152	甕（口縁）	20.0			口縁部は短かいもので、外反して延びる。 頸部との境に厚めの鈍い稜をもつ。 全体的に内面は雑なヘラ磨き。 手法　外面…ヨコナデ	内面…橙褐色 外面…　〃	密 2㎜までの白色砂粒を含む	良好	
153	甕（口縁）	17.6			口縁部は外反してのび、端部は肥厚する。 頸部は「く」の字状で口縁部の境に稜をもつ。 手法　肩部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…黄橙色 外面…　〃	やや密 2㎜までの砂粒を含む	良好	
154	甕（口縁）	16.0			口縁部は外傾してのび、端部は丸い。 鈍い稜をもち肩部は張らない。 手法　肩部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…黄橙色 外面…　〃	やや密 2㎜までの白色砂粒を含む	良好	
155	甕（口縁）	17.4			口縁部は外傾してのび、端部は丸い。 頸部との境に鈍い稜をもつ。 手法　不明	内面…灰黄色 外面…暗灰色	やや粗 1.5㎜までの白色砂粒を含む	良好	
156	甕（口縁）	15.4			口縁部は外傾してのび内面に段を作る。 頸部との境に横方向に稜をもつ。 手法　口縁部内面…ヨコナデ 胴部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…黄橙色 外面…　〃	密	良好	
157	甕（口縁）				外反してのびる口縁部で、端部を欠く。 横に張る稜をもつ。 手法　不明	内面…黄褐色 外面…　〃	粗	良好	
158	甕（頸部）				口縁部を欠くもので、肩はあまり張らない。 手法　肩部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…黄褐色 外面…　〃	やや粗 3.5㎜までの白色砂粒を含む	良好	
159	甕（口縁）				口縁部は厚めの作りであるが、胴部は薄く作られている。 口縁部外面に平行沈線を施していたものと思われる。 手法　胴部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…灰黄色 外面…黄褐色	やや粗 3㎜までの砂粒を含む	良好	
160	甕（頸部）				「く」の字に屈曲する頸部である。 手法　肩部内面…ヘラ削り その他…不明	内面…黄橙色 外面…　〃	密	良好	
161	甕（口縁）				外傾してのびる口縁部で横方向の稜をもつ。 手法　不明	内面…橙色 外面…　〃	粗	良好	

遺物観察表 14

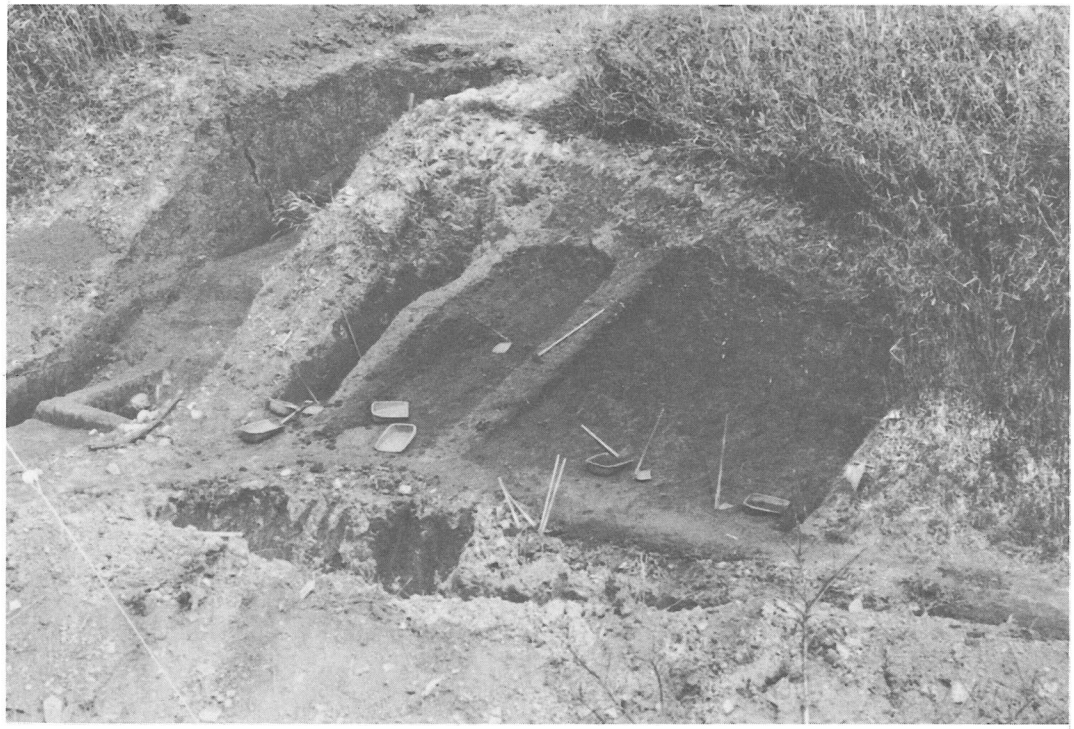
	種　類	法　量（cm）			特　　徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
		口径	器高	底径					
162	甕（口縁）	cm	cm	cm	垂直気味にのびる口縁部で、端部付近で外反する。 手法　外面…ヨコナデ 内面…不明	内面…黄褐色 外面…　〃	やや密	良好	
163	甕（口縁）				外反してのびる口縁部で稜はやや鋭い。 手法　外面…ヨコナデ その他…不明	内面…褐色 外面…暗褐色	密	良好	
164	壷（頸部）				頸部は垂直にのびた後外に屈曲する。 平行沈線を施す。 手法　不明	内面…黄褐色 外面…　〃	密	良好	
165	甕（底部）			10.4	しっかりした平底である。 手法　底部内面…ヘラ削り 底部外面…ナデ その他…不明	内面…黄褐色 外面…　〃	やや粗 4㎜までの砂粒を含む	良好	
166	甕（底部）			6.6	しっかりした平底である。 手法　不明	内面…黄色 外面…黄橙色	やや密	良好	
167	甕（底部）			7.6	しっかりした平底である。 手法　内面…ヘラ削り その他…不明	内面…黄褐色 外面…黄橙褐色	やや密 2㎜までの砂粒を含む	良好	
168	甕（底部）			5.8	しっかりした平底である。 手法　不明	内面…黄褐色 外面…褐色	密 1㎜の砂粒を含む	良好	
169	甕（底部）			3.0	小さめの平底である。 手法…不明	内面…黄褐色 外面…赤橙色	やや密 1.5㎜までの砂粒を含む	良好	
170	甕（底部）			2.6	小さめの平底である。 手法　内面…指頭圧痕	内面…黄褐色 外面…黒褐色	密	良好	
171	鼓形器台（上台部）	16.0			口縁部は外傾してのびた後端部付近で外反する。 手法　不明	内面…黄橙色 外面…　〃	やや粗 3㎜までの白色砂粒を含む	良好	
172	鼓形器台（脚台部）	15.0			脚部は「ハ」の字状に開いて、端部付近で外反する。 手法　内面…ヘラ削り その他…不明	内面…黄橙色 外面…　〃	やや粗 2.5㎜までの砂粒を含む	良好	
173	器台	23.0			外傾してのびる口縁部で端部はやや断面三角形を呈する。 手法　不明	内面…黄褐色 外面…橙褐色	やや密	良好	
174	高坏（坏部）	16.2			浅めの坏部である。 手法　外面…ヨコナデ その他…不明	内面…橙褐色 外面…　〃	密	良好	
175	低脚坏	12.4	6.5		口縁部は器厚く上外方にゆるやかに外反する。 坏中央に向かって、やや外反しつつ垂直の段を作り、その後内弯しつつ脚部に至る。 内面は内弯する「U」の字形を成す。 手法　内面…ヘラ磨き 外面…　〃	内・外面とも茶褐色土の地に焼成による黒褐色痕あり	1㎜～2.㎜の白色砂粒をやや多く含む	良好	

遺物観察表 15

	種　類	法　量（cm）			特　　徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
		口径	器高	底径					
176	低脚坏（脚部）	cm	cm	cm		内面…淡褐色 外面…　〃	密	良好	
177	不明	14.6			短かい筒部から段をつくって下る脚である。 手法　筒部外面…ハケ目 〃 内面…削り後ナデ 口縁部外面…ヨコナデ その他…不明	内面…橙褐色 外面…　〃	やや粗 3㎜までの白色砂粒を含む	良好	
178	不明					内面…橙褐色 外面…　〃	やや密	良好	
179	不明					内面…黄褐色 外面…　〃	やや粗	良好	
180	坏（須恵器）	11.8			口縁部は内弯して端部に至る。端部は丸い。 手法　回転ナデ	内面…青灰色 外面…　〃	密	良好	
181	鉄製品	幅 0.8	厚 0.4	残存長 6.9	不明				

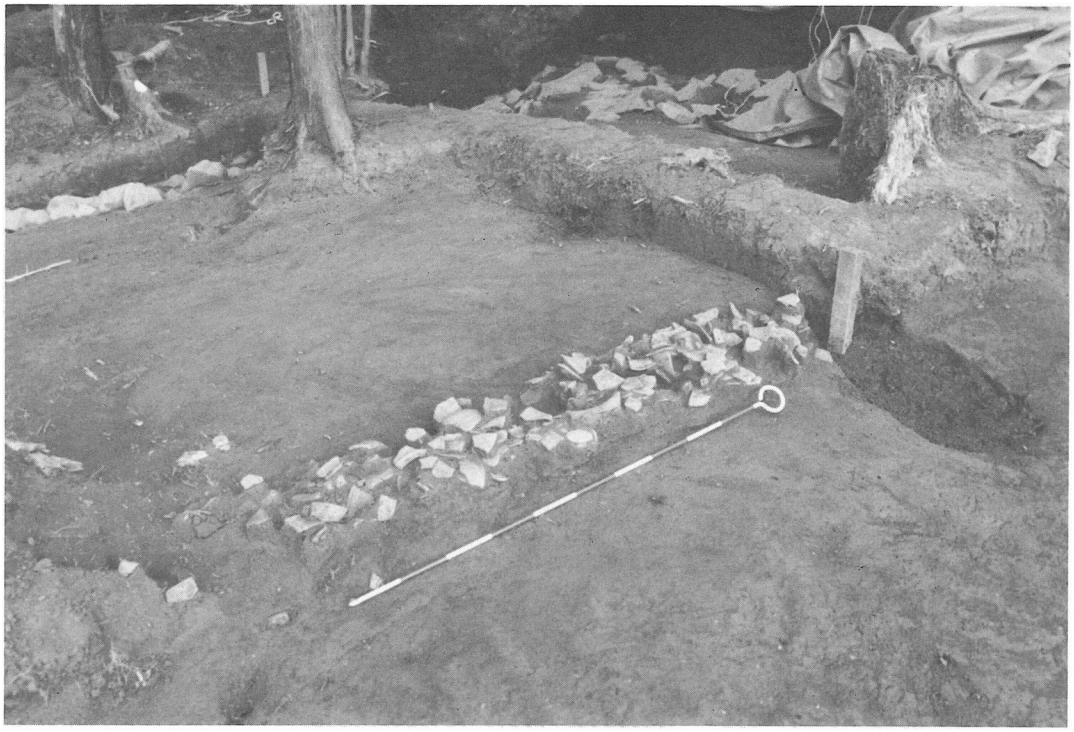
間内越遺跡・平所遺跡遠景

平 所 遺 跡 近 景

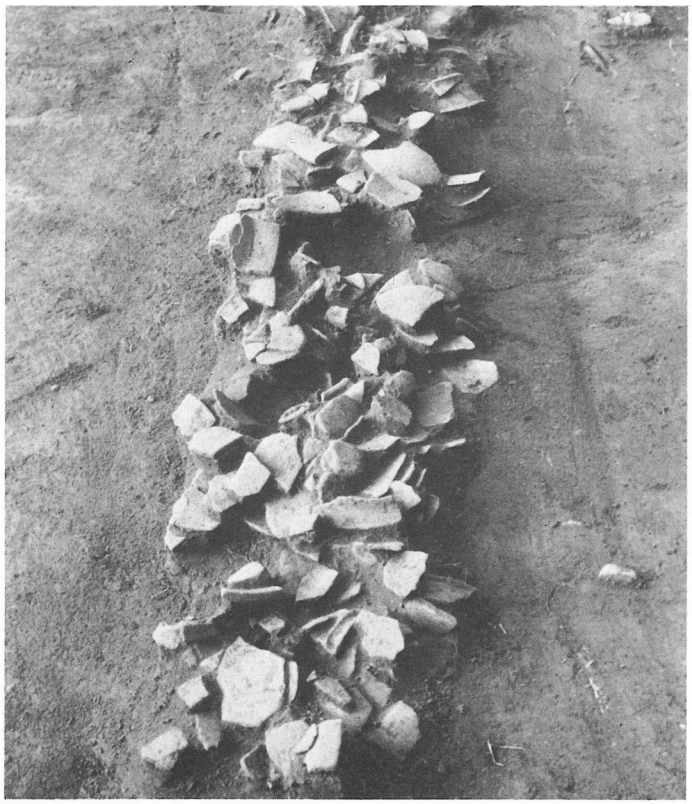


平所遺跡Ａ・Ｂ地区

間内越遺跡近景



墳丘中央部遺物出土状況 (1)



墳丘中央部遺物
出土状況 (2)

南西突出部と
壷の出土状況 (1)

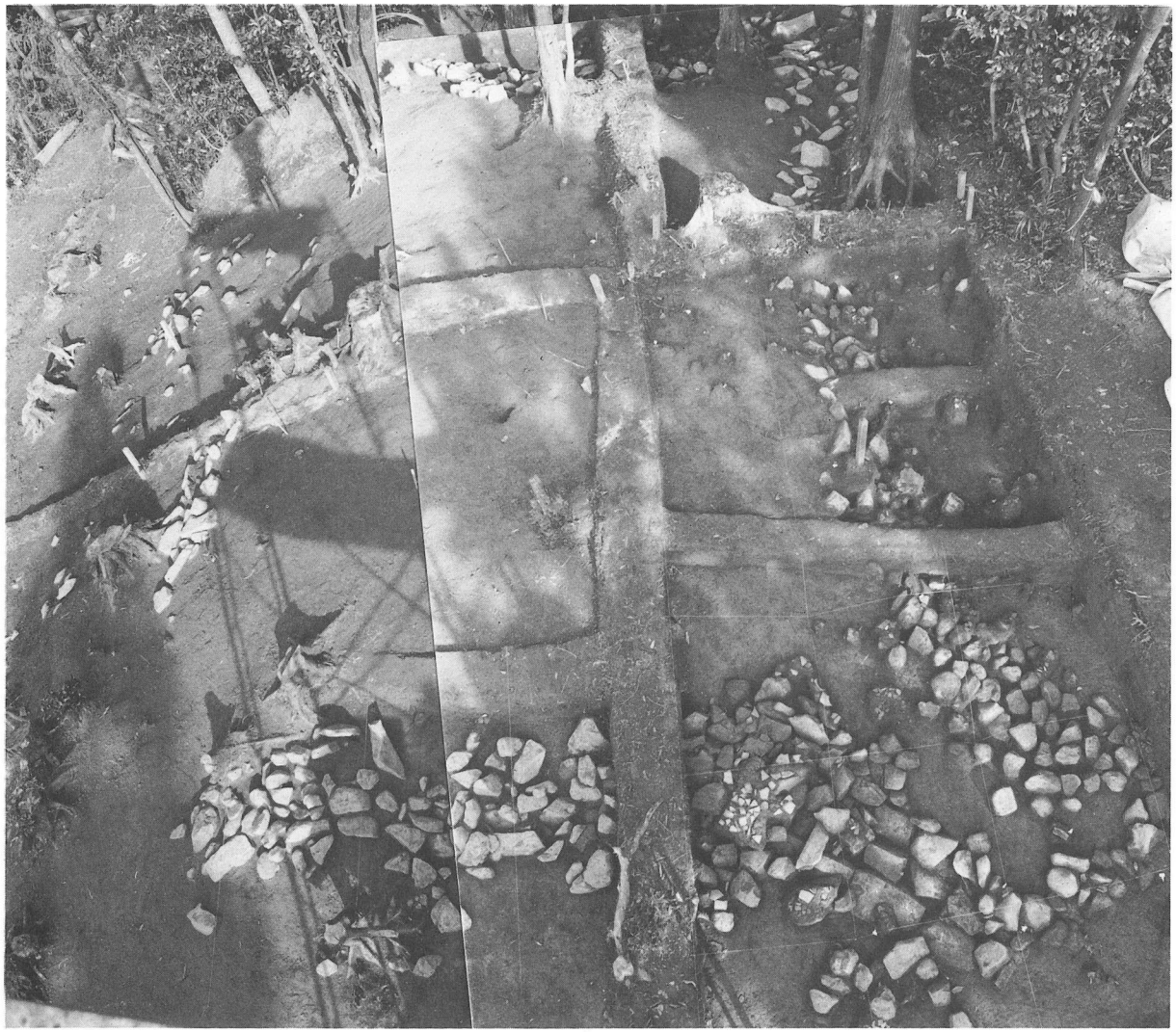
南西突出部と
壷の出土状況 (2)

南西突出部（西から見る）

南西突出部（東から見る）

南東突出部（東から見る）

南東突出部（南から見る）



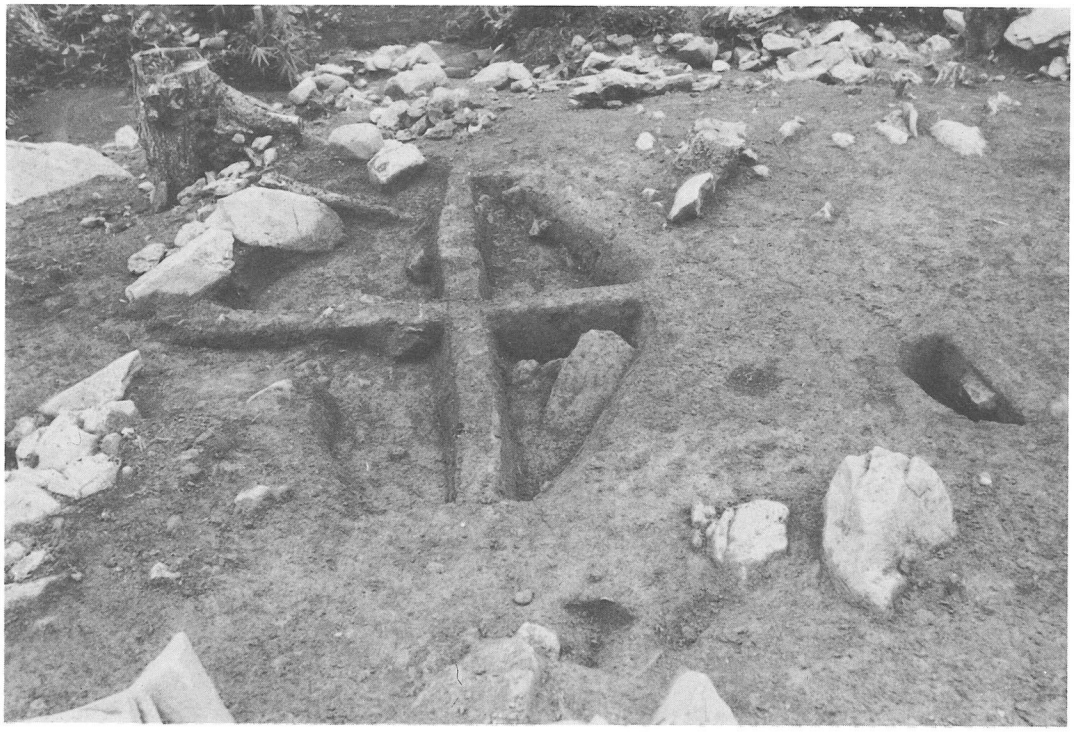
間内越１号墓
全景（調査中）

間内越１号墓（調査終了後）

A地区加工段調査前

A地区加工段畦除去前

Ａ地区加工段畦除去後



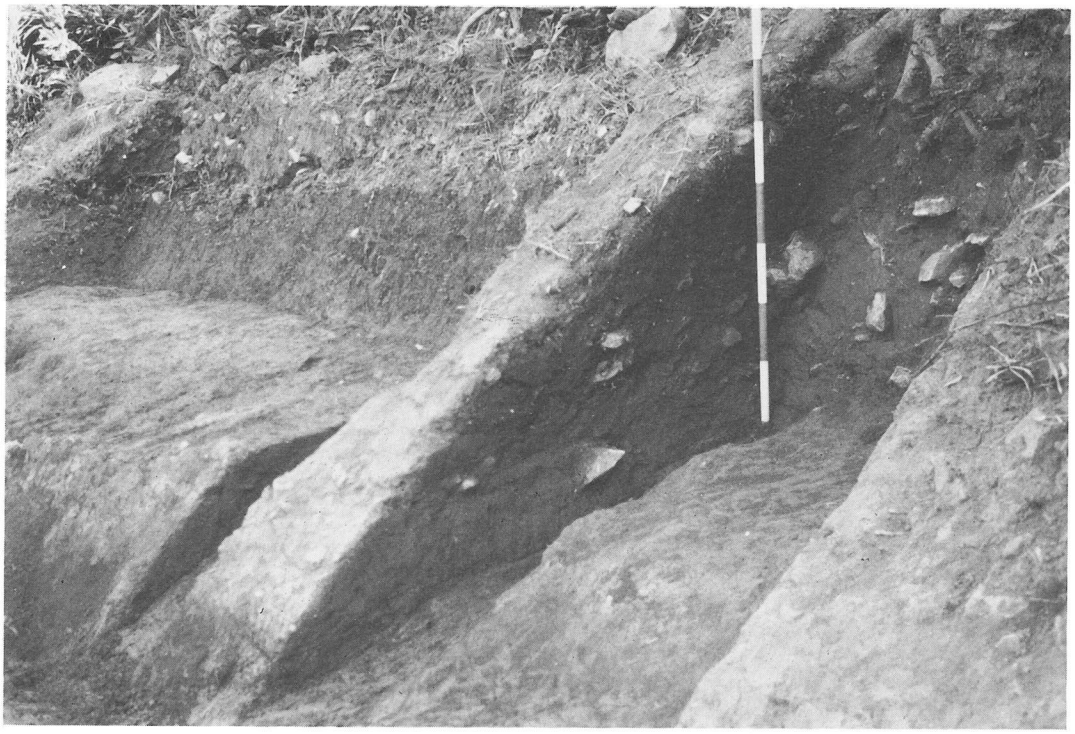
Ａ地区ＳＸ－０１及びピット調査中

Ａ地区ＳＸ－０１、ピット完掘状況

Ａ地区周辺のピット群

A地区全景（西から）

B地区東西セクション1



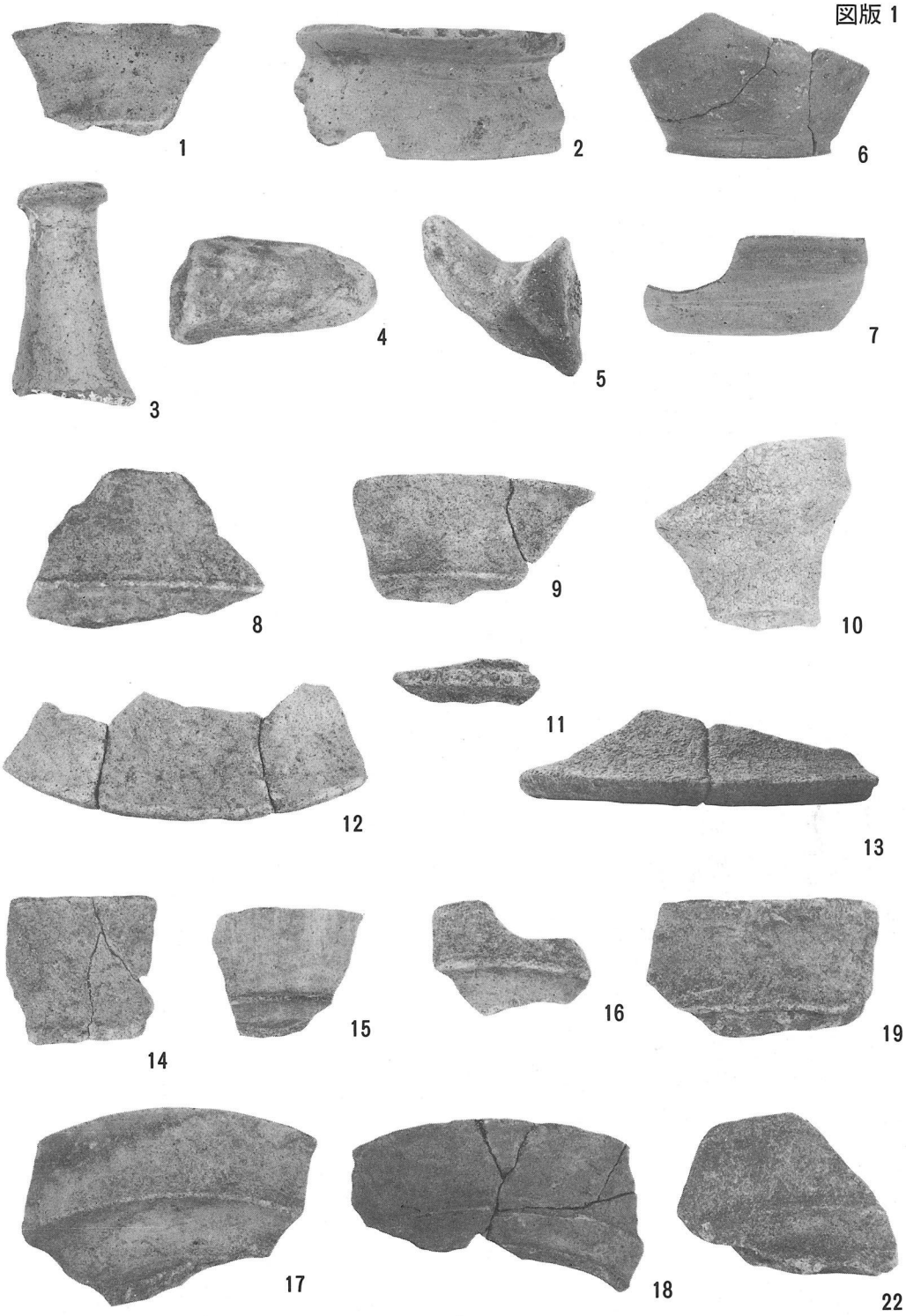
B地区南北セクション

B地区トレンチ状況

B地区東西セクション2

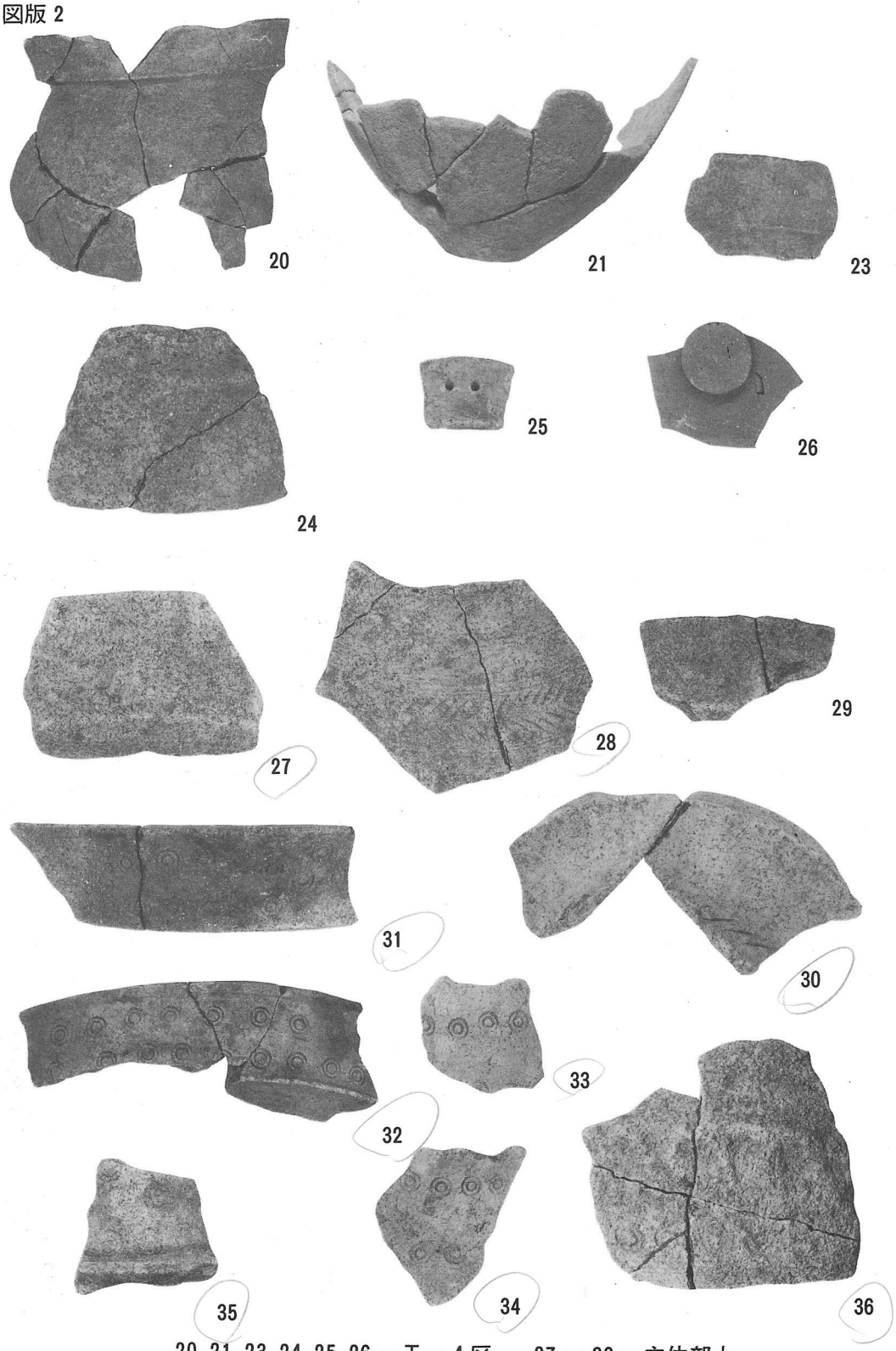
B地区完掘状況

図版 1



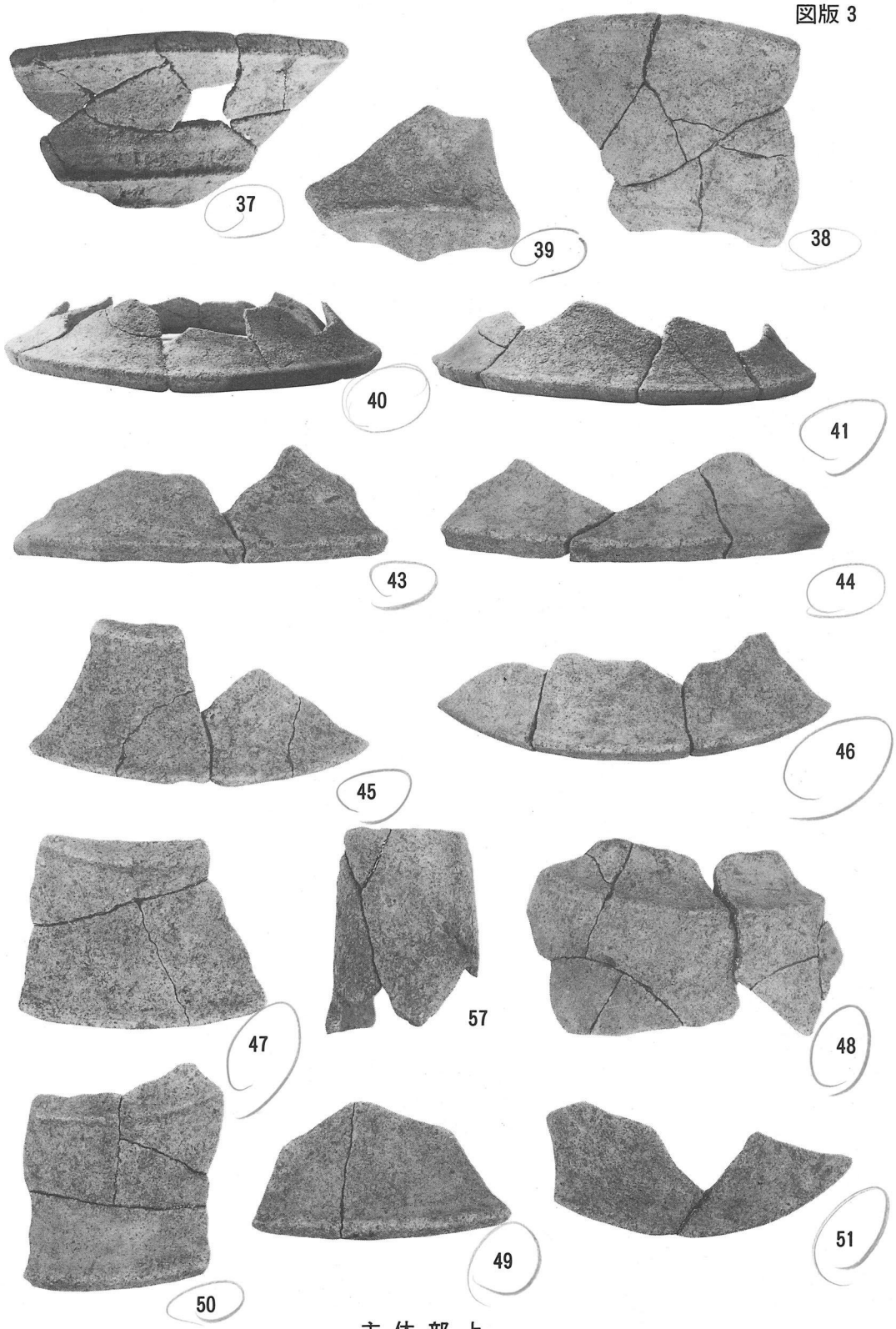
（1～7平所，8～13…T－1区，14，16…T－2区
15. 17, 18. 19. 22…T－4区）

図版 2



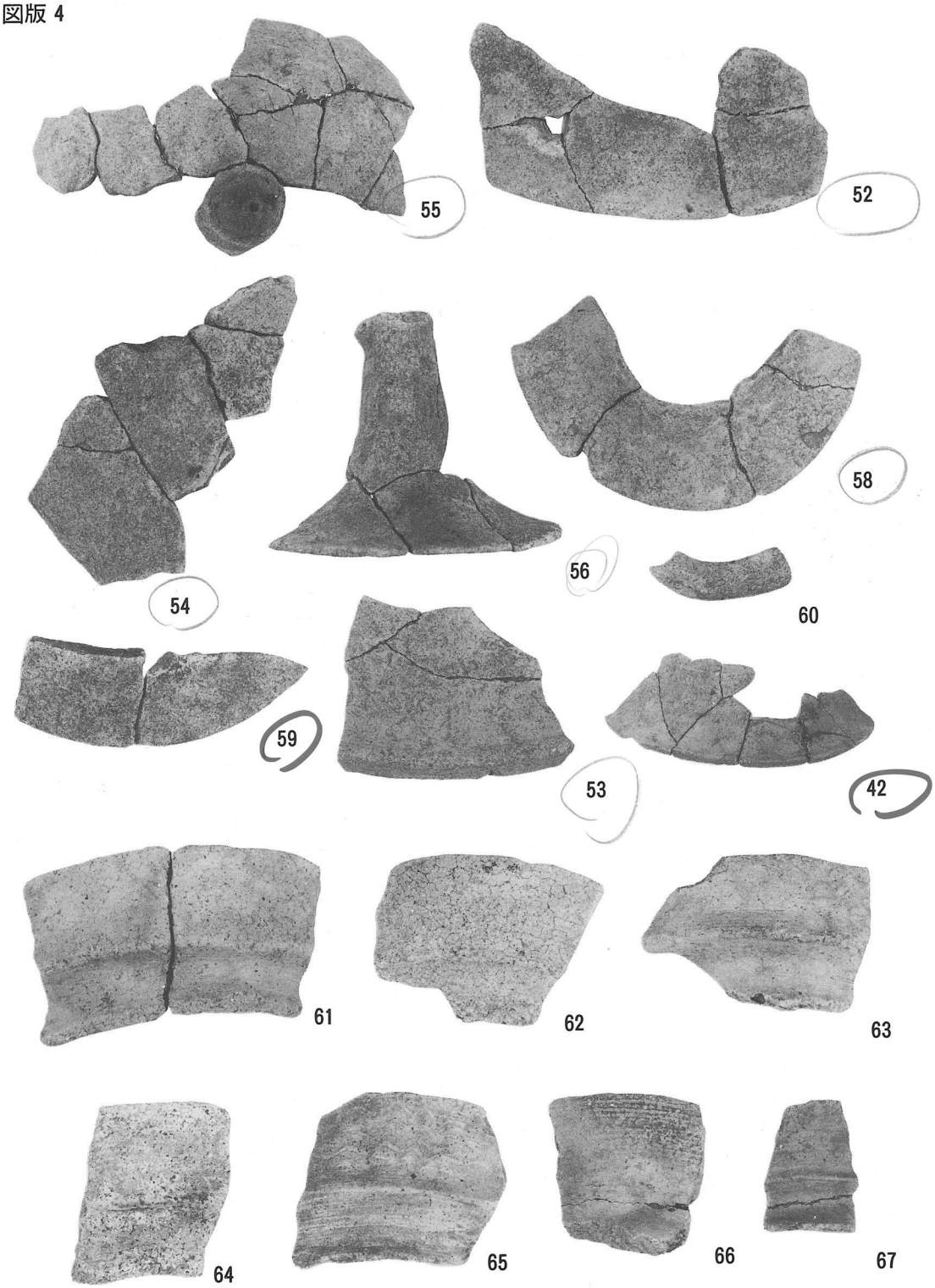
20, 21, 23, 24, 25, 26 … T－4区　　27～36 …主体部上

図版 3



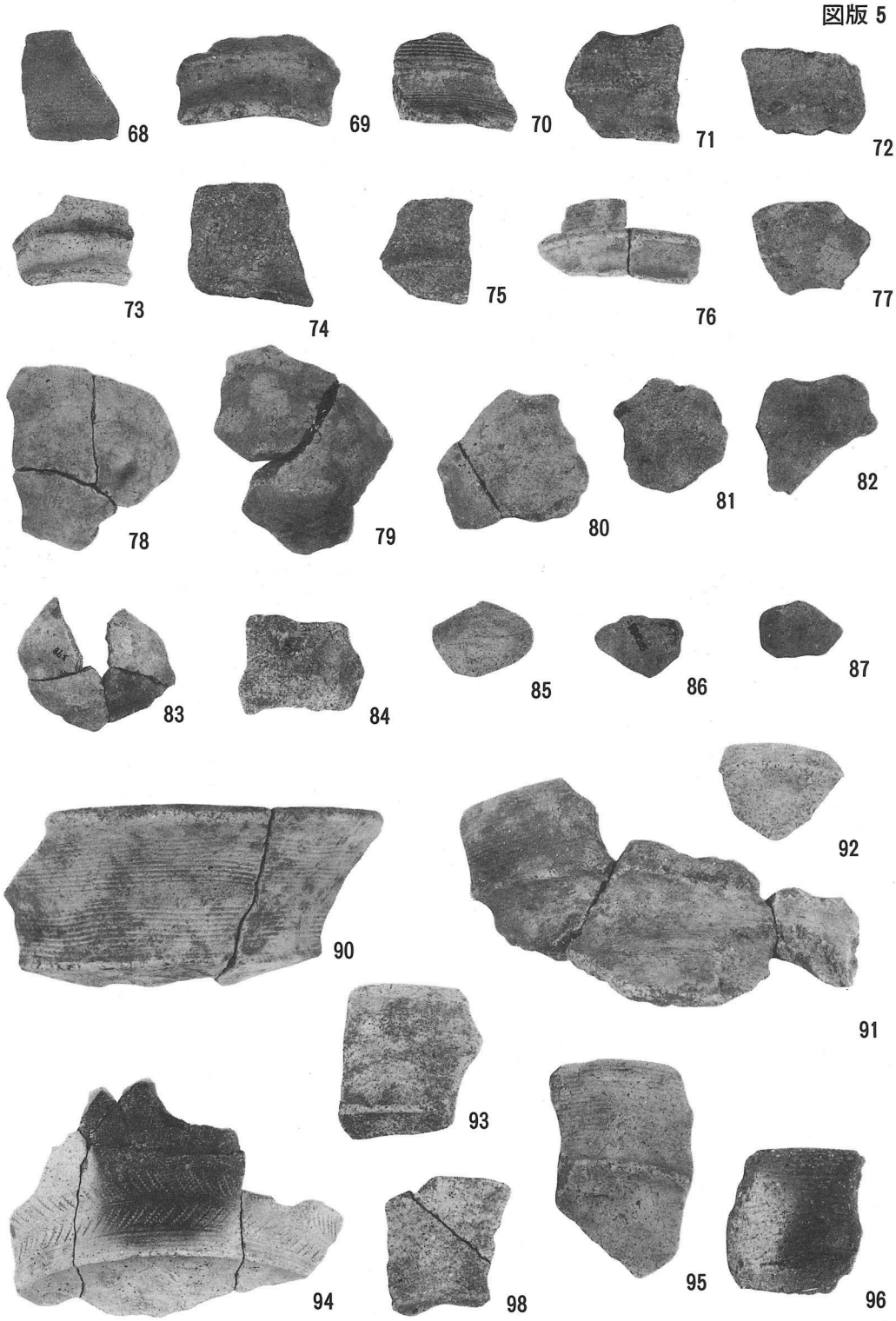
主 体 部 上

図版 4



主 体 部 上

図版 5


68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
90
91
92
93
94
95
96
98

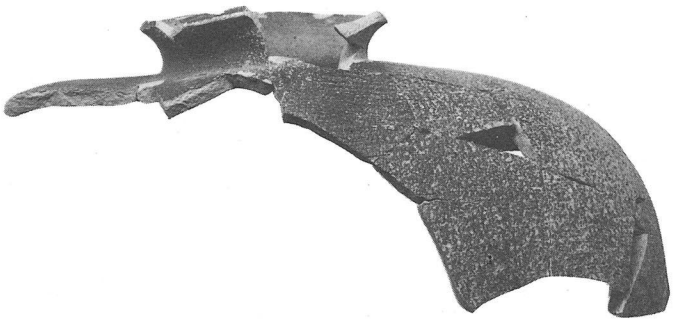
主 体 部 上

図版 6

88

89

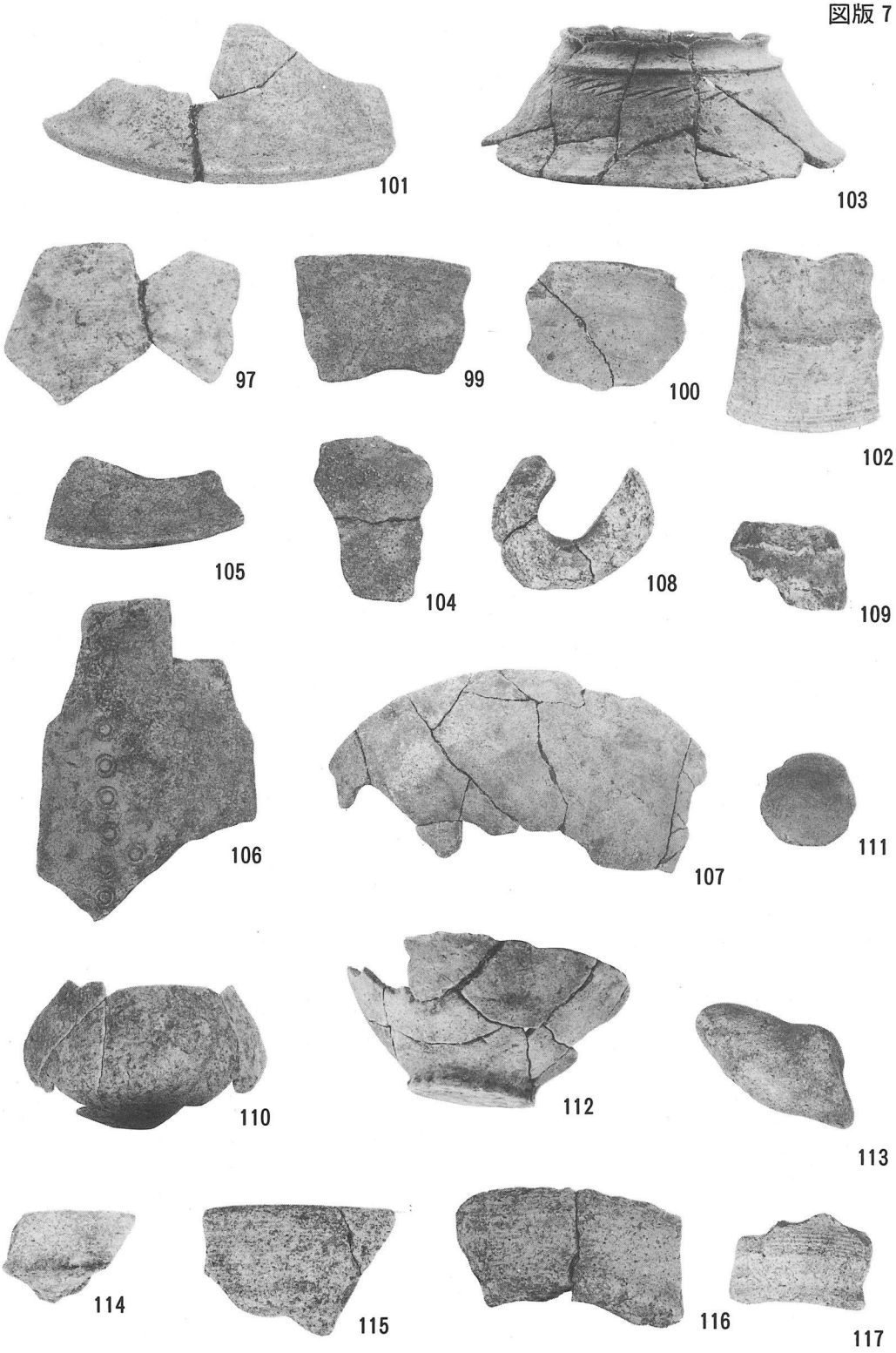
88



182

主 体 部 上

図版 7



（97 ～ 113 …主体部上　　114 ～ 117 …住居址）